つにとりなしてよるへもしらぬ沖のなみ。浦嶋が。たまてはこ明てぞいとゝくやしきか程目出度主君の御判をおかみ申事。一眼の龜のたまさかにふほくにあへることし。とう〳〵領狀申へし。孫や子とも承つて三浦三百五十三騎と長帳に判をすへて君にたのまれ奉る。それより盛長は海のわたりを仕り。ちはの館につき君の御判とさし上ければ。折節ちばの助他行の時分大助出あひ對面して。抑とうごくにおひて。ちばの助かづさの助と申て父母のごとし。一方闕てもあしかりなむ。かづさへ御こし候てかへりさまに旨趣を申へき。これは禮にて候とて。かうたる馬に鞍をゝき。鎧甲を引にけり。盛長は見るよりも引手物はむやくかな。請狀の判はほしけれと。重而申あしかりなむと暇をこうてかへりけり。去間盛長さきをきつと見てあれば。折節ちばのすけ若黨四五騎に先陣うたせ。さめいてうつてちかついたり。盛長きつと見て。馬の上にて對面は恐にて候へとも。君よりの御使なれば。まつひら御免あれといふまゝに。ちばが馬に駒うちそへて。荒增の事をそかたりける。常種聞て。さて親にて候大助は。何とか御返事を申され候やらん承たく候。大助の仰には。かづさのすけがまいらばちばの助もまいらんとの仰にて候。あらそれは恐人たる御返事を申され申され候物哉。たといかつさのすけがまいらずとも。御味方を申たくは一騎なりとも御味方にまいり。まつさきかけて打死して名を後代に上べきみがいて〳〵領狀申さむとて。駒よりしもにとむており。すみすりなかしふてに染。元來もちばのすけ。少分限にて候へば。手勢多も候はず。七百余騎にてまいらんと長判に判をすへて君にたのまれ奉るそれよりも盛長は。いほういなむてうぼくちやうなむあびろかはかみ宇佐山野邊。かなたこなたをふれ

にけり。たのまれ申國は十三ケ國。大名は七拾余人。小名はかすをしらず。ゐれも〳〵と判をすへて君にたのまれ奉る。去間盛長は。國〳〵の御請の判をとりもちて。百廿日と申になどやの御所に參り。君の御目にかけ申。かの盛長を見きく人ほめぬ人こそなかりけれ。去間頼朝。伊豆のお山に御陣をめされ。つゞく味方をまたせ給ふ。ゐれも〳〵と參られけるを。着到つけてみ給へば。頼朝の御勢は。以上三百五拾三騎とじるさるゝ。頼朝御覽して。これは佐か祝言のはしめなれば。面〳〵のめされたる馬ともを。一目見むとの御諚なり。まつ一番に近江源氏の大將に。佐々木の四郎忠綱の。よつしろに白鞍をかせ。六人の舍人にひかせ御前をとをされたり。所〳〵に四目結のかたついて。やさしき名馬の紋かなとどつとほめてとをされたり。其次を見てあれば。といの小黑に白鞍をかせ白ざほさゝせ。六人のとねりにひかせ御前をとをされけり。面白の馬の風情や。此馬と申は。また。牧出の駒にて。いさみにいさむで。前の足をつむとあげ。うしろの足をひつしきかしらをふつてめを見出し。おとりいてゝ嘶ふこれもおとらぬ名馬かなとどつとほめてとをされたり。其次をみてあれは。さも御しうとに北條の四郎時政の。さゞなみあしけといふ馬に。白鞍をかせ白ざほさゝせ。六人の舍人にひかせ。御前をとをされたり。面白の。馬の風情や此馬と申は。骨はふとうて筋多し。左右の面顔しゝもなく。耳はみぢかくちいさくて。うはくびなかくあつうして下くひつつて短し。胸は出てはたはりあり。尾口ちいさく分入て。尾は三重のたきのおつるかことくなり。左右のもゝはからのひわ。てむじゆとはむじゆとはらりともいて。二面さかさまにたゝ見るがことく也。おつさま三づにしゝあまり。よめのつきざまつまね

のほねくろがねをのへたることく也。爪はあつうてつゝたかし。千里をうつともつかるまし。前より見れば秋の鹿遼山をとむたることく也。そはよりみれはにはとりか。大庭におこりいて。時をうたふかことく也。まはりて見れば龍が雲を引つれ。虎が風に毛をふるひ。さうの牙をかみならし。獅子かはぎみをしたりしも。これにはいかでまさるべき。あつはれ馬のいきおひかなとつとほめてとをされたり。是を始と仕つて。さはちの十郎がいかゞちあしげ。かのゝすけがかなつちあしげ田代の官者がびぢよ栗毛。祐經か奥州栗毛。沼田の平内かとひ雀。南條か小鷹かはらげ。古堀か帆かけふね三嶋の源三田か獅子の子に。左右藤太が岩くたき。土屋の三郎虎月毛。さて岡崎かみやまかげ大ぬさの四郎がくろかすけ。惣而名馬の色々は。あしかふち。くろかけ。鶴ふちかけふちあいさうふち。柑子栗毛姫栗毛。われも〳〵とひかれてあり。以上三百廿五騎はいつれもおとらぬ名馬哉とどつとほめてとをされたり。去程に頼朝。治承四年八月。廿三日に。兵具揃馬揃めされて。いつも久しき。まなつるか。嶽にうちあがつて。御陣をめされしに御世をめされんそのために。手勢七騎を。引わかつて。といのやどゝが浦より。御船にめされ安房の。れうじまを心がけ。沖中にしら旗を。ほの〳〵とさし上給へは。三浦横山丹兒玉。此よしを見申あは君の沖に御座有は。いざやさらばまいらんと。百騎二百騎。千騎二千騎。打つれ〳〵參るほどに。むさしの國とかや。こうのろくしよの。くむはいの。宮の前にて。着到付て見給へば。頼朝の御勢は。二十八万。一千余騎に。程なくならせ給ひて。一天四海に光をはなつ平家を。三年三月にせめなひけ天下をおさめ給ふ事八幡大井の。御ちかひとそ聞えける

木曾願書

（大頭左兵衛本）

コトハ爰に信濃の國の住人。木曾冠者義仲は。平家をせめむそのために。五万余騎をそつし。信濃の國をばうつたつて。越後のこうにつき給ひ。木曾の給ひけるやうは。平家大勢にてあるあいだ。越中のひろみへ出るならば。さためてかけあひの合戰あるべし。但かけあひの合戰はせいのたせうによるべからす。いつもわかいくさの嘉例なれば。勢を七手にわかち方々よりもむかふべしと。まつおぢの十郎藏人ゆき家に。一万余騎をあひそへ。しほの手へまはし。からめてへこそつかはされけれ。のこる四万余騎を。てむ手にわかち。だての六郎ちかたゝに。七千余騎をあひしたがへ。北黒坂へむけられけり。にしなたかなし山田の次郎。これも七千余騎にてみなみ。黒坂へつかはれけり。樋口の次郎兼光。五万余騎にてくりからの。だうのうしろへまはされけり。めいごやた五千余騎。松長のぐみの木ばやし。柳原に引かくす。今井の四郎兼平。六千余騎をあひしたかへ。わしの嶋を打渡り。日の宮はやしにぢむをとる。木曾殿一万余騎にて。くりからの北のはづれ。おやべのわたりをし。はにうのもりに陣をとる。木曾殿のはかり事にはたさしを先に立よとてはたさしを先にぞたてられける。五月十一日のみのこく計に黒坂の。たうけへ駒をかけあげ。しらはた三拾なかればかり一度にさつとう

つたてたり。平家も加賀を打たつて。となみ山に打あがり。源氏の勢を御覽してあらおひたゝしの大勢や。爰は山もけむそにて。谷もふかふして。からめでさうなくよもまはさし。馬の草飼すいびむどもに。然へき所なれば。まつ〳〵陣をとれやとて大勢ざつとおりたつてあふ山路に陣をとつたりけり。木曾は八幡の社領。はにうの森に陣をとり。四方をきつと見わたしければ。北のはづれにあたりつゝ夏山や。みねのみとりの木の間より。あけの玉かきほの見えて。かたそき作りの社壇あり前に。とりゐそたちにける。里の人をめされて。あれに御立ましますは。何のみや。いかなる神を。あがめ申そ。いかに〳〵ととひ給へば。八幡大井を。あがめたてまつる當國の。神八幡宮。はにうのやはたと申也。木曾殿なのめならずに御よろこびあつて。手書にかくめいをめされいかにかくめい。われさいはいに當國の。新八幡の御寶前に參事。今度のいくさにうたがひなくかちぬとおほゆる也。ひとつは後代のため。又は當座のいのりのために願書を一筆かきてさゝげむとおもふはいかにかくめい覺明承つて。此儀尤然へう候とて。ゑびらのほうだてより。小硯をとり出し。たたうかみおしひらき願書をかゝんと仕る覺明が其日の裝束は。かちむのひたゝれに。ふしなはめの鎧をき。くろつはのそやおうて。ぬりこめどうの弓わきばさむて。木曾殿の御前に。ひざまついてこれをかくあつはれ文武二道のさて。達者哉とほめられたりかの覺明未南都にありし時。高倉の宮三井寺をたのみ行幸ならせ給ふ。三井寺なむなくたのまれ申し。南都へてうじやうをこさる。南都のしゆとせむぎあつて。返てうをかのしむきうにかゝせられけるに。清盛を平氏のさうかう武家のちむがいと書て其名をえたる名人なれば。

いかてかかきはそむすべき。其願書にいはく歸命ちやうらい。八幡大井は。日域てうていのほむしゆ。るいせいめい。くむののうそたりほうそをまもらむがため。さうせいをりせむかために。三心のきむようをあらはし。三所のこむひををしひらき給へり爰にけいねむよりこのかた。平相國といふものあつて。四海をわがまゝとし。万民をのうらむせしむ。是。佛法のあた。王法のかたきなり義仲。いやしくも弓馬の家に。うまれわづかにきゝうの。ちりをつくひそかにかの。ぼうあくを見るにしれうかへり見るにあたはすうむを。天たうにまかせみをこつかになゞ。こゝろみにきへいをおこさむとほつする刻京都を。しりそけむとともうせむ兩家の。陣をとるじそついまた。あはせすといへと。いつちのいさみをえ。今しむゑつとまほる所に今一陣に。おひてはたをあけ。戰場にして。たちまちに三所和光の社壇を拜す。ぎかむのじゆむじゆくすてに。明らかなりきうと。ちうりくうたがひなしやくわんきなむたこほれかつかふ。きもにそむ。なかむつくぞうそぶさきのむつのかみぎかの朝臣みを。そうべうのしそくに。きぶくして名を八幡大郎と。號せしより此かた。そのもむようたるもの。きけうせずといふ事なし義仲そのごうゐんとしてかうべを。かたふけて年久しいま此。たいこうをおこす事はたとへばゑむじの貝をもつてちよかいをはかり。蟷螂斧を。いからかしてりうしやにむかふがことし然りといへと。君のため。國のために。是をおこすみの爲家の。ためにして是をおこさす。心さしのいたりしむ〳〵。空にありたのもしきかなやよろこばしきかなやふして。ねがはくはみやうけむ。いをくはへれいしむちからをあはせ。かつ事を一じにけつし。あたを四方へしりそき給へ。然は則だむき。みやうり

よにかなひ。ほむけむかごを。（上巻）なすへくはひとつの。ずいさう見せしめ給へ。壽永二年五月十一日みなもとの義仲。（ここつく）敬白と書たりしかの。覺明が筆勢。（ノル）ほめぬ人こそなかりけれ

敦盛

（大頭左兵衛本）

（コトバ）抑此度平家一の谷のかつせむに。御一門さふらひ大將惣而。以上拾六人の組あしの其中に。物のあはれをとゞめしは相國の御おとゝ。つねもりの御子息。むくわむの太夫あつもりにて。物の哀をとゞめたり。其日の御しやうそく。いつにすくれてはなやかなり。梅の匂ひのはたよせのゆふなるに。からくれなゐをめされ。ねりぬきに色〳〵の糸をもつて。秋の野にくさづくしぬふたるひたゝれに。弓手のてつかい兩面のすねあて。むらさきすそごの御きせなが。こかね作の御はかせ十六さいたる染羽の矢。村しげどうの弓。れむぜむあしげなる駒になしぢまき白ぶくりむの鞍をかせ。御身かるけにめされ。めされたる御馬。よろひのけにいたるまてげにゆゝしくそ見えられける。御一門とおなじく。主上の御供をめされ。はまへ下らせ給ひしが（クトキ）御運の末のかなしさは。かむちくのやうでうを。ないりにわすれさせ給ひ。捨ても御出あるならはさまての事はあるまシきを。わか上らふのかなしさはかつうは此笛をわすれたらんする事を。一門の名折とおほしめし。とりにかへらせ給ひて（フシ）かなたこなたの時刻にはや。御一門の御座舟をはるかの沖へをし出す（コトハ）あらいたはしやあつもりは。しほやのはたを心ざし。駒に任せておちさせ給ふ。かゝりける所に。むさしの國の住人。しのたうのは

たかしら。熊谷の次郎直實。今度一のたにの先陣とは申せども。させる高名を極ず。無念たぐひはなかりけり。あつはれ爰元をよからんかたきがとをれかし。をしならへてむすとくむで。ぶんとりせばやとおもひ。なぎさにそふて下りしか。あつもりを見まいらせなのめならずよろこふで。駒のたつなうつすべ大音あけて申す。あれに落させ給ふは。平家かたにおいてはよき大將と見籠申て候。ひつかへし御せうぶ候へ。かく申兵者をいかなる者とおぼしめす。むさしの國の住人に。しのたうのはたかしら。熊谷の次郎なをさね。かたきにおひてはよきかたき候ぞ。まさなくもかたきに。よろひのあげまきさかいたを見せさせ給ふもの哉。いかに〳〵とをつかけ申す。あらいたはしやあつもり。熊谷と聞しめされ。のがれがたくおぼしめしけれとも。駒に任せておちさせ給ふ。かゝりける所にはるかの沖を見給へは。御座ふねまぢかくうかむてあり。あのふねをまねきよせのらふす物をとおぼしめし。腰よりもくれなゐに日出したるあふきをぬき（カヽル）はらりとひらかせ給ひて（フシ）沖なる船を。目にかけてひらり〳〵とまねかるゝ。船中の人々に。人しもこそおぼけれ。門脇殿は御覽じて。ほろかけ武者のふねまねくは。左馬のかみゆきもりか。むくわんの太夫。あつもりかあれを見よとの御諚なり。惡七兵衞承り。いつくにざうと申て。ふなばりにつつたちあかり。長刀を杖につき。かぶとをぬいてきつと見て。いたはしの御事や何として御座ふねにめしおくれさせ給ひけむ。つねもりの御子息に。無官の太夫あつもりにてわたらせ給ひ候ぞや。めされたる御よろひ御馬のけ（ケ）にいたるまてまがふ所はまし（ハ）まさすいたはしさよと申けり。門脇殿は聞しめし。あつもりならは此ふねを。ゝしよせてたすけよす（下）いしゆかむとり承り。ろかいかぢを

たてなをし。ふねをなぎさへよせむとす。此程二三日ふきしほれたる。北風のなこりのなみはけふもたつ。風は（上）木を折てなみはごうじやのごとく也。白浪せがいをあらひ。いさごを天にあぐれはたゝ雪の山のことく也。小船こそをのつから。弓手へもめてへも。おもふさまにはあつかはるれことにすくれたる大船に。大勢はめされたり。たゝむなみにせかれつゝ。次第〳〵にいつれとも磯へよるへき様はなし（ツヽ）あつもり此由を御覽じて。いや〳〵此馬を。およがせてあの舟にのらふす物をとおぼしめし。駒の手綱かいくつて。海上に打ひて。うきぬしつみぬおよかせらるゝ。いたはしやあつもり。老武者にてましまさば。三つにのりさかつて。時〳〵聲をたてたまはゞ。御馬はいちもつなり。おきの御座ふねに。なむなく馬はつくへきに。わかむしやのかなしさは。馬にはなれてかなはじと。おぼしめされける間。前がさに乘かゝつて。さうのあふみをつよくふみ。たづなにすがり給ひて。うきぬしつみぬおよかせらるゝ馬一もつとは申せども。たゝむなみにせかれつゝおよきかねてそ見えにける。くまがへこのよし見まいらせ。まさなの平家や。沖の御座舟は。はるかに程をへたてつゝ。しかもなみかせあらふして。いかてかかなはせ給ふへき。ひつかへし御せうふあれ。さなき物ならば。中さしをまいらせむと弓と矢をうちつかつてそゝろ引てかゝりけり。あつもり御覽じて。中〳〵さひ矢に射ひてられ一門の名折とおぼしめし。駒の手つなをひつかへして。とをあさになりしかは。水まりはつとけさせつゝ染羽のかふら打つかひかうこそ詠し給ひけれ（上クリ部）あつさ弓矢をさしはけて引時は。かへす事をばしるかそもきみ（コトハ）熊谷も心ある弓取にてあつとおもひ（イロ）さうのあふみけはなつて返哥とおぼしくてかく計（下ロ）いたつきの。はやは

づれむとおもひしに。やといふ聲にたちそとゝまる　かやうに詠して待かけ申。去間あつもり。弓と矢をからりとすて。御はかせひむぬいてうけてみよとてうたれたり。熊谷さらりとうけなかし。とつてなをしてちやうとうつ。二打三打ちやう〳〵と打合。たがいにせうふ見えされは。よれくまむ尤とて。たがいに打物からりと捨。よろひの袖をひつちかへ。むずとくむて二人が。兩馬のあひにどうとおつる。あらいたはしやあつもり。心はたけくいさませ給へとも。老むしやの熊谷にて物のかずともせざりけり。やす〳〵と取ておさへ。かぶとちぎつてからりとすて。腰のかたなひむぬいてくびをとらむとしたりしが。餘に手よはくおもひ申。さしうつふいてさうがうを見たてまつれば。うすけしやうにかねくろく。まゆふとうはかせ。さもやどとなきてむしやう人の。年例ならば十四五と見えさせ給ひたり。くまがへ餘のいたはしさに。すこしくつろげ申。さも候へ上らふは。平家がたにおひてはいかなる人のきむだちにて御座候ぞ。御名字を御なのり候へ。あらいたはしやあつもり。老むしやのくまがへにくみしかれさせ給ひ。世にくるしけなるいきをつぎ。げにや熊谷は。文武二道の名人とこそきゝつるに。何とて合戰にはうなき事をば申ぞ。我等は天下のてうしんとし。雲客のざしきにつらなつて詩哥くはんげむにちやうじたりしみなりしかども。此二三ケ年。一門の運つき。ていとをあこがれいてしより此かた。ぶしのいさめるはうをはあら〳〵しつて候。それ人のなのるといふは。たがいの陣にむらがつて。いくさみだれの折から。やなき箙を腰に付。つばなきたちをぬき持て。これはそむでう其國のなにがし。たれがしと名のつて。打物のせうふをけつし。又くむでせうふをけつするとこそきゝつるに。われはかたきにをさ

へられ。下よりなのる法とは。今こそ聞て候へ。あふ心へたり熊谷。名字をなのらせくひをとつてなむちか主の義經に見せむためなよし〳〵それは世にはかくれもあるましきぞ。たゝそれかしかくひをとつて。なむちがしうの義經に見せよ。見しる事もあるべし。それが見しらぬ物ならばかばのくわむしやに見せてとへかはの冠者が見しらすは。此たひ平家のいけどりの。いか程おほくあるべきに。ひきむけて見せてとへ。それか見しらぬ物ならば。名もなきものゝくびぞとおもひて。くさむらに捨をけよ捨ての後はやうもなしくまかへとこそ仰けれくまがへ承つて。さては上らふはぶしのいさめるはうをばくはしくしろしめされぬや。よに物うきはわれらにて候。君の御意にしたがつて。身をたすけむとすれは。おやとあらそひ子とたゝかひ。はからざるつみをのみ作るはぶしのならひ也花のもとの半日のかく月の前の一夜の友。清風樓月ひくわらぐようのたはふれも今生ならぬ氣緣と承る。此度の合戰に人しもこそおほけれ。熊谷か參りあふ事を先世の事とおほしめし。御名殘候へ御くひを給はつてたゝ奉公の。其ちうに後世をとふらひ申へし。あつもりは聞しめし。なのらじ物とおもへども。後世をとはむすうれしきに。さらばなのりてきかすべし。われをばたれとかおもふらん。かたしけなくも淨戒の。御舍弟にておはします。門脇のつねもりの三男に。いまた無官はかりなにて。太夫あつもり。生年は拾六歳。いくさはこれがはしめ也さのみにものな。おもはせそはやくひとれや熊谷　熊谷うけ給はつて。扨は上らふはくはむむの末にて御座ありけるや。何御年は拾六歳。なにがしがちやくしの小次郎生年十六歳にまかりなりて候が。さては御同年にまいつて御座ありけるや。かほどになき小次郎。みめわろく

いろ黑く。情もしらぬあつまゑびすとおもへども。わが子とおもへばふびむ也。あらむざんやなをいへ。けさ一の谷の大手にてかたきまれいかはなす矢を。弓手のかいなにうけとめなにがしにむかつて。矢ぬいてたべと申せしを。いた手かうすてかととはばやとおもひしが。熊谷程の弓取がかたきみかたのまのまへにて。とふへきかとおもひ。はつたとにらんて。あらゆいがいなの直家や。其手が大事ならばそこにて腹をきれ。またうすでにてあるならば。かたきとあふてうちじにをせよ（クトキ）味方の陣を枕とし。しのたうの名ばしくたすなといふてあれば。誠そとおもひなにかしか方を名殘おしけに一目見。かたきの中へかけ入てより後は其ゆくゑもそむせす。さても熊谷がつれなく命ながらへ。むさしの國にくたり。直家か母にあひて。うたれたりといふならはかむろの母がなげくべ〳〵（ヘヘ）し。經盛とやらんも。花のやうなる若君を。なぎさに一人のこしをき。さこそなげかせ給ふらむ。つねもりの御しうたむさて。なをさねかおもひをば。物によく〳〵たとふれば。流水おなし水なれとふちせのかはることくなり（コトハ）熊谷餘のいたはしさに。またさしうつふいて御かほを見たてまつれば（サシ）

〳〵せむげむたるりやうひむはあきのせみのはにたぐへ〳〵ゑむてんたりしさうがは遠山の月に相おなし〳〵なりひらのいにしへ〳〵かたのゝ野邊のかり衣〳〵袖うちはらふ雪の下〳〵すいたいこうがむ〳〵きむしうのよそほひを（同フシ）たとへば繪にはうつつ（ウヽ）とも。此上らふの。御すがたをふてにもいかてつくすへき（コトハ）熊谷心に案しけるは。いや此きみの御くひを給はつて。なにかしおむしやうにあつかりてあれはとて。千年をたもち万年のよはひかや。末代の物語に。此君をたすけはや　おもひ。なふいかにあつもり。平家かたにて仰らるへき事は。むさしの熊

谷と申者と。なみうちぎはにてくみはくむでありつれとも。わか子の直家におもひ替。たすけ申候と。御物語候へととつて引立奉り。鎧に付たるちりうちはらひ馬にたきのせたてまつり（ツヽ）直實も友に馬に乘。西をさして。五町はかりゆき過。うしろをきつと見てあれば。あふみげむじの大將に。めかだまぶちいはみつい。四目ゆひのはたさゝせ。五百騎計ておつかくる。弓手を見てあれば。なり田平山ひかへたり。めての脇には。土肥殿七騎ておつかくる。上の山には。九郎御ざうし。白はたをさゝせ。御近習にとつては。むさし坊弁慶。ひたち坊かいぞむ。かめゐかたおかいせするが此人々を先として。聲〳〵に申やう。むさしの熊谷は。かたきとくむするが。すてにたすくるは二心と覺たり。二心有ならは熊谷ともにうちとれとわれも〳〵とおつかくる。此君のありさまを物によく〳〵たとふれは。この内の鳥とかやあしろのひをのことくにて。もりて出へきやうはなし。人手にかけ申さむより。なをさねか手にかけ後世をそれがしとふらはばやとおもひて又むすとくむてとうとおち。いたはしや御くひを。水もたまらすかきおとし。目よりたかくさし上鬼のやうなる熊谷も東西をしらてなきゐたり（コトハ）熊谷なみだをとゞめ。御しがいをかなたこなたへをしうごかいて見てあれば。よろひの引合にかむちくのやうでうしたむの家にひちりきそへてさゝれたり。又めての脇を見てあれば。まき物一くはん有。何なるらんとおもひ。いそぎひらいて見奉るに。あらいたはしやあつもりの。都出の言のはをくれ〳〵とあそはしたり。此君都に御座の時。あつぜつしの大納言すけかたの卿のひめきみ。十三にならせ給ひしが。天下一のびしむにてまします。仁和寺御室の御所にて。月次の管絃のありし時。あつもりは笛のやく。同じがくにて琴

引給ひし御すがたを。一目見しより戀となつて哥(サシ)によみふみにかきこさる。其文かずのかさなりてあふせの中となり給ふ。中三日と申に。平家ていとの花洛をさつて西海のはたうにおもむき給ふ(コトハ)あらいたはしやあつもり。御みはつの國一の谷に御坐有とは申せども。御心はさながら都へのみそかよはれける(サシ)おぼしめしたされたる時に。作られけるよと。おぼしくて四季の(フシ)ちやうをそかゝれける。先せいやうのあしたには。かきねこづたふうくひすの。野邊になまめくしのひねや。やけひのかすみ。あらはれてそともの花もいかはかり。かさねさくらに八重櫻。九夏三伏の。夏の天にも成なりぬれば(マヽ)。ふちなみいとふか郭公。よゝのかやりひ。下もえてしのぶる戀の心する。くわうきくしらんのあきにもなりぬれば。おのへの鹿籠田の紅葉。まくらにすたく。きり〳〵すきかてやはきの咲ぬらん。けむとうそせつの冬のくれにも成ぬれは。谷の小川もかよひぢも。みな白妙に四方なるといへともきえて跡もなし。名殘おしき古郷の。木々の木末を見捨つゝ。今はまた一の谷の。こけぢの下にうつもるゝ。つねもりの末の子の。むくわむの太夫あつもりとかきとゞめてぞをかれけるかれを見これを見たてまつるに(コトハ)。いとゞなみだはせきあへず。御しかいをば郎等にあづけをき。御くび笛まき物ともにもたせ。大將の御前に參り此よしかくと申けれは。大將御覽して。あらふしぎや此笛は。なにがし見しる所の候。一とせ高倉の宮御むほむをくわたての時。天下にこえだせみおれとて二くはんの笛あり。せみおれをば三井寺にて彌勒に廻向し給へり。こえだをば御最後までもたせ持せ(マヽ)給ふよし承はるが。みなせくはうみやうぜむにてうたれさせ給ひし時。此笛平家の手に渡り。一門の其中に笛にきりやうをめされしに。じや

くはんなれどもあつもりは。ふへにきりやうの仁なりとて。くたされけると承はる(サシ)けさ一の谷のたいりやく所にて笛の。とを音のきこえしは。此人のふきけるかとて。大將なむだをながさせ給ひければ。しるもしらぬもをしなへて。みな涙をぞながされける(コトハ)あつもりは名大將。熊谷いしくも仕たり。此度のけじやうには。むさしの國長井の庄をとらするぞ。いそぎまかりくだれとの御諚なり。熊谷が郎等とも所知入せむとよろこふ所に(下クトキ)熊谷何とかおもひけむ。涙のひまよりかくはかり(下略)人となり。人とならばやとぞおもふ。さらずば終にすみ染の袖(コトハ)かやうに詠し御前をまかりたち。何としてあつもりの御じかいを。けむじざうひやうの駒のひつめのかよふ所に捨をき申べき。をくり申てあればとてよもざいくわにはおこなはれじ。いや〳〵をくり申さばやとおもひ。しほやのはたへ下り。小船一そうこしらへ。さぶらひ一人ざつしき二人三人申付。狀をかきしたゝめ八嶋のいそへぞをくられける。さても平家は元暦元年二月七日に一の谷をおち。浦づたひ嶋づたひして。十三日の早朝に八嶋の磯につく。熊谷か送りの船も同し日八嶋のいそにつく。かたきみかたの事なれば其あひはるかにろかいをとゝめ。大音あけて申。抑けむしかたよりも。熊谷かわたくしの使にまかりむかつて候。門脇殿の御内なる。伊賀の平内さへもむ殿に申たき子細の候とたからかによははる(クトキ)あらいたはしや平家は一の谷をおち。かいろはるかにおちのひたれば。さうなうけむしの勢のかゝるへしともおほしめしよらす〳〵此程のもうきに〳〵なみまくらかちまくら〳〵夢おとろかす〳〵松のかせ(同フシ)命もしらぬまつらふね。こがれてもものやおもふらん。心ほそくおぼせしに。げむじのふねよと聞しめし。われさきに〳〵と。ろかいをはやめおち

ゆけとも。東國のけむしにあはむといへる平家なし。大位殿御覽してふかくなりかた〳〵。世はげうきに及て。時まつほうにきすといふ。たとへばいこくのはむくわひが。わたつてのつたりとも。あれ程の小船に何程の事のあるへきぞ。たれかあるゆきむかつて。聞て參れとありし時。平内左衞門承て存る道の候。聞て參候はんと。やかたの内へつつと入て出立其日のしやうぞくは。はなやかにこそ見えにけれ。はたには白きかたひらみなしろ折てひつちかへかちむのよろひひたゝれの。四つのくゝりを。ゆる〳〵とよせさせ。やうばいたうりのさうのこて。びやくたむみがきのすねあて。くまのかはのもみたひ。白かねにてへりかねわたし。あくちたかにふむこうたりしゝにほたむのはいたてし。糸ひおとしのよろひの。みの時とかゝやくを。わたがみつかむてひつたて。くさすりなかにさつくとき。ゆつて上帶ちやうとしめ。九寸五分のよろひとをし。めてのわきにさいたりけり。一尺八寸のうちかたなを。十文字にさすまゝに。三尺八寸候ひける。しやくとう作りたちはいてなしうち烏帽子にはちまきし。白えのなぎなたをつえにつき。我におとらぬちうとう。七八人あひくし。はしふねおろし打のりおもてにたてをしとませざゝめかいてをしよする。はむくわひかいきほひもあふかくやとおもひしられてあり。ことハ送りのふねにをしむかつて大音あげて申す。抑けむじがたより。熊谷殿のわたくしの使とは。何事の子細ぞや。送りの者申。さむ候あつもりを熊谷が手にかけ申。餘いたはしくおもひ申によつて。御しかい色々の武具。又は進上をそへてこれまて送り申て候。いそぎ御座ふねに御うつしあれと申。もとくに聞てあらふしきやあつもりは。御一門の御舟にめされ。あはのなるとにましますと承りをよひて候。やはかうた

れ給ふべき。もし僞にて候らん。送りの者申。御不審はことはりまことといつはりをばたゝ船中を御覽せよと申。元國聞て。げに〳〵これはいはれたりとて。送りの舟にわがふねをゝしよせ。長刀をつえにつき。くトヤ送りのふねをさしうつふひて見てありければ。げにと色〳〵のぬひ物したるひたゝれに。あつもりの御しかいとおほしきをゝしつゝみてそをきにける。むらさきすそこの御きせなが。金作りの御はかせ。十六さいたる染羽の矢。フシむらしげどうの。弓もありまかふ所はましまさす。元國餘のかなしさに。なぎなたをからりとすて。送りのふねにのりうつり。御しかいにいたきつき。なけともさらに涙なしさけへとも聲は出さりけり。やゝありて元國はなみたをなかし申やう。いたはしや此君の。一の谷をお出の時此きせなかをたてまつる。おとなしやかにあつもりの。いつしか御一門。世がよにまし〳〵て。四海に風のおさまりつゝ元國に所知しらせ。見るとたにおもひなばいかはかりうれしかるへきと。仰られし其時は。元國がうれしさを何にたとへむかたもなし。誠の時にはとうてむじ。めされざるあつもりを一門の御舟にめされつゝ。あはのなるとにましますと。申たる元國かこころの内のふかくさよ。今一度元國かと仰出され候へとて。きえいるやうになきければ。送りの者も供人も。けにことはりや。たうりとてみな涙をぞながしける。ことハ送りの者申。是は使の身にて候。いそぎ御しがいを御坐舟に御うつしあれと申。元國聞て。げに〳〵おもひにばうしおもひわすれ候とて。あつもりの御しがいを。わがふねにうつし申。大船にこぎよせてこのよしかくと申ければ。門脇殿も經盛も。なにあつもりがうたれたるといふか。さむ候と申。あらふしぎやあつもりは。くトヤ一門のふねにのり。あはのなるとにあるよしを。風の便

りに。聞し程に。いかはかりうれしかりつるに。熊谷か手にかゝり（フシ）さてはうたれて有けるかと涙なからに出給ふ。女房たちにとりては。女院をはしめたてまつり。むねとの女官百六十人。もはかまのそはをとり。みなふなはたにたち出て。御しかいにいだき付。これは夢かうつゝかと。一度にわつとさけはれしを。物によく〳〵たとふれば。これやこのしやくそむの。御にうめつの二月や。十代みでし十六羅かむ五十。二類にいたるまて。わかれの道の。御なげきかくやとおもひしられたり（クトヤ）やゝありてちゝつねもり。おつるなみたのひまよりも。あらむさむやあつもり。一の谷を出し時。古郷のかたを見送り。心細けに立たりしを。いさめばやとおもひあらふかくなりとよあつもりよ（ヤ）三代くわひ門の家をはなれ。かばねを野山にうつみ。名をはむてんの雲ゐに。あくべき身か。（クトヤ）らうどうの見るめを。はちよかしといひてあれは。さらぬ躰にてなぎさまてくだりしが。笛をわすれて候とて。取にかへりし其時。友にかへらんとおもひつれとも。かたきみかたにをしへたてられ。又二目とも見ざりし也（フシ）情ある熊谷にて。かたみこれまて送りたり。むなしきしかいこのかたみ。けふは見つあすより後の戀しさをたれに。かたりてなくさまむなふ人々との給ひつゝ。もたえこかれ給ひけり。平家かたの人々は今一入のなみたなり（コトハ）其後熊谷が送りたる狀をめし出し。大將なれば此狀を義經はし送られけるか。使は是非をわきまへす。たゞ門脇殿と計申。とても伊賀の平内左衛門と。書たる狀にて有間家長文をつかまつれ（下色カヽル）承り候とて。ふねのせがいにひざまづき。狀を給はりさしあげ。たからかにこそよふたりけれ（上紙）直實謹而申不慮に。此君に參會したてまつし間直に勝負を。けつせむとほつする刻俄に。おむできのおもひにばうじ

かへつてふげいの。いさみきえ。あまつさへしゆこをくはへ。奉る所に。多勢一度にきほひかゝつて。東西にこれはいる。かれは多勢。これはふせいはむくわひかへつて。ちやうりやうがげいをつゝしむたま〳〵。なをさねは生を弓馬の家に生れたくみを。らくせきにめくらしいのちを。おなしうす。陣頭かタ口せゝばむ〳〵にをよむで。自他くわがの。面目をほとこせりさても此度かなしき哉や。此君と直實ふかく逆緣をむすび。奉る所なけかしき哉つたなき哉。此惡緣を。ひるがへす物ならばながく生死のきつなをはなれ。ひとつはちすの緣とならん哉かむきよのぢしよをしめしつゝ。御ほたひをねむころにとふらひ申へき事まこと僞こうもむ。かくれなく候此趣をもつて。御一門の。御中へ御披露あるへく候仍恐惶謹言。元暦元年。二月七日むさしの國の住人熊谷の二郎直實（上）進上門脇殿（二）の御内なる。伊賀の平内左衛門の尉殿とよふたりけり（サシ）御一門うむかくけいしやう。同音にあつとかむし給ひ。けにや熊谷は。遠國にてはあはうらせつ。ゑひすなとゝつたえしか。情は。ふかかりけるそや（ヤ）文章のたつしやさよ筆勢のいつくしさよ。か程やさしき兵に。返狀なくてはかなふましいと。大位殿の返狀を。經盛の自筆にあそばしてたぶ。使文を給はり。いそぎ一の谷にこきもどり。熊谷殿に見せ申（サシ）。熊谷いかにして。弓矢の冥加なくして。經盛の御筆をおかみ申さむと。三度いたゝきひらいて拜見仕る其御書にいはく（サシ）あつもりかしかいならひにゆいもつ給はりおはむぬ。此（下）たひ花洛を打立つしより此方。なむぞふたたびおもひかへす事のあらんや（ヤ）さかむなるものゝおとろふるは無常のならひ（ヤ）あへるものにわかるゝ事はゑどのならひ（ヤ）しやくそむらこらてむの一しのわかれにあらすや（ヤ）いはむやほむ（下）ふをやさむぬる七日に。

うつたつしよりこのかた　つはめ來つてかたらへとそのすがたを見す　きかむつばさをつらね空に音信とをる
といへと。其聲をきかす　されはかのゆいせきの。きかまほしきによつて（其同）天にあふき地にふしこれをいのる
神明のなうじうぶつたのかむのうを。まつ所によつて。七日か内に。これを見る内には。しむ〳〵をいたし外
にはかむるい袖をひたすによつて生れ。來れるにあへり喜悦のはういなくしてはいかゝ其すかたをふたたひ見
む。すみすこぶる。しゆみのいたゝきひきうしてさうかいかへつてあさし。すゝんてこれを。ほうせむとすれ
はくわこおむ〳〵たりしむそき。こたへむとすれば。未來やう〳〵。たる物か。万端多しといへと筆帋につく
しかたし。これはむさしの。熊谷の返し。狀（下）とそようたりける（下曲餘）去程に熊谷。よく〳〵見てあれは菩提の心
ぞおこりける。今月十六日に。さぬきの八嶋をせめらるべしと聞てあり。われも人も。憂世にたからへてかゝる
物うき目にも又。なをさねやあはさらんめ。おもへは此世はつねのすみかにあらす。くさはにをく白露。水にや
とる。月よりなをあやし。きむどくに花を詠じ。榮花はさきたつてむしやうのかせにさそはるゝ。（下）なむろうの
月を。もてあそふともからも。月に先たつてうゐの雲にかくれり。人間（ハル）五十年けてむの内をくらぶれば夢まほ
ろしのことくなり。一度生をうけめつせぬ者のあるへきか。これをほたいのたねとおもひさためさらんはくち
おしかりし次第そと。おもひさため。いそき都に上りつゝ。（中）あつもりの御くひを。見れは物うさに極門よりも
ぬすみとり。我かやとにかへり。御僧をくやうじ。無常のけふりとなし申。（下）御こつをとりくひにかけ。昨日ま
てもけふまても。人によはけを見えしとちからをそへし白ま弓今は何にかせむとて。みつに切折三本の。そと

ばとさため。淨土の橋に渡し。宿を出てひかし山。黑谷に住給ふ。法然上人を師匠とたのみたてまつり。もと
いきり西へなげ。其名をひきかへれむしやう坊と申。花のたもとを墨染のとをちのさとのすみころも。いまき
て見るぞよしなき。かくなる事もだれゆへ風にはもろき露の身と（フシ）きえにし人の。ためなれはうらみとはさら
におもはす（コトバ）かくてれむしやう黑谷にねむふつ申てゐたりしが。紀伊の國におたちある高野山をおかみ申さ
はやとおもひ。上人に御暇を申。くろだにをまた夜を籠て立出。都出の名所に。ひがしをながむれば。せいがむ
じ今くまの。清水やさかちやうらくし。かの清水と申は。さがのていの御願所。すみとものざうりう。田村丸
の御こむりう（イロ）大同二年にたてられ。よろづの佛の願よりも。千しゆのちかひはたのもしや。あつもりのしや
うりやうとむしやうほたひとゐかうして（コトバ）西をながむれば。たむばにおひの山。おり口にたにのだうみねの
だう〳〵北をかへりて見送れば〳〵内野を出てれむだいの〳〵ふたおか山の〳〵はかしるし（フシ）見るになみたもせきあへ
す。みなみをなかむれば。とうしさいし四つか。としはゆけともおひもせぬむつた川原とうちながめ。山崎た
から寺。せきとのゐむをうち過。やはたの山を下向して。これたかのみこのみかりせし。かた野の原をとをり。
きむやのきじは子をおもふうとのにしげきませかきの。やとをすくれはいとたの（下）原くぼつのわうじ。ふしおか
みてむわうじへそまいらるゝ（ヨツ）天王寺と申は。しやうとくたいしの御願なり。七ふしきのありさまこうはふ
るともつきすましかめゐの水のなかれのたえぬそたつとかりけると。ふしおがみ候ひ。（下）あまのへまいらるゝ大
明神と申は。かうやゐちむしゆておはします。御山に法師を。さづけてたはせ給へと。懇きせい申ばや高野山

へまいらるゝ。辱も高野山と申はていせいを。さつてしはくりきやうりをはなれむにむじやう。八ようのみね
やつのたに。がゝとしてきしたかし。せいらむ木末をならし夕日の影のどかなり。わうかの寺よりみゑいたう
のたに大さうかいの大日。百八十尊をへうせり。さてまた大たうより。おくのゐむへこれも大日の。三十七尊
をへうせり。こむだうの本尊はあしゆくほうしやうみたしやかこれまた大しの御作なり。大たうと申は。なむ
てんのてつたうをまなむて。とそつてむのはむりをかたとり十六ぢやうのほうたう上は千たいのあみだ。中は
せむじゆの。廿八ふしゆしもはやくしの十二神生々世々にきはなくしゆしやうあくしゆのつみきえ。來迎の三
尊をおがむそたつとかりけると。ふしおかみ候ひおくのゐむへぞ參りける。みちのほとりのはつこつはいさご
をまくがことくなり。いよ〳〵念佛申。おくのゐむへまいり。あつもりの御こつを籠をき。れむけたにの片原
にちしきゐむと申。庵室をむすひ。嶺の花を手折。あかの水をむすひ。おこたひすましれむしやう八拾三と申
に大往生をとけにけり。惡につよけれは善にもつよし。文武二道の名人。かむかはしらす本朝にかゝる兵あら
じと。かむせぬ人はなかりけり

なすの与市

（大頭左兵衛本）

なすの与一助高は。大將の御前にゆみとりなをしかしこまる。判官御覽じて。御邊を是までめす事は。別
の儀にてもあらす。沖の平家がたよりも作物をいたしてあり。御邊は弓の上手ときく。ひとやいよとの御諚な
り。与一謹而かしこまる。判官御覽して。あらやう〳〵しや仕れと仰けれは。重而辭退を申。あしかりなむと
存知。与一申けるやうは。扇をいむする事はいとやすく候と御請を申。御前を罷立。馬引よせてうち乘。和田
祖父兒玉黨。大勢ひかへておはします。陣の前を通る時。与一申けるやうは。それ物の面白きは。夏山や。青
葉まじりの木の下に。ひわとこがらと鶯と。そむぢやう其木のえたに。いく聲なくと目には見すして。聲ばか
りとむでにかけ。いのちもころさす羽もちらさすひきめかふらの。めはしらにいこふでとるぞ大事なる。あ
れ躰にまのあたりにさしあらはれたる分のもの。与一冠者にてあらすとも。ゆみとつてひかむものかなめきは
より射ちぎつて。海上の花とちらさん事いとやすく候と。から〳〵とわらひけれとも。与一もやうゆうならさ
れば心細さはかぎりなし。しほてむなかひのひたる程。駒海上にうちひて。沖をきつと見てあればあふきたて
たる其間七八段ぎりと見ゆる。爰はとをしと存れば。しばらく陣をぞとつたりける。沖の平家三万六千騎。

月卿雲客相殘らす。唯今出たるなしうち烏帽子の小男は。扇の射てか面白しとさゝめきわたつて見え給ふ。先一番にすゝむふね。女房達の御坐舟也。そつのすけ殿ふげむじとの。さらしな殿おば捨殿。（カヽルウ）じやうどうしの丹後のおつほね。あはの内侍にかつさのおつほねを先として上らふ女房百六十人下ともに二百八十余人が。まむまくをあけさせ。あつはれ時の見物かなとざゝめきわたつて見え給ふ。其沖を見てあれは先帝を始たてまつり。御一門にとつては。右大臣宗盛。御子の中將ときざね。四位少將ありもり藏人の大夫業盛。修理大夫經盛。能登のかみのりつね。扨僧號にとつては。三井の僧都けむしむ。ぎやうめい坊のあしやり法性寺の執行能圓。扨侍に取ては。越中の次郎兵衛かつさの。五郎兵衛惡七兵衛景清。ひだの三郎左衛門此人々を先として。諸國のじゆりやうけむひいし。かりむしやにいたるまで。あつはれ時の見物哉とさゝめきわたつて見え給ふ。去間与一は。くかをかへつて見てあれば大將をはしめ奉り。武州にちゝふとの。相州に和田殿。田代の冠者のふつら。川越の大郎（マヽ）重家。小山の判官。うつのみやの彌三郎ともつな。山なさとみを先として。源氏六千余騎が渚へさつとおり下て。いゝやあてむずらん。いゝやそむせむと手にあせをにきつて。こゝをせむとゝおぼしめす。うしろはうりうおほはか。前はむれたかまつ。八くり八嶋もちかかりけり。比は元暦元年三月十八日の事成に。昨日吹たる西の風いまたなみこそしつまらね。ふねはうきゝの物なれば。風に任てたゝよふたり。能登のかみのはかりことに。けむじに恥辱をかゝせむためく。くるりをかまへてたてたれは。濱風ははけしゝひらりくるりとまふたるは陸をまねくかことく也。与一か馬と申は。明六歳の野とりの駒。なみかせにたはふれて。

あかつつおちつ此馬が手綱をうつてそくるひける。ふねもさしきになをりかね。扇やつほに定まらねは。乘たる馬もくるひけりもつたるゆみにあせたつてあふあましつべうこそおぼえける（コトハ）去間与一はうしほをむすひてうつとし。わうじやうの方をふしおかみ。南無やなすのゝ龍神氏神正八幡大井。なみかせしつめてたひ給へときせいをふかく申。ふりあふぬき見てあれは。寔に氏神八幡の御かこにてや候ひける。風も少しづまつて今はかうと見ゆる。与一心におもふやう。女のたてたる分の物。中さしにている事は花見てえたをたをる風情とおもひ。上矢のかぶらをぬき出し。さつとつまよつて見てあれは。まちつと此矢羽ひろくし。濱風にふかれあしかりなむとおもひ。うしろわに乘。前輪にをしあて腰の刀をするりとぬき。はしりはを二三度。さつ〳〵とかいて捨ければ。源氏平家御覽して。誠のいてそよくするとほめぬ人こそなかりけり。其後与一鐙ふむばり鞍かさにつつたちあかり。大音あけてよははるやう。けむし六千余騎の中よりも。扇のいてにさゝれ申まかりむかつたしよくわんを。いか成者とおほしめす。下野の國の住人かな村の大夫に十八代の後胤。伊名の所司か子。なすの与一助高とて生年拾八歳に罷成。そもあふきと申は上下によつてしやべつの候。かみかかなめかいつくとやつほを承つて仕らんと申。大臣殿きこしめし。あつはれかうのものかな。扇ならはいつくにてもいさいたらんをかちとはおもはて。やつほをこふたるやさしさよ。じよのものはかなふまし。以前にあふきたてたるたまむし出て。や所をとり傳ていさせよとそ仰ける。かの玉むしか由來を委たつぬるに。もとは九國の住人花見の太夫がばつし。はぎやの八郎に京腹のいもうと。あさ名をばあふのまひとめされしか。一とせ女院北山

へ花見の御遊のありしとき。百首つらねて參らせあぐる。日本一番のときはにおとらぬひしむとて四季に名をこそかへらるれ。春はあをやきいとさくら。夏はまたふちのはな。秋は七夕のあまの川瀨に關すへて。たえ〳〵みゆるは瀧の水。ちかふていろの。ませはとて名を玉むしと付らるゝ梅地の織紅梅。十二ひと重のきぬのつまをたか〳〵とおつとつて。ふなばりにつつたちあかつて。かれうひむがの聲をあげ。あらいまめかしの射て殿や。日本はひろしと申せとも花の都にてとゞめたり。車は千里をかくるといへども。くさびをもつて本とせり。針をさけてはみつをい。かうかいさけてはまちをい。はさみ物にはくしを射。扇をたてゝはかなめを射るとは申せとも。かなめの邊はめつらしからず。くもての邊をあそはせと袖かさしてたつたるはかなおかゝ繪圖に。うつすとも筆もいかてかをよふへき与一此よし聞よりも。ことに大事の所を。やつほにさゝれつものかな。射んず物とおもひて。かぶらをうしほにうちひて。三人ばりに十三そく。取てからとうちつかひ。もとはずうらはずひとつになれときり〳〵とひきしほり。かつてつよにぞはなちける精兵のいるやのくせとして。手もとにはならずしてにほひ〳〵に遠なりし。あふきのくもての邊をは。ひふつつと射きつたり。あふきはやうの物なれは。花のことくにさつとちる。かふらはいよ〳〵とをなりし。大臣殿のめされたる。御座ふねのせかいのうちにし海上へさんふと入たりけり。平家三万六千余騎。ふなはたをうちたゝき。いたりやくかのけむし。あふいたりやしよくわんと。しはらくなりはしつまらす。大將は御覽して神妙なりとの御諚にてやかて御判を出さるゝ。去間与一はたくる〳〵とひむまいて。あはのなるとををしわたり岩やかせと

をうち過。花の都に着しかば。關東に下つて頼朝にかくと申す。神妙也との御諚にてやがて御判をいださるゝ。ふたつの御判給り。一門のこらずひきつれ所知入とこそ聞えけれ

景清附籠破

（大江本）

今度頼朝の御代を召れし由來をくわしく尋るに御舍弟九郎御曹子御意たけく渡らせ給ふ由來なりとそ聞へける斯て建久元年に君うへ上京まし〳〵て二度の御上洛同南都のくやふをのべ給ふどふれいなれば父ふ殿先陳とこそ聞へける去間重忠本田次郎を召れいかに近常承れ今度も重忠が先陳を給わるなり都のみにかきらず五城内の者ともかとふぞく一を成と聞本田どの御定なり近常承てわつはに取てはたれ〳〵ぞ片田の熊王ほうらい丸福田の万ざいを先としてわつはどもに赤地のにしきのひたゝれを着せ丸巻の太刀をかつかせて弓手の脇をそ通しける地白廿人に打ゑほしをきせ白柄の長刀かつがせて馬手の脇をそ通しける父ふ殿の御勢は七千余騎頼朝の御勢者拾万余騎とそ聞へける先陳も後陳も平安堀を御立あり南都ゑとてぞいそぎける東大寺四つの門は勇城長野間小山宇都の宮各堅給ふ其中にとつてもてかいの門こそ大事ありとて父ふ殿の四天王ほうしやうをあさける程の兵五百余騎にて堅めらる斯て南都苦養はまつ最中と聞へける其中に取わけて物の哀を留めしは平家の侍大將に悪七兵衛景清にて物の哀を留めたり哀世の中にひんほどつらき事あらししたしき人にはとふさかりうとき人にはいやしまれひんじやの家に生るゝほどつたなかりける事あらし承れば鎌倉殿南都の供養と聞て有法江

の庭とは存れとも君の敵てましませば忍ひ都へ登りつゝ頼朝を一刀切申大臣殿のきやうやうにほうぜはやと思ひければ尾張のあつたを立出て忍ひ都へ登りけり清水坂の片原にあこおふと申て遊女の有けるにあさからず契りければかれが宿所に立寄て南都のやうをくはしくとふあこおふ承契る情のせつなさありの儘に語りける景清なのめに悦ふて急き南都へ下り人の心を内をも引見ばやと存れば出立様こそ面白けれもゑきにをひのはらまきを草摺なかにさつくときもちの衣を上に着て上帶しつかとしめたりけりちやうけんのけさを以てほふかむりを仕り大臣殿より給りたるあさ丸と云打刀を十文字にさすまゝにぬつたりしけいぢをあい皮にて緒を立つめばきにはくまゝにつくしみの長刀の四尺八寸有けるかぬけば玉ちるばかり成をさやをはきつとはついて弓手の脇にかいかふて父ふ殿のかためてましまし手かいの門は景清はあふさらぬていにて通りける父ふ殿の御内成本田の次郎か是を見てあらけのふこそとかめければ如何成人そふ〳〵是は父ふ殿の堅めてましまし手かいの門とは知らざるか夫よりもとれと云景清は聞よりもあつことなしと存れば長刀前に取直し近寄て小こへ立申様のふくるしうも候はん北陸道の片原にすまい仕るつゝいの淨明めいしゆんなれや通してたべとそ申ける幕の内成父ふ殿此由を聞し召し大幕つかんで打あけあら不思儀の事共や只今のなまりの聲は北陸道の片原のなまりのこへと聞て有夫よりももとれといへ運命つきはてちつともたてつく物ならはからへとの御定なりさ承り候へとて其勢は三百余騎大刀長刀の柄はつしおとまりあれとて追懸る景清は見るよりもあらわれぬると存つれははいたりしけいちを戸有所になげすて三百余騎の眞中にて長刀のきつてにはこむ手なく手ひらく手石づきおかいつか

んではらり〳〵とないたりけりくつきやうの兵を三拾騎計まつしぐらに切ふせ殘りの兵ともにいた手うす手追せて四方へはつとおつちらしきりの方をむすんで我身にさつと打かけて春日山につつと入世間の躰を閑居たり

景清心に思ふ樣しよせん爰にて叶すば明日ははん若寺に御參りと聞て有山伏の姿をまなびねらはばやと思ひかきのすすかけしかまのときんまゆはつかに引こふてたけとひとしき有笈お取てかたに打懸いの目すがいたる大まさかりを打かつき峯入したる山伏達を廿人計ともないはん若寺の御前にて賴朝の御參りお今やおそしと待居たり去間重忠此由を御らんじて荒おびたゞしの山伏達や面〳〵はとこ山伏と見なしたるそ重忠は奥山伏と見なしたり奥にとつても松嶋岩嶋平和泉あけすか岩屋そとのはま大峯なんとを行として磯につかれたる行人達と見なしたりさりなから先よりは九番跡よりも拾貳番めにいかにもせいはからたかになまめいたる客僧を誠の山伏と思ふとふかくおかくなよかた〳〵あれこそ昨日手かいの門にてのひけたいしゆのたぐいなれ只追つめからめ取て君の御目に懸申せ本田との御諚なり　中　近常承て其勢は五百余騎太刀長刀のさやはつしおとまりあれとて追懸る景清は見るよりもあらわれぬると存れは懸たりし笈をある所にぬき捨あさ丸をするりと拔て五百余騎を打やぶり又きりの法をむすんて我身にざつと打かけ人より先に景清はしのびて京へ登りける彼景清かふるまいは只はんくわいもかくやらんあらむさんや景清今はせんほふつきはてゝ我身をだいて立たりしがいかにもして主君の敵を討はやと思ふ心の内こそ哀れ成れ爰に一つのたとへ有一年高倉の宮三井寺を賴みぎやうごうならせ給ふ三井寺なんなく賴み申南都へちやうしやうおこさる南都の大しゆせん義あつて返狀をかのしんきやうにか

ゝせられけるに清盛を平氏のそふこふ武家のちんかいと書て送る其咎によつて眞行か手をなんはせのふ給り一千余騎を卒し南都へ責て登りける南都の大衆達しんきやう壹人に賴れ申清盛を敵に請叶ふましいとせんきして心替りをし給いたり　クトキ上　あら無さんや西しやう坊か賴申すたいしゆたちは心替りし給へは今はせんほふつきはてゝこつかい人のまなひをししんのうるしをかい取てつきめこたいにしつかとさすみのうら返しきるまゝにやぶれたる笠を首に懸ほそき杖をたよりとし　フシ中　南都をば立出てふたゝび都へ登りけり奈良坂やはん若寺の當りにて討手の勢にそ行あゐける日比は片をならべひざをくみしほふばい達間の當りを通れどもあれはいかにさいしやうかとめかくる人もなかりけり夫れも心かかふなれば鰐の口をのがれてきしんが門迄立出てなるみがたに下りつゝ醫師を求て療治をし本の如くに平養なつて斯てさいしやう熊野にこそ新宮の十郎行家の御手につけ申し治正四年の夏の比あつたの宮の願書の時に西しやう坊とそ書たりける其後信野に下りつゝ木曾殿の御手につき申し北國戸山はにうの宮の願書の時にさいしやう坊とは書すして木曾の大夫角命とそ書たりけるあわれうるしのなかりせばさいしやう坊か命はあやうかりつる物そかしかく申景清もそれにすこしちかふましこつかい人のまなびをしてわらわばや思ひて四條の町へ立出てしんのうるしを賣取てつきめこたいにしつかとさす夏のうるしの物うさは五躰をしむるそたへかたきむざんや景清は我身を急度見てかくなりはつるも誰ゆへそ主君の爲と思へばうらみとわ更に思われず　〳〵　いかに二そうじんつうの重忠とは申すとも彼景清かふるまいを見知らるびやうはなかりけりみのうら返し着るまゝにやふれたる笠をは首にかけほそき杖を便りとし清水坂の片原に

百四五拾人直居たるこつかい人にましわりなふ人直〳〵にこなたへも施行たへと時そいとゝむかしを戀衣〳〵
袖は涙に口ぬべし去間重忠本田の次郎を召れかゝる法ゑの庭にはすいぜんしやくまと申て大事の事の候そあの
やうなるこつかい人は四季のちやうしを背なり先春はきのへきのとにてそうぢやうにてあろふす夏はひのへひ
のとにておふしきにて有べし穐はかのへ辛にてひやうぢやうにてあろふす冬は水のへ水のとにてはん式にて有
へし土用わ土のへ土のとにていちこつにてあろふす是に依でいしおんにやうにもそふおふひやうばんいつとつ
かい候今は秋にて候程にひやうぢやうにてあろふするか不思儀や只今施行たべとかふつるこへを聞もひやうぢ
やうなり弓手の眼はしんのぞふより通して其色墨く見ゆる馬手の眼はかんのぞふより通して其色青く見ゆるそ
ふこくそふぢやうの形ちまさしく御身はこつかい人にてわなして平家の侍大將に惡七兵衛景清と見たは父ふが
ひか事か「詞斯とふたるか無念ならばこふ申す重忠か君に御いとまを申武藏へ下りてあらん時大御所へ忍入め
んろふするがきにてもねらい度はねらい候へ此重忠かあらんず程はふつつと叶ましいとまつ白にいわれ申あふ
はづかしと存れば打うつむねてそ居たりける景清意に思ふ樣あの重忠と申は我等か父のかつさの守を元服の親
と頼ませ給ふと承り忠わ我等か家の忠しげは父ふの重にて父ふの畑山重忠と名乘らせ給ふと承るゑぼし親とゑ
ぼし子わ七生迄の喜緣と承わつて候に情なくも重忠の一度見ゆるし給わん所は無念なり其儀にて有ならば迚も
死す命を重忠に參り合とにもいかにもならばやと思ふ心のうちを先として上成みのをさつとぬき捨いつくにか
指たりけんあさ丸をするりとぬひてみけんにさしかざしあふをとまりあれとておつかくる父ふ殿は御覽して心

得たりとの給いて四尺二寸のこうびら拔て渡りあふてそ見へられけるあやうかりつる所に御馬廻りの人々か一
度にはらりもをり立て重忠をおしへたて奉り景清中に取込て火水になれともふたりけりちたひかげ清心はごう
なり力は强し持たる刀は劍しんけいかじゆつたならふ手をくだいてそ切たりける馬に取て切所小口と小脇尾の
上さんづりやうの毛からつらとからはなつかいおさつふと切て落す人に取て切處まつこふ小ひたい左右の小手
ふりあをぬけば打かぶとほろ付ととふ中小手の板のはつれをはらり〳〵とないたりけり馬人のきらいなく乘こ
へ〳〵さん〳〵に切てそ廻りけるくつきやうの其數あまた切とゝめ殘りの兵ともにいたでうすておふせて四方
へはつと追散し惣て景清かねろふ所はとこ〳〵と谷の堂に峯のどうおとはかつらき常盤の里南都にては東大寺
今度は清水詣てまで一度ならす二度ならす三十七度にをよんで心を盡しきもをけし君をねらい申せともくわほ
ふいみしくまし〳〵て父ふ殿にさとられ申前後にかなふ事もなし去間賴朝梶原を召ての御諚にはいかに梶原承
れ賴朝世を取たりといへどもとりたるしるしもなし夫をいかにと申に彼景清と云者に爰かしこにてせばめられ
よにも口惜存るなりいかにもして彼者をちうじて捨よと仰ければ梶原承て御前の罷立てしろかつし板を其數余
多取寄札にけつらせ筆にて物をそいわせける平家の侍大將惡七兵衛景清を討てもからめても六原とのに參らせ
たらんする輩にはけしやうはのそみたるべし景時判とかきとめて京白河の辻々　札立て十日計はさしたる印も
なかりけりかかりける所に清水坂の片原にあこおふと申女北野もふてをしけるか京白河の辻々に立たる札をよ
ふて見るに九年つれたる我妻の惡七兵衛景清を討たらんと書て立てありあこおふ余りの悲しさに此札をぬすみ

取鴨川かつら川へも流さばやとは思ひしか共 詞 中にて心を引返しまてしばし我心それ日本六十六ケ國に平家の知行とて國の一ケ國もなし平家一みのものとては妻の景清はかりなりつゝむとすると此事ついにはもれて討りやうす景清討れて其後に不慮に思をせんよりも九年つれたる情には二人の若のあるなれば此事敵に知せつゝ景清を討とらせ二人の若を世に立て跡の榮花にほこらんと思ひすましたあこおふか心の内こそおそろしき 詞 此札をくわいちうし六原殿に參り札の面に任せ參りてさむろふと申上る頼朝なのめに思召あこおふを召れくわしくとわせ給へばあこおふ承りさん候景清か行衛を人々存ぜんも理りにて侍ろふ此間は尾張のあつ田にさむらいしか平家の御代の御時よりも清水をしんこふ申月に一度は參り給ふ明日は十八日必自か宿所へ來り給ふべし本より大酒の事なれば酒をすゝむる物ならば前後を知らて伏べし其時自か參ろふずるにて侍ふ大勢そつしおし寄景清を討取せ給ふ自からに所知をたへなふ我君と申す頼朝聞し召れてうれしうそうあこあふどせ討て所知あとふへしそれ〳〵と仰ければ承ると申てしや金三拾兩あこおふに下し給ふあこおふ給わりて清水坂へ歸りつゝ其日の暮を待たるは情のふこそ聞へけり 詞 あら無ざんや景清是とは夢にも知らすして明日十八日清水へ參らばやと思ひ尾州あつたを打立て四日ちの所なるを其日の暮程に清水坂の片原なるわが宿所に立寄て門ほと〳〵とおとづるゝ内よりもたそと答るいやくるしふも候す景清成と申すあこおふ斜に悅て急き立出て門を開き景清を内へぞしやうじける二人の若ともは父をはるかに見なれねば父があたりに立寄てむつましけなる風情成りあこあふ泪を流す風情にてあらいたわしや景清平家の御代の御時そ悪七兵衛景清とて公家にも武家にもにくまれす一時

詣てし給ふにも中げん小物花やかに馬くらに具足じんじやうにてさこそゆゝ敷おわせしにいつしか平家に過おくれせいき玉ほこやつれはて御とものふて景清はさ そ物浮をぼすべき 詞 かまへ置たる事なれば種々の肴を取出し景清に酒をぞしいたりける景清は見るよりもいとゝ敷子共はなみ居たりしやくに立たるは女房なりいづくに心か置るべきさしうけ〳〵の呑程にさしもこうこうなる景清も敵の事をはつたとわすれ嬉ふそふあこおふどせ清水へは明日參ろふずるにて候いとま申てさらば迎あいの障子をさらりとあけれん中にうつりてとうの枕になみよりて前後も知らず伏たるはうんのきわめとぞ聞へけるあこおふなのめに悅て清水へは御代官にみつからか參ふずるにて侍ふとてうす衣取てかみにかけ門より外に出るとは見へしか清水へは參らすし急六原殿に參り此由かくと申上る頼朝なのめに思召更らば打立兵とて其勢は三百余騎はた一流れさゝせあこおふ先におつ立ておふ景水坂へぞ寄にけり比はいつなるらん八月は十七夜のさよ打更ての事成に月は出てくまもなししたの小草にいたる迄かくるゝ所はなかりけり去間あこおふどぜん形を見れは春の花姿を見れば秋の月みめもかたちも并なし落中一ばんの美人とは申せとも九年契りをこめたりし悪七兵衛を討せんとて大勢卒して寄たるはひとへに鬼神のことくなり三百余騎の兵を門のあたり築地の脇に隱し置我身は内へつつと入只今こそ下向申て侍ふおふ景清とそをこしける景清かつはとおどろきあさ丸をひさの上にどうと置あこおふをつく〳〵と見ていやいや御身は清水へと參らぬ人と見なしたり夫をいかにと申に日本六十六ケ國に平家の知行とて國の一所もなし平家の一みの者とては某計也某か事を敵の方ゑ訴詔して景清を討とらせ二人の若共を世に立て跡の榮花にほこら

んと思ふ共因果たちまちむくふてまつとう世には出ましきそあこおふ余りのふしぎさにいやさわない物をと申てかをに紅葉を引ちらし景清是を見て有事なちんしそ有事をちん　ればもみちの色に見ゆるそさればげでんのりやうじおんぎやうにもなゝの子はなすとも女に心ゆるすなと申す縦の有程に空うたかかいに云たるそあこおふ御前いふこそおそかりけれ廣縁におとり出築地のおふいに手をかけのひ上りて見てあればかしこへ廿騎三十騎甲の鉢をならべつゝ村雲立て扣けり内へはしり歸てにつことわらつて云様はいかにやあこおふごぜんわこせわさなしとちんすれ共ごづめんづあほうらせつかしやくをはやめてをそし〳〵とせむるもいつかで是にはまつさるべき最期の別れいかゞせんやふ女房とこそよばわれけれ　詞　あこおふ余りの悲しさに二人の若の手を引てあいの障子をはたと立れん中ふかく入にけり景清是を見てあらをかしのあこおふか振舞や縦ば鬼の大將八面大王か岩をたゝんて四十余丈に築地をつき黒金の門の立たりといふとも景清程の兵かなと一方打破らて置へきぞゝわんや紙障子のひとへやぶらん事はやすけれ共日比の情とふざのゑしやく九年つれたる情にはごぜは心替とも景清は心かわるまし頓て言葉をかへらるゝいかに二人の若共よ母こそつらくとも今をかきりの事なれば父か顔を出て見よ若共と有しかは無さんや二人の若共は母の所を立はなれ父かひざになみよりて顔をなで髪をなて父よ〳〵と計なり景清は御覽して己か母の心中程ったなかりける事あらし夫をいかにと申に何がしか事をば敵の方へそしやうして景清を討取せ二人の若を世に立て跡の榮花にほこらんと思とも因果忽むくふてまつとう世には出ましき斯あさましき心にて世にしも只は有まし又余の妻にもそふならは一つに是はけいしの中又は敵の子

孫迎惡かろふする度毎にじやけんの杖にて打時は父よ〳〵とよふならは草のかげにて景清が見んずることのむさんさよいかに聞候へ若共よ斯あさましき母にそわんよりしでさんづをなけきこしゑんまのちやうにて父をまてよと語りつゝ兄いやいしを引寄て弓手のひぢのかゝりを二刀かいしてをしふする弟のいや若か此由を見るよりもあらをそろしの父こせや我をはゆるさせ給へとて居たる所をつんと立さらば余所へも行かずしてころすべき父にすかりづく景清は御覽して何と申そいや若よころす父なうらみてころす父はころさずしてたすくる母かころすそ同しくは兄と打つれてゑんまの帳にて父をまてと語りつゝ心元を一と刀あつと計を最期にて兄弟の若共を三刀にかいしつゝ同し枕におし伏て刀をかしこへからりとすてつかれぬおしのゑいやこへうかれこひの風情にて我身をたいてたゝれたり　コトハ　景清心に思ふ様それ弓取の心をたけく持てわこふになるちつとゆるせばふかくになる只今爰許に寄られたる人々の家名承て打死をきわめばやと思ひ只今爰許に寄れたる人々はとうかこう家か家名を承て討死を仕らんと大音上て申す寄手の人々是を聞江間の小四郎吉時御所の源太景末何も是に有りと聲々によばわる景清聞てあふ江間殿と申は當君のこしうと御所の源太何もきらいはなし誠や平家の侍のこうおくの所を覺たり命のおしき時にこそなかいぐそくも同ふ候得又れいのあさ丸計てそうすわ參りそふと云まゝにさつとはしり寄門のくわんぬき取てかしこへなげすてゝ片戸をひらいて戸をまゑにあてそとなる敵は内へとひらり〳〵と招けどそふのふ敵わ寄さりけりあゝまてば久敷に參そうと云まゝに三百余騎か眞中にてひらり〳〵と懸りしを物によく〳〵たとふれば玉ばんにたまらす龍か水を得雲をわけこくふへ上る如く也大勢の中に

わつて入わりたて追廻してさん〳〵に切たりけり手元にすゝむ兵七八十騎切ふせ大勢へ手おわせ東西へはつと
おつちらし走て門を丁と打てころしておいたりし若共にすがりつきばらり〳〵とないて立たりけりかの景清が
心中をばきせん上下をしなへてかんせぬ人はなかりけり

上巻終

籠破

去間景清は。あこおふか居たりける簾中へ向ふて申様。今宵某死んとくるゑとも。敵の心がおくひやうにてぢ
たい兵衛は討れぬなり。暇申てさらば迚。天井に上り。波風せき板をけやぶつて。家の棟につゝ立上り。軒つ
ゝきの在家を拾四五間走つて。夫よりも林の中へつゝと入り。世間をしばらく聞けれは。近つく敵もなかりけ
り。夫よりも觀音の御前に參り。心靜に祈念して。京中迄出けるが。かゝるそふ〳〵敷時の京すまいわむやく。
是より四國西國へも落行ばやと思しがいや〳〵。かやふの時にこそ人をも賴めたのまるれ。又しうとの大宮司
を賴み。尾州あつたへ下らばやと思ひ都をは。夜半計に立出て賀茂川白河打渡り。祇園林の。村烏。うか
れ意か。うは玉の。黑髪も。わかで行わかれ路。留よ大坂の。關の明神伏拜み。大津打出の濱千鳥。友呼こへ
に夢さめて。浮身の旅を。志賀の浦浪寄かへる。海士小舟。唐崎の孤つ松。たくいなきみを。思ふにそ。浮身
の上と。思はれていとゞ。涙もせきあへす。せたの唐橋打渡り。ひばりあかれる野路の宿。露もたまらぬ
森山。面影見する鏡山。まぶちなわて是高の御子の。浮世の中を厭て。立置せ給いたる。むしよ寺を伏拜み。

入て久しき五條宿。年を積るか老曾の森。河風寒き旅人は。佐夜のねむりに夢覺て。越ち川渡れば千鳥鳴。小
野ゝ細道摺はり山。ばんばさめかい柏原。います山中打過て。あれて中〳〵やさしきも。不破の關やの板ひさ
し。月もれとてやまはら成る。たる井の宿を打過て。みのならば花も咲きなんくゐせ河。大熊河原の松風は。
きんのねをやしらぶらん。すのまたあしか及のはし。ひかり有玉の井の。黑田の宿を打過て。大津海津お過し
かば。尾張の國に聞たる。あつたの宮に參り。三十三度の。禮拜を參らせて。つつ立上つて景清は。東をきつ
と見てあれば。まだ横雲はひかさりけり。斯て大宮司のたちにも着しかば。門ほと〳〵とおとつるゝ。內よ
りもたそと答ふる。いやくるしうも候わす。景清成と申。內よりも急き立出。門のじやうを引ければ。景清內
にそ入にける。是にもをさなき二人の若の候ければ。あら無ざんや景清。二人の若を左手右手のひざに置。
おくれの髮をかきなでゝ。今度某都にて。汝等か兄弟の有ゆへ。女の心かにくきにより。がいして是迄
下りたるぞ。不便なるや。若共迎泪。ぐみてそ。居たりける。あら無ざんやあこおふ。扨のみやむものなら
ば。いしかるへき事共を。又六原殿に參。彼景清と申は。色好みのおの子にて。自らにも限らす。尾張の大宮
司の三の姫に契りをこめ。是も十年に成と承。落とも余の方へは行侍ふまし。しうとゝ妻子を賴。尾張へ落
てそさむろふらん。急き討手を御下し有と申す。賴朝聞召れて。あらおそろしのあこおふや。九年迄ちぎりし
者が。重々のそせうする。心の內のにくさよ。自余の女の見ごり聞ごりのためにも有れ。あれはからへとの御
諚なり。承りと申て。あこおふを取ふせ。さう車に打のせ。九條の內をわたし。後には彼女を。鴨とかつらの

落合。伊素せか淵の。深き所をたつねて。伏づけにしたりけり。上下萬民をしなめて。にくまぬ者わなかりけり。其後頼朝梶原を召ての御定には。尾張への討手には誰をか下すべしとの御定也。梶原承て。尾張への討手には然るべうも候わず。夫をいかにと申に。彼景清と申者は。合戰に於て討る事の候はねば。先つしふとの大宮司を召登され。牢舍させられ候て。後日の御沙汰におよぶべきと申す。頼朝げにもと思し召。頓て御狀を遊ばされ。大宮司の達につけ給ふ。大宮司此御書開て拜見仕り。いつよりもきらびやかに引つくろい。御上落とそ聞ける。斯て六原の御所にも着かしば。咎をば何とは知らね共。爰の辻かしこの門の脇よりも。くつきやうの兵がひた〳〵とおりあひて。いたわしや大宮司を。手取足取綱懸て頓て籠舍と見へにけり 梶原差寄て申けるは。何とて大宮司は君朝敵の景清に御ふち候ぞ。景清を出され候へ。出されぬものならば。いたわしなから大宮司の御命を給へしと申。大宮司開召れて。扨は某が咎はなけれ共。君朝敵の景清を。ふちしたる咎に依て。籠舍させられ候ぞや。さらば景清。よび登せ。敵の手に渡さばやと思われしが まてしばし我心大宮司も。心替りをし。景清を敵の手に渡したるなんといわれぬも。恥かしや。無殘や我姫の。恨の程をいかゞせん。情なの父子や。まさしく自か。二世までかねし景清を。敵の手に渡しつゝ。切らせ給へるうたてやと。淵にも瀨にも。身を沈めば跡の。なげきをいかゝせん。氷は水より生すれとも。水より氷はひやかなり。孫は我子の子なれとも。子寄も孫は不便なり。我身を物にたとふれば。小笹の上に置る露。水の上にふる白雪。深山隱れのをそ櫻。木末の花わちりはてゝ。今下枝に一房。さそふ嵐を待風情。我子と孫の不便なれ

は。それかし此儘切る共。景清をたすけんと。案し濟してをはします彼大宮司の。心の内たとへん方もましまさず 梶原差寄て申ける樣は。あらいたわしや大宮司は。此二三日の内に切れさせ給ふべし。形見の物を尾張へ御下しあれと申。大宮司聞召れて。此きわに望んで形見は無役と存れ共。思ふ子細の候得ば 硯れう紙をたび給へ。承ると申て。硯れふ紙を參らする墨すり流し筆を染。其狀に遊ばされける樣は。今度大宮司が上洛の事。別の子細ならす。其故は。君朝敵の景清に。ふちしたる咎に依て。籠舍させられて大宮司は。都にて切らるゝなり。某切るゝ物ならば。頓て討手下るべし。討手下らぬ其先に。急き信野に下り。うん野もちつき。村上堂を頼むへし。夫よりも。奥州へ下つて。平武者を頼むべし。彼平武者と申は。大宮司が爲にわをいなから烏帽子子成り。彼等を頼物ならば。十万余騎は候べし。其大勢を引卒して。急き都へ責登り。宇治瀨田東寺をさしふさき。あみたが峯に城をして。絶て久しき平家の赤旗。落中へぱつと打立て。おごる敵をついとふして。草の影なる大宮司に。只一目見せてたべ兵衞の尉と遊ばして。尾張へ下し。給いける 三日と申に。此狀尾張へ着にけり。景清開て拜見仕り。女房に語りけるは。あら目出度や大宮司は。此二三日の内に。御下向有べしとの御狀也。某は大宮司の仰に隨ひ。奥州へ下り候。三ケ年には上るべし。夫過は五ケ年。〳〵過る物ならば。みちのくにて景清。むなしく成たりと思召。後世をぱとふてたべ。暇申てさらば迚。あつたを立出。樣々急き下る程に。遠江國濱名の橋に着にけり。宿にて景清思ふ樣。いや〳〵奥州迄某一人はる〳〵下りたり共。はや大宮司は都にて切れさせ給ふべし。ゆへもなき某が頼れよといわんするに。頼まるゝものは

一人もなくして。けつく落人有や迚。切られん事は治定なり。とてもしせんず命を。しよせん是よりも都へ登り。大宮司の御命に。かわらばやと思ひ。夫よりも引返し。又都へぞ登りける。迚も登る物ならば一時なり共。とく登らばやと思ひ。一足に弓杖二杖三杖程つゝ。おどり上りはねこへ。ひらり〳〵と登る程にあつたをば。辰の刻に打立て。粟田口にも着しかば。さもあれ今日の日は。何時あらんと思ひて。振あをのひて見てあれば。法性寺の八ツの大鼓を。どふ〳〵と。打たりけり。迚も登りたる序に。先清水へ參らばやと思ひ。觀音の御前に參り。心しづかに祈念して。夫よりも六原の南表のついぢを。ゆらり〳〵とはねこへ。御前のまりの懸りに仁王立にそ立たりける。折節頼朝は。ゑん行だうじてまし〳〵處に。彼景清を御覽して。あのまりの懸りに立たるはいか成者ぞと問給へば。父ふの畠山指寄て申さるゝ。あれこそ君朝敵の景清にて候へ。景清ならはあれはからへとの御諚なり。承と申て。御前の人々に。ざん間本間戸井土屋。あすけ中將横地かすまたの人々は。ひたゝれの露をむすんでかたをこし。太刀長刀のさやはづし。景清を眞中にほふおつとりこめてぞ見へにける。景清は是を見て。あらぎやふ〳〵しの。面々の振舞や。なにかし思ひ切ならば。かた〳〵を切ころさんも天にあからんも。大地を割てくゞらぬとも。景清が儘で有。さりなから此度は。大宮司の御命に。かわらぬ爲に登りてあれば。大刀も刀も何ならすと。からりと捨て景清は。心と繩をそかゝりける。頼朝の御諚には。いつかでぞふ兵の。入つたる牢には入べきぞ。初て牢を作らせよ。承候迚。いち井しらかしとが楠長さ。一丈にとらせ。地へは七尺入上を三尺の。つめ牢に拵。しゆごの木を取寄て。くもでごふしに切込だり。

一尺三寸の。大釘を以て。丁〳〵どぶち付。釘の先をかへさねば。牢の内には。ほらをほつて。つるきを植たる如くなり。ちやう綱は唐むしにて。高手小手にいましめて。七尺余たかの景清を。ふたへに取てをし入。髪をば七わにたはねて。天上のこふしへ。七方へつつたりけり。足をば籠より引出し。三寸間のこふしの。足のぶんのひろふして。弓手馬手へ取ちがへ。山出て七拾五人して。引たる楠の大物にて。あげほだしにぞうつたりける。ひつめ金と申は。うすふひろふ打けるを。景清をいためん爲に。丸ふふたふうたせたり。しつちやうつめがね八そふかきがねどふとふくるるき地引の石。材木を上に取つんたり。腰にどふの綱。三筋ゑつてつけさせ。首には根堀の大つゝを。三本迄かつがせたり。無ざんや景清。牢の内にて。かよふ物はいき計はたらく物は兩眼なり。ぜつたいより其外は。少もうごく。所なし。頼朝の御諚には。景清を召取間迄の事にてこそ候へ。かの大宮司と申は。頼朝ためには下着のそぶにてましませば。對面有べしとの御定なり。承と申て。梶原の源太が牢の戸を開き。大宮司を具足し申す。頼朝頓て御對面有て。此間の牢舍の御しんろふ。思ひやられていたわしふ候。此度のけじやうには重て所知を參らせん。いそぎ國へ下り給へとの御定なり。大宮司聞召れて。あらしよちもしよりやうもほしからす。おなしくは景清を友ない。下るとたにも思ひなば。いかゞは嬉しかるへきと。御泪にむせばせ玉いけり。扨有るべきにてあらざれば。大宮司御暇申て。國に下り給いけり。斯て景清籠舍して。昨日今日とは思へども。七十。五日に成にけり。いたわしとも。中〳〵に申はかりはなかりけり。かゝりける所に。六原の南表の築地を。京わらんへ三人連て通りけるが。先成者か申やふ。

あの新造の牢には。いか成者か入たるぞと申す。跡なる者か申やふ。あれこそ平家の士大將。悪七兵衛景清か。入たる牢ぞと申。中なる物か是を聞。なふ平家の士大將。悪七兵衛景清は。平家の御代の御時は。二そふをさとつて佛神の。けげんなとゝ聞つるか。平家にはなれ申し。景清か二そふも何ならず。源氏方にもまさる兵かあればこそ。やす〳〵と生取て。わつかの牢に押こめては置つらん。弓取は。みると聞とはひとしからざるなどゝ申て。とつとわらつて通りける。景清籠の内にて是を聞。げにときやつばらは。道理を云つる物かな。景清程の兵か。わつかの牢にこもつて。浮目を流す無念さよ。さらば牢を破つて出はやと思ふがいや〳〵。千引の石材に當りて。科もなき牢守共を打ころさんも無ざんなり。いかゞわせんと思いしが。夫も某か餘りをんびんの　たり。いざや牢をやぶつて出。末代の物語りにせさせばやと思ひ。奥の力を出し。ゑいやつとうごきけれとも。千引の石材が重ければ。牢はちつ共はたらかず。本より觀音のしんじ申事なれば。名號をこそとなへける。南無や千手千眼觀世音。生々世々のけおふしや。一文名號めつちうざい。無量佛果得成就と。此文の三へんとなへ。弓手の足をゑいと引た。誠に觀音の。りやつこそ不思儀の。方便にてや候いけん。一尺三寸の。大釘かふつつときれて。左右の足は内へ入。高手の繩を一しめしむればはらり〳〵と切れてのく。七方へつつたるかみ。ゑいやつと引ければ。髪のねかつよくして。ふる〳〵はつと亂れたり。腰につけたるとふの綱。ずん〳〵にねち切て。かついだねぼりの大つゝを。みちんのごとくぼつくだいて。身をちつとほそめて。牢のこふしより。つつと出て景清は。につことわらつて立たるは。人間のわさにてなかりけり　景清意に思

ふ様。とても出たるつゐでに。又清水ゑ參らばやと思ひ。觀音の御前に參り。心しつかに祈念して。南無や千手千眼くわんぜおんさしも草。さしもかしこきちかいの末。一生一代猶頼みあり。かまいて景清を。あつけんに落し給ふなと。ねんころにきせい申し。奥の觀音に參り。後生のことを祈。夫よりも西門に。立出ゝ。都の方を。詠れば其古そしのばるゝ。いたわしや平家の御一門。花の都に御座の時は。金花をつらねる。すいしやうを家にかざりしも。ほふしやにきやうしてはくわいうの。ぎよくらんに望給いしも。人ひとさかり花一時。淵は瀬と成。世の中とてなのみ。殘りて。今はなし。迎も牢より出る上。是より四國西國へも。落行はやとは思へ共。しうとに浮目を見せじため。本の牢に我と入り。心と。しにをしたりけり。彼景清の。心の内何にたとゑん方もなし。其後梶原。頼朝の御前に參。何とて景清を久しく牢舍させられ候そ。御意を請はかろふべしと申す。頼朝聞召れて。とも斯も梶原はからへとの御諚也。梶原承と申て。嫡子の源太に申付る。源太承りて。くつきやうの兵を卅余人勝て。景清を牢より取て引出し。六條河原へばめいて出て。西向へ引すへ申す。景清何とか思ひけん。居たる所をつんと立て。南向にぞ直りける。源太是を見て。實やらん景清は。平家の御代の御時は。二さふをさとつて佛神の。けげんなんどゝ承り及しか。最期にも成しかば。心どふてんし給いて。西方をさへ知らずして。南方へ向ひ給ふ事よ。景清是を聞。おろか成源太殿。夫法花の名文にも。十方佛土中唯有。一淨法無二益無三。除佛法便説ととく時は。西方とかきらす。十方は皆佛土ぞふそ。はやきり給へ源太殿。源太此由聞よりも。夫は御身と某か。文答たいけついたさはこそ。口は

聞けおとるべけれ。請て見給へ景清と。三尺八寸いかもの作りお。するりとぬねて。横手切にがんしと切る。おしむべし歳の程。三十七と申には。首は前へそ落にける。去間源太景清か首を取て。急き頼朝の御目に懸け奉る。頼朝を初奉り。東八ケ國の諸大名。各々御じつけん候いけり。折節父ふのはたけ山は。清水詣ておし給いて。首のしつけんにもあひ給わす。六原の南表を打て下向し給ふ所に。霧に一〻のふしき有。景清か牢に又人の有て申けるは。あれを通らせ給ふは。父ふの畑山と見申たり。最期の時は万事を頼奉る。重忠聞召。夫弓取と申は。今日は人の上。明日は我身の上にて候へは。御意安く思召せ。御最期の時は必人を參らせんと。馬よりをりしきたいし。夫よりもすぐに六原の御所に參り。何迎景清を久敷牢舍させられ候そ。頼朝聞召して。扨景清と云者がいくたり候ぞ。一人は源太か手にかけ。六條河原にてちうし。頸は未た是に有り。夫見給へとの御定なり。重忠謹で承り。しばしは御返事を申さず。良あつて申されけるは。是は景清か首にても候はず。又余人の首とも見へず候。頼朝聞召れて。不思儀の事をの給ふものかな。今迄は景清か首とこそ思ひしに。父ふの詞に付てふしんにこそ候へ。夫能見給へとの御諚也。重忠承て。いかにとして某も。くわしくは存候べき　夫人間は水と見れば。魚は家とみる。天人は留理と御覽すれば。がきはほむらと見る。是を四見のふとうとわ申なり。能々見奉れは。千手の御くしにておわします。忝もごちのほふ冠より。とんじきの光りをはなち給ふなり　頼朝聞し召。浦山しやな景清は。いか成ぜんごんの仕り。かゝる利やくにはあつかるらん。畑山との御諚なり。重忠承て。あらおろかの御諚や候。善根をしゆするともからとは申共。名利

を先立ん者は無知無行の物におとり候。縱ば無知無行の輩とは申とも。諸神諸佛と頼み申さんものは。何のうたがいの候べき。夫芹のさんげの行と申は。みつに下ると見へたり。或はせつしやう中たうじやゐん。はういつの輩に。あいましわり給ふ時もあり。あるいわこつじき非人に相まじわり。せ行を請給ふときもあり。或はかゝるしゐんにのぞんで。其苦に替り給ふなり。ごふりん。しじゆしゆへん。きちくほふかい人でんかいぜ。大日ととかれ。佛道ならぬ事なし。彼景清と申は。其身はけゞんのよろいをきるとは申せども。しんゐのひを付し。まふねんのちりをはらひ。本來生々の願に入て有ければ。觀音は形を。ずいゐんのはやしにわかち。かけをきゐんの水にうつし給へり。大慈悲しん大平等心。大にんにくしん。うぜんぢやく心くうくわんじん。ぜつしん無しやう菩提しん是なり。はつかん。はつねつの底迄も。もらし給わぬは大悲の利益とこそきけ。是々御覽候得と。忝も御くしを。さし向へ申せば。鎌倉殿を始而。其座に有し人々。かんたん。きもに銘しつゝ。ひるい袖を。うるおして皆禮拜を奉る　頼朝不思議に思召。景清か牢え使者を立て扨景清わ。いか成佛神を頼申て候と。御尋ありければ。景清承て。さん候某若年より此方。遠き敵をいて落し。近き敵を切て捨る。かゝる武藝をもたしなみて候得共。いかなる佛神をも頼み申さず候去なから。常は清水をしんし申て候と。御返事を申たりければ。頼朝聞し召れて。東山清水寺へ御使立。誠に清水の有様は。申も中〳〵おろか成りしとみこうしもみなあきて。御ちやうおざつとおしあけ。御ぐしもなきみそぎ。れんげの上にそなわりて御身躰より。あゆる血は。ひとへに瀧の。どとくなり。内陳に余りて。禮板七床迄。うかぶばかりに見へ給ふ。

御使此由見奉り。六原殿へ參りて。有のまゝに。申ければ。扨はうたかふ所なしと。諸事の僧を千人しやうじ。一万座のごまをたき。御くしを。みそぎに。合せ申し。二度。清水とはやり給ふぞ有かたき 頼朝の御諚には。かほど千手の不便と思召るゝ景清に。對面有べしとの御定にて。急き御前に召れ。ひとへにおことを清水のくわんのんとおかみ申なり。又おことおちうする物ならば。千手の御くし二度切るにたるべし。此上は助るとの御諚也。景清承て。あらありかたの御諚や候。是と申も景清か。十六の春よりも三十七の今迄。參たる利しやうと思へば。有かたさわかきりもなし。頼朝の御定には。平家の時の扶持はいか程ぞふか。景清承て。二万町給わりて候。頼朝か世にも二万町。合せて四万町あて行者也。今日より後わ悪心のひるかへし。頼朝に仕へ候得。景清承りて。あら有難や候。命を助給ふのみならず。あまつさゑ御恩をそへてたぶ君は。世にもありつべしとも存せす候去なから。君を見申さん度毎に。あれこそ主君の敵ぞと。あつはれ一刀うらみ申さでと。思ふ所存は露ちりほともうせ候まし。夫恩の見て恩を知らざるは。植木の鳥のおのが住。枝をからすに事ならずと。父ふ殿の御さしそへをこひ取て。兩眼のくり出し。うすおしきにならべ。頼朝の御目に懸奉る。頼朝御涙にむせばせ給い。それとうどにしと云鳥を三年飼て。古人壹つの虎を取。我朝のはぢ有侍に。恩を能あとふれば。主の命にかわるとは。今こそ思ひしられて候へ。いかに景清。此儘都に有度か。景清承て。花の都も何ならす。中々思ひも寄ずと申。さあらば妻子か有ば尾張へ下り度かとの御諚なり。景清承て。行も夢とまるも夢。二世とかねしも夢なれば。下りてゑきも候はず。同しくは西國へ。下してたべと申す。安き間の事成迚。

日向。宮崎の庄を給ると。御判をすへて下されける。斯て景清。はだの守りに納て。御前を罷立又。清水へ參り。三百三十三卷の。くわんおん經をどくじゆして。三千三百三拾三度の。禮拜を奉る。有難や觀音者。三十三身に身をへんし。十九說法御のりをのべ。衆生のぐわんのみて給ふと。今こそ思ひしられたれ。內陳よりこんじきの。光りさひて。景清がかうべを。半時計り照し給へば。取てなかりし兩眼が。たちまち出來て。本の如く見へにけり。爰を以てあんずるに。にやくがせいぐわん大悲中。一もんふしやう二世ぐわん。かだごまうざひくわちう。ふけんほんがくしや大悲。佛は三ぜにましませど。千手のちかい有難し。夫よりも景清。きよ水を罷立。東寺四つ塚打過て。月はなけれどかつら川。船にのらねどくがなわて。山崎關戸打過。兵庫にも着しかば。御一門の住給ひし。福原の京とは。爰なりけりと打詠。すま。板宿播磨に成りぬれば。其名計が高砂の。尾上の松と打詠。君に頼を懸河の。西方淨土は。近きやらん。爰は阿彌陀が宿て有り。備前にきびつ宮。備後に友。尾の塔。夫よりも景清。築紫に下り。日向。宮崎の庄に着て。里人を呼出し。御判を拜ませ。三年と申に。一間四面に。光り堂を立置。新清水とがくを打。朝夕多念なく。千手の名號となへ。八十三と申に。大往生を遂にけり。悪に強ければ。善にも強し。文武二道の名人に。漢家はしらて本朝に。かゝる兵あらし。感せぬものはなかりけり

景清上下終

嘉永三年二月吉祥日寫之

流芳館
役人　彌兵衛

はま出

（大頭左兵衛本）

かの鎌倉と申は。むかし一足ふめは三町ゆるく。大ふの沼にて候ひしを。和田畠山惣奉行を給はり。いしまりつるのはしをもつて。たかき所をきりたいらけ。大ぶの沼をうめ給ふ。上八かい中八かい。下八かいと三つにわる。上八かいは山。中八かいは在家。下八かいはうみなり。上八かいの一段たかき所に。源氏のうち神正八幡大井をいはひあがめ奉る。中八かいの在家を。鎌倉やつ七郷にそわられける。あら面白のやつ〳〵や。春はまつ咲梅かやつ。つゞきのさとや匂ふらん。夏は涼しき扇かやつ。あきは露くささゝめかやつ。冬はけにも。雪の下かめかへかやつこそ久しけれ。はるかの沖を見渡せは。ふねにほかくる。いなむらか崎とかや。いひ嶋江の嶋つゝいたり。ほうらいきうと。申ともいかでこれにはまさるべき。かるがゆへに名付て。あゆみをはこぶ輩は。所願かならず滿足せり。ていとうのつゞみの音さつ〳〵の。鈴の聲〳〵に。ちはやの袖をふりかさす。神慮すゝしめのみかくらの音は隙もなし　かゝる目出度おりふしに。頼朝上洛まし〳〵て大佛くやうをのべさせ給ひ。御みは右大將にへあからせ給ひ。兵衛司十人。左衛門司十人。廿人の官途を申給はつて。其比ちうの人〳〵にみな〳〵下したびにけり。中にも左衛門司をは。梶原平三景時に下されければ。ちやくしの

源太にゆづる。源太つかさを給はり。此事ひろう申さてあるへきかと。いそき國に下。大名小名てうしやう申。いつきかしづき奉る。まづしよばむの日のざつしやうには。蓬萊の山をからくみ。中にかむろのさけを入。ふしの薬と名付。しろかねのさほに。こかねのつるへをむすひさけ。はねつるへにて。これをくむ酒にあまたのいとくあり。うとき人さへちかづく。したしき中はなをしたしむ。遠近の。たゆきもしらぬ。旅人になるゝも酒のいとくなり。ほうらいの山の上には。りふじんかたちはなけむほのなし。さうふのしゐくわかくかゆ。とうなむせいの。栗とかやみないろ〳〵になりつれて。そのあぢはひはしゆみをなす誠、ふしの。薬そとゑひを。すゝめてまいらする二日の日のざつしやうには。肴のかずをそろへけり。ぢむのほたじやかうのへそ。鎧はらまきたちかたな。名馬のかずをそろへ。おもひ〳〵にひかれたり。三日の日のざつしやうには。江の嶋まふてに事よせて。みはま出とそきこえける。辱も御領の北の御方。出させ給ふその上。大名たちの北の方も。皆御供とそ聞えける。ふねの上にぶたいをたかくかざりたて。したむくわりぼくやりわたし。かうらむぎぼうしみがきたて。ぶたいの上にあやをしき水ひきにしきをさけぬれは。うらふくかせにひようやうして。極樂淨土は。海の面にうき出ぬるかとうたがはる。おむかの舞あるへしとてけむくわんの役をぞさゝれける。ちゝぶの六郎殿。笛の役とそ聞えける。なかぬまの五郎は。とひやうしの役也。梶原の源太景末は。大鼓の役とそ聞えける。御簾中には。ひは三面琴二丁。きむの琴のやくをは。北の御方ひき給ふ。一めむのひわをば。北條殿の御内さまかづさの祐のみうちさまわこむをしらへ給ひけり。けむくわん。いつれも。

名にしほふたる上手也。ぶたいの上の舞ちごに。ちゝぶとのゝ二男。藤若殿と申て。十三になり給ふ。ちくわうそたちのめいとうなり。ひたりの。一たううけとりぬ。たかさか殿。鶴若殿そうじてちごは十八人。九人つゝにわかちて。ひだり右の。舞をまひ給ふ何も舞は上手なり。りやうわうに一おどりげむじやうらくのさしあし。ぼたうの舞のぼちがへり。りむたいはには。さすかいな。せいがいはにはひらくて。ことりそにはがへし。何も曲をもらさず。夜日三日そまふたりける。うつもふくもかなづるも井のぎやうは是なり。天人はあまくだり。龍神はうきあがりふねぎやうだうにめくるらん。けむもむかくちのともがら。うかれて爰にたち給ふ大將殿は御覽じて。面白やかくあらばいつもかやうにうちとけてあそはゝやとの御諚にて。御前成し人々。御所領給はり。所知入とこそ聞えけれ

九けつのかひ

（藤井氏一本）

〻さるあひだよりともの御ぢやうには。なみの上ふねのうちにてのあそびには。なに〳〵と申とも。あまのかづきによもしかじ。あまをめしよせうみへいれ。いきたるかいをとり上て。さかなにせんとの御ぢやなり。かぢはらうけたまはり。あまをめさんはじこくの候。われとおもはんわかさぶらひ。此うみへとんで入。かいさう取上て。きみの御めにかけよといふ。本馬彌二郎きゝあへず。ひぼひづきつてはだかになり。うみへざんぶと入たりけり。あまりあはてゝいるほどに〻ゑぼしきながらつゝと入。にしにみるめのついたるを。とり上てまいらする。よりともは御らんじて。あつはれいはゐのきよくかなとて。よかりけるところを。百町くだしたびにけり〻これを見けるわかさぶらひ。われおとらじとうみにいり。あるひはにしさゞい。みるめわかめなんどを。とり上〳〵まいらする。よりとゝ御かんにおぼしめし。百町二百町。よろひはらまきなんどを。かぢはらをぶぎやうにて申下されけるとかや。こゝにちゝぶの六郎殿。まん時ばかりうみにいり。ひつじのさがりもとまでは。其身もさらにうき出ず。よりともの御ぢやうにはあのちゝぶの六郎は。としにもたらぬしよくはんなるが。はやりをのまゝにうみにいり。何とか成けんおぼつかなし。しげたゞのわかものども。

〻いつてさがせなんどゝ。さいさん御下知下る。ちゝぶ殿申さるゝ。御ぢやうにては候へども。ゆみとりのこどもは。うみ山川にたつしやにて。むまにもよく乘てこそ。君の御ぜんにまかりたつて〻くんこうけじやうにあづかるべき。かゝるあそびの水れんに。おほれんほどのふかく人。とり上たりとも御せんには。たつべきにても候はず。たゞ〳〵をかせたまひて。なりゆくさまを御らんぜよと。あざらへわらつておはします。其後に六郎殿。いかなるじゆつかまへけん。もといのさきをもぬらさずして。まうなるかいを三十とつて。はだへにひつしと取つけ。ためいきつゐてうきあがる。よりともは御らんじて。さながらそれへまいれ。はだへにかいのつきやうを。見物せんとの御ぢやうなり。をそれいつてまいらず。かさねて御ぢやうくだりければ。さいのしくはんちかよしが。てをひゝてまいりけり。よりともは御らんじて。今日のすいれんは。いづれおろかにおもはねど。ちゝぶの六郎が。はだへにかいの。さてもつきやう。きたいのふしぎに。おぼふる物かなと。御さかづきにさしそへ。ひたちのくにかしまのしやう。かいほつのがうとて。八百町のところを。くだしたびにけり。いちもんのこらすひきつれ。しよち入とこそきこえけれ

常盤問答

去間常盤御前はほとなく清盛になひき給ひけり老木の花のなからへて春にあへるかことくなり子とものみるもはつかしや妻のかたきになひくこそためしすくなき次第なれ心つよくてさてはては我身のことはさてをきぬ母や子共の行末まてよもすなほにはあらしものをと思ひの外にそなひかれけるさてこそ清盛引かへて淺からす契給ひけり三人の若たちにも能々あたり申せとてあまたの乳母をそへさせ給ふ母の尼公もいたはりていつきかしつき給ひけり常葉心に思召今こそかやうにありとてもかはるならひの有ならは又うきめにもあひぬへし末まて子細のなからんは出家のかたちにしかしとて嫡子にあたる今若殿を園城寺へこそあけられけれ　つき乙若は醍醐の寺　牛若殿はおさなくていまた乳母にいたかれてあかしくらすとせし程に七歳にならせ給ひけり常葉心に思召あの牛若と申は兄弟の中のみめよしなりたい所へのほせをくならは人の口もおそろしゝ都ほとりに引こもれるこしよを尋てのほすへしいつくにかは有なんと仰出されたりけれはある人申けるやうは鞍馬寺と申はゆけの女院のみはか堂本尊は大悲多門天福智惠ともに滿足せり牛若殿の御ためによかりなんとそ申ける　常葉聞召されて其儀ならは鞍馬にのほりよ所なからおかみ申さも有なんと思ひなは別當に契約し牛若をのほせはや

（越前本）

と思召賀茂の社參にことよせかりそめふりの御出なれはあじろのこしの下簾さあらぬ躰にかけさせ御供の人々には女房たち一二人はしたの女二三人　力者はかりを御供にて　かはらをのほりにまいらるゝ賀茂の御社ふしおかみ七まかり八町坂鞍馬につき給ひけり地主權現ふしおかみらいたうにまいらせ給ひつゝかうしのうちへ御入ありらいはんにむかひ禮しつゝ高座にむすとあかりて香爐とりあけけいならし暫く念珠し給へり　かゝつし所にあんはしの別當東光の阿闍梨日中のつとめのそのためにらいたうにまいりかうしのうちを見給へはゆうなる女着座してはや念珠なかはとみえにけり　東光御覽してそはか女の身としてたい法座へはあかるへき他山の兒のいつはりて寺をわらはむそのために高座のうへの念珠かやさありとても一たんとかめはやと思召いかれる面をふりあけさもあらすとよ只今高座へ上る人を兒かと見れはさはなくてはかいむさんの女なりおなし人間といひなから女人はさはりおほくしてきよき靈地をふむ事なしましてや持戒ちりつの高僧貴僧ならては内陳のかうしへのそむ事はなきものをそのうへふしやうけたいなき男子の身たにものそまぬにかゝるいはれを知つゝ寺をあなつりのほれるか又本より愚痴の女にてまよへるまゝにのほれるか是非に付て僻事そ勿躰なしや女房よあふはや出よとそいかられける　常葉聞召てこなたの御事ざふらふか本よりくちの女にてしらてまいりてさふらふそをしへてたはせ給へおひしりとこそ仰けれ　東光聞召れてけにもしらすはをしゆへし心靜に聽聞をせよ　釋迦佛と申は淨飯王の御子なり悉達太子と申せしか十九にて出家をとけ檀特山にとちこもり菜摘水くみ爪木こり六年きうしし給ひてしんくをとけさせたまひ　廿五にて僧に成くとんと申奉る又六年はちやう座にて

まとろむ隙もましまさす十二年を經給ひて菩提樹のもとにて佛とならせ給ひて御名をは釋迦と申也三十の御年より花嚴經を說給ふ三七日の間なりしちしよはちゑに是をとく　阿含經と申は十二年の間也はらないこく鹿野苑にて此法を說給ふそういちあこんちやうあこんさう阿含ちうあこん此四阿含のなかにも女をことにいましめり般若經と申は三十年にとき給ふあたらしきほんには一万六百卷二百六十余品なり紙の數を申に一万六百三十八文字の數は六十億四十万字にしるされり此經のなかにも女高座へあかれといふ要文更になきそとよ勿躰なし女房よはや出よとそいかられける　調　常葉聞召れてけに〳〵いはれのさふらひけるそやもし又此經のなかにも女をほめたる經文のあるならは此高座をは出まし御ひしりまけさせ給はゝ御身一人にかきらす法師のそうのなをりたるへしわらはまけさふらはゝ女のふかくたるへしかまいてまけさせ給ふな隨分は此女も一言つかひ申へし經文をひいての給はゝわらは成ともおとるまじいまつそま古とうし經にとくしよさいすへし男子をうみてたねをつくなんし此ほうきやうぜはまさにけたつを得へしもしせんこうとあつくはのほう此こと葉を論ぜばうちむちせつ利ばらもん　びしやしゆたとうにいたる迄差別も更にあるまじき　經の說との給はゝ一切經の惣一法花經をもつてほんとせり彼法華經と申はたいこみの經也まき數は八卷文字の數を申に六万九千三百八十余字に積れり彼經のはしめに妙法蓮花經とよむその第一の筆たてに女といへる文字をかく　へんには女作りには　おさないと書てこそ妙とは是をよまれたりめうと書ける文字のよみ數おほしとは申せとも先たへなりとよまれたり六万九千三百八十余字のもん〳〵は別の事をはほめすして妙をほめむかため也妙と書ける心は詞にものへか

たし筆にもいかてつくすへき言語道斷なる間しんきやうしよめつなりとかや爰をもつて案するに万法のいたゝきは女をもつて極たり　〳〵彼法華經と申は釋迦佛の御年七十三と申二月上の八日にとき始め給ひて八ケ年の間也りやうせんゑの十ほんはしよほん方便品ひゆほんしんけほん藥草喩品しゆきほんけしやうゆほん五百品にんき品ほつしほんこくうへの十一品はほうたう品たいは品くいんち品あんらくきやう品ゆしゆつ品しゆりやう品ふんへつ功德品すいきくとく品ほつしくとく品しやうふきやうほさつほんしんりきほん是也又りやうせんへ歸て七品とかせ給ひけりそくるいほんやくわうほんめうをん品普門品陀羅尼品こんわうほんふけんほん是也惣して二十八品なり其外の小經五千余卷のなかにも女高座へあかるなといましめ給ふもんもなしおほつかなし別當のさて心のうちこそゆかしけれ　東光おほきにきもをつふし此問答にまけなはかつうは寺のなをりたるへしかなはぬ迄もいま一言つかはゝやと思召面白し女房いてそのいはれかたらむある經のもんにせうさんせんかい男子しよほんなうかつしゆゆい一人女人いこつしやうととかれたり此もんの心は三千界のあらゆる男子のもろ〳〵の煩惱をあはせあつめもつて女人一人の業障とすされは地獄は外になし女にかきる所也　女人一人生れなは地獄のつかひ來りとて三世の諸佛はしたをまきおちさせたまふとこそきけ　遠く漢家を尋ぬるに天台山の高山に女のまいる事はなしいわうさんまれいさんしやうりやうせんにいたる迄女をゆるし給はす間ちかき秋津嶋にも延暦寺高野山泊瀨をか寺や當麻寺たうの嶺にいたる迄內陳のかうしへのそむ事のあらされは遙におかみ奉る戒行の程のつたなさよ　女と生れける事もしやうほうひほうなる間くちの闇ふかふしてしつとの思

ひ淺からす邪念を作る事もなし勿躰なしや女房御堂のけかれ候にはや〳〵御出候へ猶も御出なきならはけそうともに申付出すへしとそいかられける常葉聞召れていかにや東光物をしらすは無言あれたつとき人のけしからす女をそしり給ふ事にくむにはあらすかならす輪廻のこうをはなれんかため也まよひの前に男女ありさとりの前に男女なし善惡二つなき故に邪正も更に隔てなし是はふかき心にて申としろしめさるまし先耳ちかに申へし佛も母かましませはこそまやのために始めてほうをん經を說給ふたうり天にあかり一夏の間法をとき母のために報せらるゝ佛も昔は凡夫にて太子とおはせし其時は三人の后おはします一をはやしゆたらにより二の后をはい・ぎとてさうなく人に見せられす　第三にくだみとてことにようかんびれいなり此三人の御中に御子あまたおはしますやしゆたらにより申は釋迦佛のいんにじゆどう菩薩とおはせし時くいによといへる女に五もとの蓮花をうへてのちねんどうふつと供養ぜしその約束の朽すして今やしゆたらと生れて太子に契こめ給ふ大唐のいわうさんしやうりやうせんにいたる迄女をそしりたまふともりやうかいの法をはやはかはそしり給ふへき胎金兩部かけて後ちやうゑの二法たちかたし　さ申東光も母の腹にやとつてくちゑんまんをくそくせりさいせからい生ないしはらしやに至る迄父母ともにあたへし女をそしる法師は母の恩をそむけり父母の恩をしらさるは只畜類にたとへたり髮をそり衣を墨に染たれとくちなる物を俗といふうへのかたちはかはらねと心に發心ある人を法師と是を名付たり東光のことくに經の文をしるへにて心に發心なき人をけうしやと是を名付て木にかゝる藤の空へあかるかことくにてをのかちからて更になし愚癡忘念をさきとしていたつら事をほんとする人の心のは

かなさよさもあれ此寺はいつれのみかとの御時にいかなる人の御願にて立られけると問給ふ東かう聞召我寺と申はくはうとく天皇の御代の時勸進のひしりはもとはならほつしくはんちやう坊と申せしか南都を出て天台山北谷に住給ふせう僧都と申てうけんちとくのひしり也彼僧都のすゝめによつてたいらく太子の御建立ゆけの女院のみはか堂本尊は大悲多門天福知惠ともに滿足せり常葉聞召よの事をはさてをきぬ此問答にかちぬるそそれをいかにと申に女をいれぬ寺ならは女院の御墓をなど是には立をかれけんその上大悲多門天女をそしり給はすしんの御弟子いもつと吉祥天女御前とてひたりのわきに座し給ふけにと女をそしりいたさるへきにさたまらは女院の御墓と吉祥天女もろともに御寺を出しおはしませみつからも御供してへちに寺を結てあんしせんはいかにや別當とこそ仰けれ

笛卷

（毛利家本）

去間洞幸の阿闍梨。常葉の御前にかしこまり。見くるしけなるさうあんを。むすひて持て候。庭の花の御興にも御出とこそまふされけれ。常槃きこしめされて。よはす共たつねゆき。坊中の案内をも。見はやとおほしめさるれは。時刻うつさす御出ある。ちうせつけうをつくし。爰をせんとゝそきらめきける。酒もなかは成し時。常槃仰けるやうは。いかにやとうかう。牛若と申て。世になしわらは一人あり。別當にまいらする。よくは弟子ともおほしめせ。あしくは下のくさきりとも。おほしめされさふらへ。あはれむ人のなくしては。いかてかかなひさふらふへき。よきやうにとりたてゝ御覽せよとそ仰ける。とうかうきこしめされて。やかてりやうしやう申し。別當自身御むかひにまいらるゝ。角て牛若殿。くらまにあかり給ひ。學文せさせ給ふに。師か一字を教ゆれは二字とさとり。二字をゝしゆれは百字にくらからす。筆をとつてのひつはうに。魚鱗虎爪水露のてん。孔子老子の筆のあと。文書のかすをのこさす。ならひそつくし給ひける。しもんたさむの其うちにも。かゝるめいよの兒學匠の。有つへしとも學へすと。ほめぬ人こそなかりけれ。六原におはします。常葉聞召れて。御怡ひはかきりもなし。夫兒のもてあそびには。何〳〵と申共くわけんにすきたる事はなし。其中にとつても。

笛は一の名物なれは。よからんふえをもとめ。牛若にとらせはやとおほしめし。都まちかき淀の津の。みた次郎かもとよりも。笛を一くわんかひとつて。くらまへのぼせ給ひけり。牛若なゝめにおほしめし衣更着半の比よりも。吹はしめさせ給ひつゝ。其歳のくれには。百廿てうの。かくをは。ふきこそおほへ給ひけれ 詞

有時牛若殿。此笛の出處を。たつねはやとおほしめし。彌陀次郎をそめされける。みた次郎めしと承り。いそきくらまにのぼり。牛若殿の御坊にまいり。庭上にかしこまる。牛若殿は御覽して。汝かよどの彌陀次郎とは。さん候とまふす。此笛は漢竹か梵竹か。きかまほしやと仰けれは。彌陀次郎承り。さん候其笛と申は。一年讃岐國びやうぶのうらにて。寶龜五年に產れ給ふ。弘法大師入唐あり。しやうりうしにおはします。惠果和尚を師とたのみ。眞言の秘密をきはめさせ給ひ。我入唐のつゐてに。天竺りやうしゆせんにおはします。大聖文殊をおかまんため。しん〳〵と有ゐんたうを。わけこえ給ひけるほとに。たいしうのをきを透り。かうしうといへる國には。拾のみちわかてり。其中に取ても。かうなむといへるは。せきけんの南なり。彼國にさしかゝり。たいたくの野邊を行過。かうたくのつゝみをつたひつゝ。般若臺をそおかまれける彼。般若臺と申は。南岳大師ひさしくもをこなひ給ふみてらなり。今日本に生ては。まやとのわうし聖德太子とも申なり。衆生濟度の慈悲ふかき。南岳大師とふしおかみ。又五千里を行過て。きよくせんしとて御寺あり。彼寺と申は。南岳一の弟子ちきしやうにんの御寺なり。彼天台にかよひ。御法をとかせ給ひけり。あなたへも五千里。こなたへも五千里。一万里の道なるを。夜日七日にゆきかへり。御法をときたまひけり。故に釋文にも。荊楊往復途將

万里ととかれたり。調 かゝるれいほうをわけこゝ給ひけるほとに。唐天竺の域なる流砂の河につかせ給ふ。彼河のひろき事。さむはく二十よちやうなり。水碧天にひたし。浪ばんてんにさかのぼり。はやくしてみなきれは砂をあらひなかせり。流砂の川とかひては。砂なかるゝ河とよむ。葱嶺の山の麓に一のはしわたる。石橋と是を云。石橋とかひては。いしの橋とよむ故に。はりをならへてすのことし。るりをつらねてかうろとす。はしけたはしらには。めなうをつくりのへてあり。とをくわたりてそれる事。虹をなせるかことくなり。見るにきもきえひさふるひ。カヽル あしすさましくみのけたち。フシ 渡るへきやうさらになし。弘法此由御覽して。さりとも是をわたらすは。白雲万里をへたゝりて。何としてかはまいるへき。渡にこそとおほしめし。いのちをすてゝわたらるゝ。法力なれは。相違なくむかひにつかせ給ひけり。河上さしてよちのぼりそうれいの。嶺にあかりつゝ。遙の空を見あくれは。夕日ほともなかりけり。手にとるはかりちかくして。霞は谷の底にあり。らいてん雲をひゝかし。風小雲を。はらつて銀漢はことにちゝんたり。調 かゝりける處に。はつせんとうし行あひて。いつくよりいつかたへとをるものそと有しかは。是は日域の弘法と申すものなるか。天竺りやうしゆせんにおはします。大聖文珠をおかまんため。是まて參りて候。りやうせんへの道つたひを。教へてたへとそ仰ける。童子聞しめされて。是よりりやうせんしやうとへは。白雲万里をへたゝりぬ。としをかさねて歩むとも。いかてたやすくまいるへき。はやかへれとそ仰ける。弘法聞しめされて。万里の道も一足の。下より續くことなれは。心なかく歩まは。なとかまいらて候へき。をしへてたへとそ仰ける。童子聞しめされて。汝はけしに

たとへたる。そくさんこくの小僧か。唐土を越るたにも貴き事なるに。ましてやまふさん天竺を。あゆみつくしてまいらんこと。おもひもよらぬ事なるへし。唯かへれとそ仰ける。弘法きこしめされて。國は小國なれとも。名を日域となつけて。日をかたとれる國なり。唐土ひろしとまふせとも。震旦國となつけて。ほしをかたとる國なり。天竺そのなたかけれと。月氏國となつけて。月をかたとる國なりくには 大小にはよるへからす唯智惠こそほんにて有へけれ。童子きこしめし。おもしろし弘法。智惠くらへなるならは。いて〳〵さらはまいらん。さて弘法は日本より。是まて尋ねきたれるは。くちの僧にあらすや。心のうちをたつねは。りやうしゆせんも心に有。文珠も心のうちに有。むねのほとりにもちなから。遠嶋を尋るは。くちの僧にあらすや。弘法聞しめし。愚なりあの童子。法には叉理の二つ有。心のうちの文珠は。惣のもんしゆ是なり。りやうしゆせんの文珠は。別のもんしゆ是なり。別をきらへは惣もなし。惣ときらへは別もなし。叉理惣別の不二なるをあふ智者とはまふし候そ。童子聞しめし言葉のしよけむむやくなり。名譽をけむして。きとくを見せよもちひん。きとくは何をあらはさん。かみもなく墨もなく。筆もなくして只今。文字を一つかひてたへ。弘法きこしめし。かゝんす事はやすけれと。とうしの奇特まつ見せよ。童子聞しめし。いて〳〵さらはかかむとて。はしる雲にむかつて。天竺文字と指をふる。あらしに雲ははやけれとも。文字はちつともみたれす。あさ〳〵とこそ見えにけれ。こうほう御覽して。しゆせうなりあの童子。いて〳〵さらはかゝんとて。なかるゝ水のおもてに。たつといへる文字をかく。さしもに水ははやけれとも。文字はちつともみたれす。帶をむすへる如くにてあさ〳〵とこそ見えにけれ。童子御覽して。あの字にてんをうつてこそ。りうとはよまれ候らへ。弘法聞しめし。

うたむす事はやすけれと。りうとならんかゆふせさに。さてこそてんはりやくしたれ。何ほとの事の有へきそ。唯うち給へ弘法。いて〳〵さらはうたんとて。一のてんをうち給ひ。いまた其手もひかぬまに雷なつて雨くたり。洪水出來つたり。水はなを見てあれは。百尋の大龍かかしらをたかくさしあけ。みつに尾を湛て。大木枯木の朶くたけいはほなかれてくたるをと地震のゆるかことくなり。こうほう御覽して。すはや水よ童子。逃給へと有しかは。童子ちつともさはかす。虛空にあかり雲をふんてさらぬていにたち給ひ。いたはしゝ弘法。北給へと有しかは。弘法ちつともさはかす。盤石のねんをむすんて。川のおもてへなけ給ふ。廿余丈にそひへたる大盤石となりけれは。其上にとひあかり獨鈷を握り弘法。しはらく念誦し給へり。童子御覽して。あらたつとしや弘法。今は何をかつゝむへき。我こそ天竺りやうしゆせんの文珠なれ。あれにてまたんひさしさに。是までむかひにきたりたり。いて本躰をあらはさん。うてんわうはなきか。獅子いてこよとのたまへは。雲の內に聲有て。おつとこたへてほともなく。金の寶冠をいたゝき。赤衣に劒を要たりける。獅子にはらてんの鞍をゝき。御前にひつたつる。童子則文珠となり。五しきのひかりを。はなしつゝ。しゝにめされたりけれは。所はやかて淨土となるりやうせん淨土是なり。抑文珠と申は。しやうるりしやうとの其中に。はつたいほさつのそういちなり。行者をむかへとつては。どくらくしやうとへをくらるゝ。有時はりやうぜんじやうどにて。法花のすいさうをとき。又有時は卽。寂滅道場にして。三世諸法の實儀をたて。一ねんしやうじゆをいつしゆにし。無相無意のさうをちやくし。獅子のうへにしてはまた。釋尊の右のわきに座し給ひ。一乘

三昧ほつきし。彌陀の願をたて給ふ。かゝる有難き文珠を。まのあたりにおかみ給ふ。弘法大師の御心さこそうれしくおほすらん。文珠かさねてのたまはく。末世のしゆしやうのまよひには。うさうしうちやくこれおほし。有想といへる心は。萬の物を有と見る。是は有想のまよひとて。地獄におつるはしめなり亦萬のものをなしと見る。是も斷空の迷ひとて地獄におつる心なり。唯一念不生なるをこそ。文珠の智惠と申て。そつこん佛に成ものなり。此道をまほつて下向せよとそ仰ける。弘法聞しめされて。御なこりおしくはさふらへとも。さらはおいとままふすとてそれよりも下向し給へり。そうれいの山の麓に。一の瀧おちにけり。彼瀧のさうかんに。三本の竹おひにけり。もゝよにふしをこめつゝ。此竹ちいろ成けり。弘法劒をぬきもつて。彼竹のすゑのよを。みふしこめて伐給ひ。ちきりのあらは日本にて。めくりあへやと。のたまひて河にそなかし給ひける。それよりもとのはし渡り。はや大唐に出給ふ。たうとの寺のはしめは。やうしうの白馬寺ことさらたつとかりけり。きてうのこちの吹けれは。みやうしうに出給ふ。御船にめす時。もつ所のふつくに。五ことつこ三こを。虛空へなけさせ給ひけり。しうむくたつて是をまき。はるかのうみをわけこえて。きのくにゝきこえたるかうやの峯にとゝまれり三このまつと。まふすこと此時よりもはしまれり。獨鈷は花の都なる。東寺の塔にとゝまる。五鈷は越後の國。くかみの寺にとゝまれり。夫よりも大師は。御船にめされ。のろしまときさみのしまを。はるかのにしに御覽して。ほりかはといへる湊こそ。たうとのわうの。都よりなかれ出たる大河なれ。それより三日はしりすき。かしらなしといふ津こそ。大唐國船の泊なれ。きみしうといへるをきすを

すき。かうらいたうとの域なる。もめいしまをはしりすき。きやうのみさきはくたんしゆもころいのみせんもゝしま。きとのしまもろみのしま。ふなこし過て。つちよりもあくれはつしまのないにつく。いきのかさもとはしりすき。いきのもとをりめにかけて。あはちくせんの箱崎や。はかたの津こそ見ゆれとて。をの〳〵いさむおりからに。あくふう俄にふひてきて。高麗の。おきすなるきとのしまゝて吹もとす 大師秘印をむすひ。我また歸朝する事。いほうの爲にて候らはす。衆生濟渡の爲なれは。順風たへや龍王ときせいをふかくまふさるゝ。かゝりける處に。ひんつらさうにゆふたる童子。浪の上にたゝすむて。此風とまふすは大唐の佛たち。大師に余波をおしみ。今一度大唐へむかへんための風なれは。龍王のしよいならすとて。かきけすやうにうせにけり。弘法聞しめされて。其儀にて有ならは。先日本へつけてたへ。にほんにつくほとならは。唐土の寺をまなふへし。金剛峯寺と額をうつて。大唐の佛達を勸請まふし。あれにておめにかゝらんと 祈誓(カタツ上)をふかくまふさるゝ機取共かこれを聞。あそこなるほつしは。何を云てさゝやくそ。しなふす事か目に見えて。獨ことをするやと。笑者も有にけり。たれもいのちはおしひとてなけく者も有にけり。大師の祈誓實にて追手そ吹にけるとかや。過にし桓武。天皇の御時。三十七にて。入唐まし〳〵。さてまた四十三の歳。嵯峨の帝の御時。御歸朝とこそ聞へけれとも。人はなとやらんしらさりけるそふしきなる。つくしのはかたにあかり。ふちおいとつてかたにかけ都へのほり給ひしか。舊里は忍有によりさぬきの國に渡り。ひやうふの浦に立寄。父母のみはかをふしおかみ有いそへを透らるゝ。より竹ひとつあり。取あけ御覽有けれはてんちくりうさかはにて。伐なかした

る竹てあり。希代(下)不思義(中)におほしめし。三のよの有けるを。三ふしに刻み。笈のあしにゆひつけ。都へのぼり給ひしに。三ふしの竹のよにいれは五音のこゑを出す。五音の聲とまふすは。宮商角(中)徵羽これなり。三管のふえにゑり給ふ。おほすいれうこすいれう青葉の笛是なり。青葉(下)の笛(中)とまふすは。竹は塩にかれたれと青葉は一つ節にありかれさるとくに名付たり。こすいれうとまふすを。しゆしやくゐんのをにかとりよな〳〵是を吹しを。天人是をとらんとて。羽衣をもつて。なてゝは天にあかり。摩ては天にあかる。故に名付つゝ。ひとへかくしと是を云。この三管の笛をは。天下(下)の重寶(中)なりとて。大裏に籠をかれしを。さころものちうしやうの。吉野山にて花見の興の有し時。此笛をまふしうけ吹てあそはれたりけるに。まんしゆらくをふきしかは天人是をちやうもんし。五衰の苦をのかれて菩薩と成てまひあそふ。其後中將。淀の津にすまひせし。小式部にたひ給ふ小式部とし老てのち。彌陀次郎か祖父の。彌陀太郎か是をとり我々までは三代なり。ふく事はなけれとも。此笛をもちぬれは災難さらにきたらす。佛神の加護にあつかる。てうほうにて候をいかなる人のまふしけむ。かみさまに聞しめし。めしをかれ候らへはちからにをよひさふらはす若君とこそまふしけれ。牛若聞しめし。おもしろし彌陀次郎いはひに三度かたれとて。をしかへしかたらせ。猶もあかすやおほしけむさうしにとゝめ給ひて。笛のまきとまふして。鞍馬寺にありとかや。其後に彌陀次郎。御褒美にあつかり。みた次郎も怡。家ちへとてそ歸ける

元和四年七月日

行年七拾三歳
如滴（押花）

未來記

（内閣文庫本）

去間牛若殿。鞍馬の奥そうしやうかかけといふ所へ。夜な〳〵通ひ給ひけり。天下をおさめん其ために。兵法けいこのたしなみなり。抑兵法と申は。三略のじつしよたり。昔大唐しやうざんの。そうけいが傳へしひしよなり。吉備の大臣入唐。し八拾四卷の中より。も四十二帖にぬき書て。我朝へわたされしを。坂のうへのりじん九年三月にならひ。敵をしつめたまひけり。扨其後に田村丸。十二年三月にならひ。ならさか山のかなつむて。鈴鹿山の盗人。かゝるげきとをたいらげ。天下をまほり給ひけり。扨其後にすたりゐいざんにこめられしを白河いんぢのこのかうべ。ならふとは申せ共。さしたるゆうはなかりけり。さる間牛若殿。唯さんがくをはしりまはり。枯木の枝を傳ひ。御身をかろめ給ひけり。爰に天狗共さしあつまり。内儀ひやうちやうするやうは。抑當山は。じかく大師の秘所として。行人ならでは此山へ通ふものもなかりしに。鞍馬寺の牛若が。我等がすみかをあざける事。其いわれなき物を。いざや天狗のほうばつを。あてんなんどゝ申けり。愛宕の山の大天狗。太郎坊申やう。抑此兒ふようにて。親にも師にも不孝ならば天狗の。ほうばつあつべけれ共。父母けうやうの其ために。兵法けいこのたしなみなり。父母にけうやう有者は。かならす天道の加護を蒙に。ばつし

たまはんせんぎこそ。しかるべくもなしといふ。ひらの山の次郎坊。進出て申やう。抑我等が異名を天狗といふはいわれあり。むかしは人にてさふらひしが。佛法を能習ひ我より外に智者なしと。大まんじんをおこすゆへ。佛にはならずして天狗道へおつるなり。たとへまんじんおゝくして。此だうへおつる共。情をいかでしらざるべき。いさや牛若合力し。天狗のほうをゆるし。親の敵をうたせん。尤然べしとて。むねとの天狗七八人。若山伏に出たち。牛若殿の前にゆき。いかに小人きこしめせ。抑此あたりに。人住ところ候へば。御出あつてしばらく御(おし)あそび。さふらへや小人とこそ申けれ。牛若どのは。きこしめし。是唯ものとおぼさねど。なんの子細の有べきと思召れけるほどに。山伏のかたに。のりそこ共しらぬ山を行。ふかき谷にわけて入。いつく迄牛若を。ぐそくするぞあやしやと。思召れけるほどに。山の氣色と木のこだち。かんれいがゝとそびゑて。萬木枝をならべては花しやうゑんに。さかんなりりゝたるにほひはかうばしく。松柏みどり色ふかし。瀧のおとれい〳〵と。ひゞき岩間をくゞるおと。是やまことにしやうりやうぜんのきことくをんかとうたがわる。爰はほんだうならびにはいでん玉を磨き。じんでんにしゆぎよくをつらね。九重の塔は。雲にそびゑ。坊中むねをならべつゝ。門々甍をつゞけたり。かほどめてたきみてらの。此せんこくに有けりと。思召れ。けるほとにしばらくたちて。おはします。懸(ことば)りける所に。有大坊の客殿に。むねとの大衆百人ばかり連座して。くはんげんかうのもてあそび。せうちやくきんくごげんくわんをしらべ。面白かりける座敷なるが。牛若殿を見付まいらせ。管絃をとゞめてゝうしやう申。はるかのざしやうにすへまいらせ。山河のびしよくを調へ。ちんけう

をつくして持成申す。らんぶになれば天狗共。我おとらじのあそび事。てんこつの物の上手が。むじんのきよくをつくして。われおとらじとぞくるひける。老僧たち申されけるは。あそびばかりにて事ゆくべきか。源平の合戰の。此すへに有べきを。かねてしってはんべるなり。小人の御持成に。まなびて御目にかけよという。うけたまはると申て。ゆゝしげなる天狗が。是は平家の大將。安藝守清盛と名乘てすゝみ出。安藝國嚴嶋の明神の。御はからひによりつゝ。此世を今よりおさむへし。平家に野心の者をば。都のうちにをくべからず。薩摩かた硫黄が嶋へ流すべし。ほうわうをば鳥羽の古宮に籠たてまつり。清盛が子共。いよ〳〵はんしやうし。一門六十三人は。いつれも官ろくおもかるべしちやくし次男は左右の大臣。孫は國王。(かゝる)あるいは百官けいしやうなり。あぶれ源氏のする〳〵をたねをたつてほろぼすべし。南都に敵がこもるときくげきとこわくて。手にあまらば大佛殿に火をかけよ。(つかは)うけたまはると申(中)て。ゆゝしげなる天狗が。本三位の中將。重平と名乘て。三千余騎をそつして。南都へ押寄て。大佛殿を燒はらふ。春日のごとがめこはくして。既にはや清盛は。火のやまうを請とつて。せうねつ地獄のかなやのほむら。いかて是にはまさるべき。あらあつやかなしやと。こかれしにこそしんだりけると。かやうに清盛の。はやく一期をかたつて。さつと入(ことば)かゝりける所に。ゆゝしげなる天狗が。是は平家の世つき。右大將宗盛と名乘て。かむりそくたいのしやうぞくにて。ゆゝしげにて座せられたり。不思儀やいねじのみだれの時。伊豆の田中へ流されし。頼朝世をみだり。伊豆の目代山木をうつて。相模の國石橋山に幡をなびかせたてをつく。おうばの三郎押寄て。石橋山をいおとす。頼朝主從七騎に

て。武藏の國へおち給ひ。こうのろくしよ。ぶんばいに幡をなびかし。つゞくみかたをまち給ふに。我も〳〵とさんぜられけるを。ちやくたうつけて見たまふに。夜日三日が其うちに。賴朝の御勢。貳拾八万七千余騎。はたのしたにあひなひき。先陣は相模の國。小林の郷に京をたて。新鎌倉とざゞめく。爰に信濃の住人に。木曾のくはんじや義仲は。平家をせめん其ために。五万余騎をそつし。信濃の國をうつたつて。越後の府に着しかば。越路にかゝりせめのぼり都まちかき越前の火打が城に陣を取。平家の人々肝をけし驚さはき給ひて。十万余騎にて都をたつて。近江の國とかや。あらちを越て。ちのめ山うちこへ。かへるの山に陣を取。源氏はくつきやうの。じやうくはくに籠て。さうなくおつまじかりしを。有人のたばかりにようこくのせきをやぶられ。こらへかねて落給ふ。平家跡よりせめつゞく。加賀の國しのはらあたかのたゝかいは。天地もひゞくばかりなり。そこをも義仲うちまけて。加賀越中の國境くりから山に陣を取。平家の人々かつにのり。彼山へせめのぼる。其時源氏の氏神。八幡大井の。御はからひによりつゝ。平家三萬六千余騎は一夜がうちにくりからの。谷の朽木とほろびはつ。平家にげてのぼりしを。源氏跡より責かゝる。平家都をおとされ。神祇をとつてはるかなる。福原の京に落給ふ去間義仲は。天下を守護し奉り。ゆゝ敷見えて今ははや。木曾のせいたうたるべきが。賴朝の果報におゝはれ。代を背くべきずいざう有平治のげきしんはさすが情の有つるに。ああらうかりけるかな源氏のげきふう。四海にふきあれて。雲の上迄浪たかし。賴朝きこしめされて。君をまぼらんためにこそ。義仲都の守護共あれ。却て天下をなやますは。重而けうい成べし。其儀ならばうつてをのぼせ

んとて。大將にはかばのくはんじやのりより。此牛若殿元服して。九郎義經と名乘べし。牛若をば鞍馬の多門。伊勢の兩社。まぼり守護し給ひ。きんようをあらはし。きゝうの家をつぐべきなり。是によつて敎賴義經を。兩大將と定め都へせめてのぼるべし。むざんやなよしなかは天下のにくまれてういのばちゆみやのするゑも。すたれはて粟津が原で。うたるべし義經都のけいことして。三種の神祇事故なく。都へかへし申さんと。みくさのたうげひよ鳥ごへからめでをまはし責入べし。平家こらゑで城をおつ。汀のみくづとなりはつる。終には西海のあかまもじだんの浦。はやともが沖にて。二位殿先帝。宗盛を始めたてまつり。平家三萬六千余騎は水の淡と消はつべし扨其後に牛若殿。兄ににくまれ給ふなよ梶原に心ゆるすべからす。兄弟の中。不和ならば。其身の運はつくべきなり六親不和にして三寶のかごは。よもあらじ爰迄すゑをばおしゑぬ。扨其後をしらぬなり。是迄しやうじまいらせて。對面申しるしには。天狗のほうをゆるすなり。是をまぼりにかけよとてくろがねの玉を取出し。牛若殿にまいらせて。かきけすやうにうせければ。有し所はうちうせて。そうじやうがかけなる。松の枝にぞおはしける。扨は天狗がうしわかを。かどへけるよと思召。東光坊にかへらるゝ

くらま出

さても六原の御所には。牛若殿の悪行のみにあまると聞召。御一門さしあつまつて。御評定はとり〳〵也。彼もの老立物ならは。當家のゆゝしき大事たるへし。打て捨る歟。忍ひて流すか。なんとゝ。評定ある。（クトキ）母の常盤は聞し召。あるにあられぬ御身にて。忍ひて文をあそはし。牛若殿につけ給ふ。牛若文を御覽して。かやうに母の御手より。文を給り。いつくの國。たれやの人を。頼みて。下るへしとも覺すや。（詞）しよせん牛若。御本尊より外頼み申方もなしと。かうたうにお參り有。夜とともきせいを申されたり。抑比沙門と申は。四天の中の第一に。八天童のそんしやたり。佛法護持のために。弓箭を守り給ふ也。牛若か一期の本望は。身のためおこすむほんならす。父母教養の其ために。平家を討んとおもひ立。兵法稽古のたしなみ也（詞）多門の十種のふくをは。父母教養せんものに。あたへむといへる誓ひなり。（クトキ）ほんせい今にたかはすは。牛若にこそたぶべけれと。ふかくきせいを申。打まとろみたる御夢に。白きうさきと。鼠とか。袂に入と御覽して。打をとろき思召す。うさきは東の物。鼠は北の生物也。東北のすみをは。うしとらとこそ名付たれ。いしやなてんと申は。此方にをはします。故に名付つゝ。たもんてんと申也。比沙門のすみ家をは。へいしらまなやしやうと

（内閣文庫本）

て。よねのふる都也。いかさまも牛若は。丑寅の方に立越て。世に出よとのじげんかや。あらふしきやな。北と東のあひには。たれやの人をたのみて。下るへしとも覺えすと。またいとけなき御心に。つく〳〵とあんじ給ひけり。（詞）既天はれまた早朝の事なるに。だうしや四五人にうだうす。そんしやとおほしき男の。うとくの人とおほしくて。みはちに金をまき入。じゆずさら〳〵とをしもんで。千五百里の道の間を。安穩に守り給へと。ふかくきせいを申さるゝ。其後かうしの内よりも。五十計なる僧出。御だうしやはいつくの人そ。態の參りか。便宜ざうか。いやびんぎなから態まいりて候そ。そはなる法師か是をきゝ。どへんはいまた知らぬか。あれこそ都に隱れもなき。三條の金あきんどの吉次殿よといひけれは。あふさる事有珍しや。おくよりもいつの比の。御上りそ。去年の冬罷上りて候が。よかんやう〳〵うちとけは。此間に罷下り候へし　さもあれ晉に承る。秀平殿と申は。いか程の分限の人そ。秀平殿と申は。五十四郡のそうず。ふくし。白川の關よりも。東は殘る所ましまさず。さいちやうこくみんあひしたかひ。勢をもつ事は。其數を知らず。日本半國よりなを大き分限とこそ承れ。扨其人は奥州の住人か。いや都の人と承るが。一年源氏の御大將。八幡殿申せしが。奥へ下らせ給ひ。さたたうむねたうやすたうを。たいらげ御上洛の御時。奥州の守護代を。彼もとひらに下したぶ。五十四郡の國人は。みな本平に思ひつく。こはきをやはらげ。よはきをなで。たみをあはれひまつりごとこはうに任せてとりおこなふ。國のなひきしたかふ事は。草木の風になひくかことく也。かくて奥を納めつゝ。秀平殿の代々は。吹風も聲をとめ。立浪もきしをあらはす。よき大將と承る秀平殿と申は。ぞくしやうよき人

にて。國をもよく納め給ふ。しちんまんぼうあきみちて。たゝ長者のくらひと申也 牛若殿は聞召是はたもんの侘宣や。秀平は先祖の下人。頼み下る物ならは。なさけなくはよもあらし。吉次を頼み道づれして。下らはやと思召。吉次とふかく約束をめされ。 東光坊にお歸りあり。常の所に御入あつて。旅の出立をしたまふに。なみだもさらにせきあへず。いつも御身をはなされぬ。金作りの御帶刀。こんねんどうの腰の物。是そしのびてもたれたる。めしつかはれしわらはの。あひすりの直衣に。御身のめされたる。せいかうの大口を。めしかへさせ給ひ。御くしからはにたかくあげ。七歳の御年より。すみなれさせ給ひたる。東光坊をたゝ一人。小夜にまぎれて出給ふ。さすかにみ寺の御名殘。かたへの兒たちこじ同宿の名殘とも。あひねんふかき人をゝし。未來をかけてちぎりしもの。今も知らせてあるならは。ぜんごを守護しゆくへけれとも。人目をしのふ旅なれは。たゝ一人そお出ある。こゝろさしこそあはれなれ。 師匠に名殘のをしけれは。記念のためと思召。一首の哥をそのこされたる。思ひきや身を奥山に住居して。このみひとつになりゆかんとは。か様に詠し給ひ。庭の名木名石ともを。いつの世にかはたちかへり。また見んすらんあちきなや。たうり物いはねは。我出ぬるをよもつげじ。梅鶯舌を含とも。なと曉を知らせぬそ。扨本坊をたち出て。地主權現ふし拜み。あか井の水もさへくもり。かけさへやどす。月もなし。七つにまがる鞍馬坂。夜更て物うき道野邊を。貴布禰の神のやしろこそ。勝頼母敷聞えけれ。なこりそをしきいちはらの。たちとゝまりて。みそろ池。ちはやふるらんかみかもの。道をたゝすの森すきて。夜はほの〳〵と白川や。吉次に今も粟田口。はやまつ坂に牛若殿。程なく

着せ給ひけり。 まつ吉次は見えすして。美濃の國の住人。關原の与市。わうばんを請取て。夜を日につねでのぼりしか。其夜は大津にとまり。松坂のあたりにて。牛若殿にまいりあふ。牛若殿は御覽して。源氏のものへのかどいでに。平家の郎等にあふところは。無念なり。いかさまきやつに見あひ。都に披露せさせては。あしかりなんと思召。扇をかざし。あみ笠をかたふけ。さらぬ躰にておとをりある。与市か馬と申すは。あけ六歳の野取の駒。物を見てはきれやすし。宵にふつたる雨水の。道にたまりて有けるを。そゞろにけあげけるほとに。牛若殿のひたゝれは。たゝしほる計にぬれにけり。牛若殿は御覽して。駒の足たちしとろ也。あしくもゆきあひけるやとて。そなたも見ず逃給ふ。与市らくにほこつて。にくる心のいたひけさに。手綱もとらでけかけたり。 牛若殿は御覽して。然るへくは御馬を。しつかにうたせ給へよ。我等かやうなるわらんべこそ。けあげの水をはいとはずとも。都方の弓取の。とがむる方も候べし。手綱にあまらは其馬を。捨ておとをり候へ。あつたら馬をすてふより。やあをりてひけとの御諚也。与市無念のことばをきゝ。子程のものにあてられて。返事をせぬ物ならは。京田舍のものはらひと成へし。また知らぬ躰にてとをりたらは。さしてなんにも成ましきを。運のきわめのかなしさは。あれ程のわらんべ。あつれは路次のらうぜき。あてねば。時のちじよく。太刀のみねにて打臥て。おひうしなへと下知をする。承るとて 若黨三人中間六人。以上九人の者ともが。太刀長刀のさやはづし。こゑ計にておどさんと。をれは〳〵とそおどしける。牛若殿は御覽して。をのれらが有様は。いなりまつりか祇園繪歟。加茂の祭りの物まねか。具足に風をひかせんとや。おそろしうもなひぞとて。

から〳〵とぞ笑ひける。与市此由聞よりも。につくいやつかことばかな。具足よどしにきりばしすな。太刀のみねにて打臥て。追うしなへと下知をする。承り候とて。まん中に取籠る。牛若殿は御覽して。そうじやうがかげにて。ならはせ給ひし天狗のほう。出あふ處と思召。御帶刀するりとぬひて。みつけんにさしかざし。大勢の中へわつて入。むかふものをおがみきり。めてへまはるは車切。弓手へ請てひだりたち。よせてかへすはさゞなみ切。木すゑをもむはあらし切。天狗だをしのわらひ切。爰はと思ふ秘事の手をは。殘さずこそはつかはれけれ。牛若殿の御帶刀。ひらめくと見えしかは。手のうらいまたかへさぬ間に。六人死んで三人は。いた手おふてぞひれふしける。与市此由見るよりも。あれ程のわらんべ。たとへは十四か十五かに。いか程もあまちじ。てなみ見せんと云儘に。駒掛よせてちやうとうつ。牛若殿は御覽して。きやつは日本一番の。おこのものにて有けるや。ぢきにきつて捨ては。思ひでのあらはこそ。なぶり切にきやつをして。あそばゞやと思召。請太刀になつてぞまはりける。与市此よし見るよりも。されはこそ此わつは。にげて行歟いづくまで。にがさんとやあなげかけ〳〵切たりけり。牛若殿は御覽して。いつ迄きやつをなぶるべきと。思召。弓手にきれてかひちかひ。与市が馬のさんづを。ひらきうちにちやうどうつ馬はうたれてはねけれは。くらだまにとられて。まつさかさまにどうと落る。をきん〳〵とする處を。はしりかゝつてみねうちに。ちやう〳〵とぞ打たりける。すこしもくぼき所にて。雨水にぬれにけり。牛若殿は御覽して。あふもつたいも候はす。兒と女には御免さうかや。馬よりをるゝいんぎんさよ。お供のものはいづくに有そや。ああの馬ひいて与市殿をのせ申せ。それ

〳〵と有しかと。返事するものなかりけり。牛若殿馬をひきよせ。是にめされ候て。御歸り候へや。与一殿と有しかは。与市餘りの恥かしさに。馬も下人もふり捨山科寺のかたはらに。ふかくしのふていたりけり。夫よりも牛若殿。奥へ下らせ給ひて。天下を治め給ひけり

烏帽子折

（大頭左兵衛本）

抑安元々年三月中旬に。源の牛若殿。くらまの寺を御出あり。けふよろこびに近江なる野路の宿にて。吉次信高に行合せ給ふ。其日の留りはかゞみの宿。吉次か宿は菊屋ときこゆる。かゞみの宿の遊君ども。ざつしやうかまへ吉次殿をもてなす。去間吉次世にありがほなる風情にて。順の盃下し。ぎやくのさかつきとはせければ。其後はさかもりになる　あらいたはしや牛若殿は。人目をつゝませ給ふ間。切戸のわきにすゞ〳〵と唯一人たゝすみ給ふ　爰に平家の侍大將監物大郎頼方。悪七兵衛景清。ひだの三郎左衛門。はや馬に乘てばむばの宿をふれて通りけるは。此路次を十四五なる少人のとをらせ給ふ事のあらば。いそき御供申都へ上たらんずる輩に。上下をゑらまずくむこうあるへしと。ふれて其日に都へぞとをりける。牛若殿は聞しめし。あら口惜や。此儀にてあるならは何しに鞍馬をは出けるぞや。それ八しやうのおほちひろしと申せども。年にもたらぬ牛若が。身のをき所のなきこそ何より持て口惜けれ。去なから唯今はちごとこそふれてあれ。男とふれてあらばこそ。しよせむ男になりて下らばやと思召。下女を近付此邊に烏帽折はしさうか。下女承つて。今日都より下らせ給ふ人の。是にて烏帽子を御尋候かさりながら。烏帽子の御所望にてさふらはゞ。あんのむかひに見

えたるたかもかりの内こそ。五郎太夫と申て烏帽子の上手にてさふらへ。牛若斜に思召。もがりの内へ尋入案内申さう。内よりもたそとこたふる。いやくるしうも候はず。吉次信高の供して下るくわじやにて候が。烏帽子の所望にてこれまて參りて候。其時烏帽子折の太夫。牛若殿をしやうし申。扨くわしや殿のめされうする烏帽子は。大さびざうかこさびざうか。舒せいやう當世やう。如何樣なるをめされうするそおこのみ候へ。やかて折て參せう。牛若殿はきこしめし。あら口惜や。烏帽子はたゞくろければ。くろいと計心得たるに。あまたの名のありける事よ。何とがな折せうな。あふおもひいたしたり。われらかせむそは左折をめさるゝよしを承つて候へば。人數ならぬ牛若も。左へ折せきばやとおぼしめし。なふいかに太夫殿。此くわじやがきうする烏帽子は。それなるおほさひに。つぶのちつとあららかなるを。一くせみくせませ。ひなかたにあひをあらせ。くしがたをいが〳〵と。一ためためて。左へ折てたび給へ。其時烏帽子折の太夫事の外に腹をたて。さればこそあの樣　る下らふに物をこのますれば。わがみのくわかいの程をもしらず。事も辱や。左折をめされうする人は皆源氏の御子孫なり。一年おはりの國野間のうつみにてうせ給ひし左馬頭よしとも。其御子にて御座有。ちやくし悪源太よしひら。次男ともなが。三男よりとも。四郎はあのゝ御ざうし。五郎は遠江かばの御ざうしのりより。六はだいごの寺のきやうのきみ。七はおむじやうしの悪禪師のきみ。八男にあたらせ給ふ當寺。鞍馬におはします。牛若殿などこそめされうするに。やあわとの原かやうに　吉次が供をするくわじやか左折をきうする事おもひもよらぬ。所望かな。牛若おかしくおほしめし。仰はさにて候へど。奥へまかり下らふ

ず。關〳〵とまり〳〵にて。左折をきたるよと。人のとかめのあらん時。都の宿に。ふるき烏帽子の有つるを。所望してきてさうが。左折も右折も。此くわじやはしらぬなりかゝる。むつかしき烏帽子を。關屋にあづけ申といふて。うち捨て。とをるならば御身のなむも。あるましきわつはがとがものかるへし 太夫聞てあら面白の言葉づかひや。いかさま是はやうある人よとおもひ。一旦は申までと。烏帽子折すまして參らする。牛若烏帽子取まはし御覽じて。よひ烏帽子にて候が。ひとつのなんが候。太夫聞て。ぢになんが候か。さびにくせが候か。ひなかたくしがたこゆひ所。いづくになむが候ぞ折かへて參らせう。牛若殿聞召。地になむも候はすさひにくせも候はす。いづくになむはなけれとも。折節烏帽子のかはりを持合さるが。ひとつのなむにて候。太夫聞て。あらこと〳〵しのくわしや殿の申事や。あの吉次は。一年に一度二年に二たひ折上する其。供して下くわじや殿なれば。心安くおもはれよ。くわじや殿が奥はなむけにとらせうぞや。牛若殿はきこしめし。あら口惜の太夫かとらせことばやな。牛若が世に出る物ならば。家のきずともなるべき言葉なれば。たちをとらせてゆかふずるが。それは千五百里の道の用心もかくる。刀をとらせてゆかばやとおぼしめし。源氏御重代のこむねむとうのこしの物を取出させ給ひて。なふいかに太夫殿。此刀を烏帽子のかはりとばしおぼしめされ候な。明年の夏の比。奥よりもよき馬を用意申さう。暇申てさらはとて。牛若宿にかへらせ給ふ。其後烏帽子折の太夫女房をよび出し。されば此年月かゝる下細を仕り。しむみやうをたすくるを。佛神三寶もふびむとおぼしめさるゝによつて此刀を給はる。見給へこれはみなこかねぞ。都の町にてこきやくし。一期の内をらく〳〵とす

ぎうする事のうれしさはさていかに 女房聞て何と物をはいわすして。太夫がもちたる刀をたゝ一め見。やかてさめ〳〵となく 太夫是を見て。あらふしぎの女房のふぜいかな。おのこのたからをまふけてよろこばゝともによろこばずしてわこせは何をなげくぞ 女房きいて今は何をかつゝみさふらふへき。さては先程に烏帽子めされたるくわじや殿は。みつからがためには三代さうおむの主君にて御座さふらひけり。それをいかにと申に。御みの持せ給ひたる刀は。源氏御重代のこむねむとうと申刀。みづからをばいかなるものとおほしめしさふらふぞ。是は一とせおはりの國野間のうつみにてうせ給ひし。義朝の御内。かまたのためにはいもふとなり。君にはなれ參せ。みのをき所なきまゝ。此宿におち留り。御みにちぎりをこめ。今年は九年に成さふらふ。九年の情に其刀を。みつからにたへかしなふ わか君のわうしうへと。はる〳〵御下。まし〳〵に奥はなむけに。參らせん 太夫聞て。安間の事。ふうふかいらうたむせつの。わりなきいもせの中なれば。何をかおしみ申べきと。女房にとらする。女房斜に悦で。へいし一ぐにこゆひを取そへ。吉次が宿へ尋入。牛若子に相奉つて。なふいかにわかきみ。みづからをばいかなるものとおほしめされさふらふぞ。是は一年こきみの御供申うせたりし。鎌田がためにはいもうと也 なむしのみにてもさふらはゝ。御最後の御供申へきか。たとひ女のみにてさふらふとも。いかならんずるふちせにも。みをしつめむこそじゆんしにてはさふらへとも。捨かたきはいのち。つれなくいのちながらへ。面目なくはさふらへとも。烏帽子折の太夫にちぎりをこめ。今年は九年になりさふらふ。九年の情に此刀を。太夫に所望し。わがきみのはうしうへと はる〳〵御下ましま

すを。一目おがみ申さむためにこれまて参てさふらふぞや〳〵それ烏帽子をきるはこゆひをゆふてきる事さふらふ。その烏帽子たまはれこゆひをゆふて参らせむと。はしげたやうに雲ゐにさつとゆひあげ。此烏帽子めされ奥へ下らせ給ひて。秀平佐藤をおたのみ有て。すまむぎをいむそつし。平家の人々を御心のまゝにほろぼし。今一度御世にたゝせ給へ。暇申てわかきみとて女房宿にぞかへりける。牛若殿は御覽じて。源氏のものゝ門出に。らうだうにあふつる事の目出たさよ。それ烏帽子をきるには。ふたりの親をとるならひの有と申か。扨牛若はたれをゑぼし親にとらふぞ。あふおもひ出したり。われらかせんぞ。八幡太郎よしいゑは。七歳の御年やはたへお参有て。やはたにて御げむぶくめされ。八幡太郎よしいゑとなのらせ給ふ。次男にあたり給ふは。かもにてげむぶくめされ。かも次郎となのらせ給ふ。三男にあたり給ふは大津の神らへお参あつて。しむら三郎となのらせ給ふと承る。其ごとく牛若もかた親をば氏神八幡をとり申さうず。かたおやは此年月住なれし。鞍馬のだいひたもむをとり申さうず。たちはたもむのつるぎ。刀は八幡と心さし。ないの柱にたてをかせ。九つのもとゆひみづからめされ。御ぐしおはやしあつて。ゑぼしため付てめされ。へいじの酒をみつからうつし。太刀の前にも三々九と。刀の前にも三々九とたむけ。其後わがみもおめしあつて。さもあれ今夜の客人が名をば何と申さう。けみやうは源九郎實名は義經と申なりとひとり事をし給ひて。四季のいはひをとげさせ給ふ。あらいたはしや此きみ。御世が御世にて御げむぶくましまさば。あめが下のしよ侍。まいり奉公申へきか。うき世にしたがふならひとて。よぶも〳〵こたふるもたゞ一人の御げむぶく。めてたきが中にもさきたつものは。

なみだなり。天明ければ牛若殿。烏帽子ためつけてめされ。吉次が前にかしこまつておはします。吉次きつと見てや。くわじや殿は烏帽子をめされて候か。それ烏帽子をきるには。二人のおやを取ならひの有と申が。さてくわじや殿はたれを烏帽子おやにめされて候ぞ。牛若殿はきこしめしさん候。餘に人々の烏帽子めしつれたるが浦山しさに心ならずにきては候へ共。仰のごとくいまだ名をばつかず候。とてもはや天とも地とも父母とも。万事は頼申うへ。いか様にも名を付てめしつかはれ候へ。吉次聞てあふ。此上ちからをよばず。さあらは。けふよりも御みが名をば京藤太と付ぞやあ。かしこまつて候。但と申に御みかやうになまめいたる若人を。かちにてろしをつれんずるが大事。けふよりして吉次が太刀をかづいて。おくへ下候へ。それいなとおもひなば。是より都へ上られ候へ。牛若殿は聞しめし是をたとへに申かや。世は。まつせにをよぶといへと。日月はいまた地におちず。天上のからにしき。くたつて。でいしやにまじはる事なし。何として源氏のちやく〳〵が。うき世をわたる吉次か太刀をもとふそ。あらはかなの心やな。吉次か太刀をもたはこそ。めいどにましますちゝよしとものの御はかせを。もつにこそとおぼしめし。ひげきりの御はかせをわつそくにかけ給ひて。吉次が太刀をかづいて。おくへ下らせ給ひけり。なみたの雨は。玉かつらむかしはかけて見し物を。去間吉次やう〳〵下る程に。みのの國大はかの長者のたちに付。かの長者の中のでいへは。大名高家の人たにもとまり給はぬに。吉次かとまるいはれは。義朝の御ために。一間四面の光たうをたてられし時。かね五十兩馬十疋勸進に参る。情のふかき者なればとて。折のほりにはとゝまり候。大はかの遊君ともさつしやうかまへ吉

次殿をもてなす。去間吉次世にありがほなる風情にて。京藤太はなきかこなたへ參て上らふさまの御前にてお
しやくを申せ。あらいたはしや牛若殿。いつしやく取ならひたる事御座なけれとも。時世にしたがふならひと
て。おつとこたへてめさるゝに。誠取ならはざる事なれは。てうしの酒を弓手めてへさつ〳〵とこぼし給ふ。
吉次きつと見て。大のまなこにかとをたて。ぶがくの者か參り人のお前の御しやくを。さやうに給るものか。
きつくわひなり罷立としかる。あらいたはしや牛若殿時ならぬかほに紅葉をさつとちらし。さん候我。西國が
たにて諸山寺のしゆとのしゆつしの御供申。しきみつゝじあかの水。さやうの奉公をこそ申ならひて候へ。ぶ
しのおまへの御しやくは是かはじめにて候に。いかにもをしへてつかはれ候へ。吉次聞てやあ。さやうの事を
もわたくしにてこそ申せ。是は人のお前そ罷立としかる。あらいたはしや牛若殿。しほ〳〵として座數をたゝ
せ給ふ。爰にはまちどりのつぼね。長へまいつて申されけるは。なふきみきこしめせ。しうだにもふかぬ笛を。
今參の京藤太とやらんがふくげにさふらふ。世にありがほに笛をさいてさふらふぞ。君の長は聞しめし。わど
せはとう海道のなをりを申物かな。藝はみをさけず。でゐの内のはちす。しるを人りんといゝ。しらぬをきち
くにたとへたり。いかに吉次かつれたる。京藤太と申ともふけばこそ笛をばさすらめてうしひとつ所望せ
よはまちとり承て。牛若殿の御そばちかく參。きみのちやうよりのしよまうにてさふらふ御みの腰にさし
給ふ笛一てあそばせ。牛若殿はきこしめし何。此くわじやに笛ふけとざうや。大和竹にめをあけたるくさかり
笛にて候を。あづまの旅のとぜんさに。もちは持て候へ共。ふく事は中〳〵おもひもよらぬ事にて候。吉次聞

てやあ。何と申ぞ。かみさまよりの御所望は。なむちが爲にはしやうがいのおもひてにてあらずやたとひ。く
さかり笛にてもあれかし。又木こり笛にてもあれかし。などてうし一手ふき申さぬぞ。牛若おかしくおぼしめ
し。是は一旦の禮まで。さらば一てふいてきかせばやとおぼしめし。母のときはの淀の津の みた次郎が本
よりもかいとらせ給ひたる こうぼうだいしのせみおれなれは。いつくしきとも中〳〵にあふ申計もなかりけ
り。此笛をとり出し。かんこでうさく。中六下九とて。八つのうたくちに。花の露をしめし。とうばむしきに
ねをとつて雲ゐにさつとふきあけ。万事をしづめてあそばしたり。長此よしをきこしめし。面白の笛の音や。
唐橋の中將殿は日本一の笛ふき。ふじ一見の其爲。おくへお下ましませしが。此宿におつきあり。夜とゝも笛
をあそばせし。おんぜいいきさし程ひやうし物あひすむだる所は。唐橋殿の笛にはみきはまさつておぼえたり。
是程の笛にて。さだめてがくはふくならん。がく一手あそばせ。みなもと聞召。とてもてうしをふくうへ。
ふかばやとおぼしめし一こつてうにねをかへじゆつこむらくをあそばされ。やかてをしかへしくわいばいらく
をあそばすちやう此よしを聞召。面白の笛のねや。あら面白のがくのなやくわいばいらくといふかく。さかづ
きをめくらすたのしみ下戸もじやうこもをしなへて酒をのめとの笛の音や。然るへくはあすはかり。吉次殿が
とまれかし。京藤太に笛をふかせくわんげむしてあそはむ きみの長は聞しめしあら面白の笛ざふらふや。
かむかはしらず本朝にか程の笛は有がたし。みづからひとつ給はつて只今の笛の殿におもひさし申さう。吉次
聞て。いかに兄弟内のもの。ちかふまいつて物をきけ。それかしが都にて申せし事は是ぞとよ。笛はふかずと

腰にさせ。舞はまはずとあふぎをつねにもてと申せしはこれにてこそ候へ。あの京藤太が笛をふかずは。何として上らふさまの御さかづきを給はらふぞ。それひとつたまはつて。げむぜのみやうもむ後世のうつたへにせよ。あら浦山しの京藤太と。さかづきをうらやみしはことはりとこそ聞えけれ。そのゝち牛若殿。三度きこしめす。牛若殿の御さかづきがこなたこなたへまはし。夜もふけければはまちとりさかづきをおさめみなつぼね〳〵へぞかへられける。其後はまちとり。ごせたちを近付。いかにはごせたちきゝ給へ。今度吉次殿がはしめてつれて下るしよくわんは。みめもいつくしい者。笛も上手。但と申におかしき事を申物哉。それ笛の名はかむちくこちくやうちく。あを葉ふたば。天人の一重がくし。こうぼう大しのせみおれ。吾朝の笛はうぢ竹大和嶋竹より竹なとゝこそ申せ。まだこそきかねくさかり笛。あふむかしの人は心のいたりかなふて笛にて草をかりたればこそ草かり笛とは申つらん。おかしさよなむどゝ申てとり〳〵にこそ咲けれ。折節きみの長は。ものごしにて聞召。なふさてわごせたちは其くさかり笛の由來をしつてわらふかしらてわらふか。百樣をしつたりとも一樣をしらすはあらそふ事なかれと申たとへの有ぞとよ。いで〳〵其くさかり笛のいはれを語てきかせむ。昔我朝にようめい天王と申せしは十六にならせ給ふまで。ささきのみやもましまさず。有時くきやう天上人さしあつまつて。あふぎを六十六本折せ六十六本に繪女房をかゝせ國〳〵へまはし。いかならんつるしづの女。しづの子なりとも。此扇の繪にゝたる女房やある。いそぎ大りへまいらせよ。一のささきにいわふべしと日本國をそふれられたる。日本ひろしと申せども。このあふきの繪ににたる女房は一人もなくしてあふきはみな都

へぞかへりける。かゝりける所に。つくし豐後の國内山といふ所に長者一人有。四方に四万の藏をたててすめば。四万の長者と申せしを。人の申やすきまゝまの殿と申。四十のゐんにいるまて子のなき事をかなしみ内山の正觀音に參り申子をこそし給ひけれ。あらありかたやきせひのしるしはや見えて。寶珠を給ると北の御方御覽じて。やかて御ちやくたいの御みとなり。七月の煩九月のくるしみ。十月半と申にさむのひぼたいらかなり。とりあげ見給へば玉をのへたることくなるひめきみにておはします。御むさうによそへ玉よの姫と名付申。いつきかしづき給ひけり。かの姫十四のはるの比繪扇の下けるを引合て見給へば。ものいはゞあふぎの繪がねたむべうに見ゆるいそき内裏へそうもむ申されたり。御門ゑいらむまし〳〵て。いそぎ内裏へまいらせよ一のきさきにいはふへしとやかてちよくし下。長者承つてたとひせむしにても候へ。只一人のひめなれはおもひもよらぬ事なりと。せむじをそむき申されたり。御門ゑいらんまし〳〵て其儀ならはまの殿。けしのたねを日の内に一万石參せよ。それがかなはぬ物ならば。姫をだいりへ參すべしとてかさねてちよくしくだる。長者承つてたとひいかていの物なりとも。日かすをふらばもとむへきが。殊更けしのたねを日の内に一万石。なにとしてかはもとむべきやあ女房たゝ姫をたいりへ參せよ。長者女房これをきゝなふまの殿。いたふなさはぎ給ひそよ。御身十八みつから十四の秋よりも長者のゐんがうかうふりて。内の者けむそく何に付てとぼしき事はなけれども。かゝるものは時としてくさ合にもあふやとおもひ。あのいぬゐにあたりてかやの藏をつくらせ。年〳〵のけしのたねを（カミル）とりあつめてをいたるが。一万石はそはしらす十万石（ヒツ）もあるらむ。（ヒツ）長者なのめに悦て。さ

らば車をかざれとて車のかずをかざつて。日の内に一万石。だいりへそなへたてまつる。御門ゑいらむまし〳〵て所詮たゞ。まの殿は三國一の長者てあり〳〵御門ゑいらむまし〳〵て其儀ならはまの殿しよつこうのにしきをもつて。りやうがいのまむだらをはたいろに七なかれおりつけてまいらせよ。それがかなはぬものならば。ひめをだいりへまいらすへしとかさね〳〵のちよくしたつ。長者承つて。こはいかにしよつこうのにしきをもつて。りやうがいのまむだらとやらんは佛たちのじやうとにて。はすのいとをもつておらせ給ふと承る。われはぼんぶのみとし。何としてかはもとむへきぞ。やあ女房姫をだいりへ參よ。長者の女房これをきゝたゞ一人のひめなるを。だいりへそなへまいらせ。ぎよくろうきむでんのうてなの内の住居をせば。わが子とはおもふとも見むずる事もかたかるへし。夕さりはなどりおしみのくわむげむとて。夜とゝものくわんげむなり。されどもあかつきはまどろみ給ふ。かゝりける所に。内山の正觀音は。長者ふう〳〵がまくらがみにたちよらせ給ひて。いかに長者。御身がむすめはみつからが申子よな。おしむ所もふびんなれば。もろ〳〵の佛達をしやうじ申。長者が中のでいにて〳〵にしきをおるぞちやうもんせよ〳〵承つてちやうもむす〳〵たばたひこぼしの〳〵おるひの音は〳〵てい〳〵ほろゝこゑはさなから御法なり。はたいろに七ながれ。おりつけてちやうじや殿の中のていにをき給ふ。長者なのめによろこふて。いそぎだいりへまいらせけり。御門ゑいらんまし〳〵て。しよせむたゞまの殿は。佛にてましますや。佛のむすめをこひかねて十ぜむの位をすへるとも何かはくるしかるべきと。位をおすべりまし〳〵て。十六の春の比。たどろ〳〵と。下らせ給ひける程に。十八日と申には。

ぶむこの國に聞えたるはや内山に付給ふさる間御門は。とある小家に一夜の宿をかり給ふ。宿のていしゆ見參せ。あらいつくしのしよくわんや御みはいつくの人ぞ。さん候是はならはぬ旅のうき雲の。とまりさだめぬ修行者にて候。大夫きいてあらやう〳〵しや。たゝ國を仰候へ都のものにて候。花の都人は。かゝる遠國へは何のためのお下向ぞ。奉公の望にて候。太夫聞てあらしようのくわじや殿の奉公ごのみや。この太夫こそ長者殿のしつしなれば。此年になるまで子といふものをもたず候。けふよりして太夫か子になり候ひて。田地をかうさくせんずるとも。又かいせんをせうするとも。それは御みのまゝざうよ。御門ゑいらむまし〳〵て御覽せられ候ごとく。やうりうの風にふけたるごとくにて。田地をかうさくせむ事も又かいせんとやらんも中〳〵おもひもよらす。たゞ奉公ならば望にて候。太夫聞てあふ此上は力及ばず。さらば長者に申さんとて。長者殿にまいり此よしかくと申上。長者きこしめしいそいてつれて參れ。承と申て御門をくそくし奉る。長者御覽あつて。あらいつくしのしよくわんや御身はいつくの人ぞ。都のものにて候。名をばなにといふぞ。山路と申候。山路とは山の道。人の名には始而きいたやあらおもしろのなや。いかに山路殿。此長者こそ。牛を千疋もつてかひ候が。九百九十九疋にはとねりかそふてかひ候。あれに候あめなるうしは。とねりともがはつたとにくむで。くさをも水をもかはぬ也。今日よりして山路殿に奉る。くさをも水をもよきにかふてたひ給へ。あらいたはしや御門は。戀ゆへりやうじやうし給ひて。明れば牛の口を引。千人のとねりと打つれてうしろの野べに出させ給ふ。千人のとねりどもは。かりならひたる事なれば。てんでにかまをひつさけて〳〵かきよせ〳〵

くさをかる。いたはしや御門は。いつかりならはせ給はねば。牛にうちかゝり。笛うちふいてまします。馬はばとう觀音。牛は大日如來の。化心と承るがけにやさありけるか人間は。見しり申さねと。畜生なれともいろふぜいを。見しりたるかとおぼしくて。くさをもはまず。つのをかたふけ。したをたれ御門の。笛をちやうもむす。千人のとねりども。此よしをきくよりも。山路殿がふく物の。名をば何といふやらん。よこ笛と申さうあふ。おもしろひぞや山路殿。くさばしかるな笛をふけ。なむぢが牛にはくさをかりてかけふそよふけよ〳〵といふ程に。一度もくさをかりたまはす。これをもちてこそ。夜ふけて心すめるをば。山路のくさかりよるの笛。わかめかるは田子の浦。若草かるはむさしのよわかめわかくさわかの浦。ようめい天皇の。戀ゆへあそはす。笛をこそくさかり笛と申なり。是はつくしの物語。さても都には御門をうしなひ參せ。くぎやう天上人さしあつまつてはかせをいそぎめされけり。はかせ參らなひ申。さん候こうつる八月十五日に。うさ八幡の御前にてお放生會と申事をとりおこなはせ給へ。それはさていかていものにさすへきぞ。さん候つくし豐後の國。内山といふ所に長者一人あり。彼者に御神事をつとめさするならは。御門は都へくわんきよなつて。天下は目出度かるへきよしを例文を引而申。さらばいそきつくしへ使者をたてよとて。長者が門にさか木をたつる。折節長者出合せ給ひ。是は何といへる子細ぞや。さん候こうする八月十五日に。うさ八幡の御前にてお放生會と申事をとりおこなはせ給へ。それはさていかていのものがいる事にて候ぞさん候。しきしやうこくしやう。神ぐわんみやうど。八人の矢乙女。五人のかぐらおのこまいり。ていとうのつゞみを打。さつ〳〵

の鈴をふり上。けいば上むまみこの村。しゝ人てむかくとをつて後やふさめざうよ。長者聞召て。あら事むつかしげなる事やとて。きんりきむがうを尋るに。のこりはみなそろいたれども。此やぶさめとやらんにはつたと事をかく。其時千人のとねりをめして。もしなむぢらが中に。やぶさめばししつてあるか。とねり承つて。上にだにもしろしめされず。其上われらは明暮牛にこそのりならひて候へ。やぶさめとやらんは中〳〵おもひもよらぬ事にて候。長者きこしめし。げに〳〵それはさぞあるらむ。あの山路は。都の者と聞てあり。もし失ぶさめをしつて御神事をつとめさする物ならば。うさ八幡も御ちけむあれ。長者がむこにとらふぞ。其時御門はにつことおわらひ有て。さん候やぶさめとやらんはやすさうなる事にて候。都には十町にばゝをやり。二町はのけばゝと名付。八所に的をたてゝあそばすをは八つ的と申て。是はくぎやう天上人のわさ。神の前には三町にばゝをやつて。三所に的をたててあそばすをば。やぶさめと申てこれはぶしのしわざにて。何よりもやすさうなる事にて候もの。長者きこしめして。さてはなむぢはよく心得て有ける事や。やぶさめしつて御神事をつとめさす物ならば。ぜひ長者がむこにとつて四方に四万の藏をたて。しゆたのたからをそへてえさせうするとかたく契約し給ふ。すでに八月當日にも成ければ。うさ八幡の御前にきんりきむかうの大名小名。さじきをうちらちをゆひ。各見物し給ふ。長者ふうふも同さじきをうつて見物す。去間しきしやうこくしやう。神くわんみやうと。八人のやをとめ。五人のかぐらおのこ參。ていとうのつゞみをうち。さつ〳〵の鈴をふり上。けいばあげ馬みこのむらしゝてむかくとをつて後やぶさめになる。去間御門には。いろよきいしやうそく奉り。

かげなる駒にかいくらをいて。御門にひつたてたてまつる。御門なのめにおぼしめし。ひきよせゆらりとめされ。はゞ渡しとつてかへし。一の的ちやうとあそばす。二の的はたとあたつて三の的に此度。ひらいてかゝらせ給ひけるに。神てん俄にしむどうして。白きすいかむたて烏帽子。きむのしやくをおもちあり。かたしけなくも八幡は。ゆるき出させ給ひて。しらすにかしこまり。いかなる御事候ぞ。王は十ぜむ神は九ぜむ九ぜむの神の神事を。十せむの御みとして。つとめさせ給へば。いよ〳〵五すいおもふなりさふ。今は御門に還御なれ還御ならぬ物ならば。まつせのしゆじやうをばつせうするで候ぞ。人おゝき其中に。長者ふうふは。さしきよりこほれおちさせ給ひて。いかなる御事ぞ。十せむの御みを。三年が間。つかひ申事共口惜さよと申て。りうていこかれたりければ。御門ゑいらむまし〳〵て。よし〳〵くるしかるまじ。御身かむすめを。こふるゆへに。三年は奉公ありつるそ今はひめをまいらせよ承と申て。辱も。うさ八幡の。かいしやくにむにて玉よの姫は十六。ようめいてんわう。十八と申に。御門に還御なり。ぎよくろうきむでんのうてなの内の御すまひし。ゑむわうひよくのかたらひあさからずこそ聞えけれ。其後御子をもうけさせ給ひて。聖徳太子と申て。わが朝に佛法をひろめさせ給ふなり玉よのひめは正觀音。ようめい天王はあみた如來の化心。聖徳太子。くせ。觀音のけむげなりようめい天王。戀ゆへあそばす笛をこそくさかり笛と申なれしらぬ事をはわこせたちはらわぬ事であるぞとよ。其後きみの長ははまちとりをめされ。以前に笛ふいたる京藤太とやらんはおもへは見る所の有に。こなたへぐして參れ。承と申て牛若殿をぐそくし申。去間牛若殿座敷になをらせ給ふ。長此よしを御覽

じてあらふしぎのくわじや殿やざしきになをる風情はよしともにたかはず。御目の内は偏に悪源太にて御座さふらふ。物のたまふこわいろは朝長にたがはす。もしも源氏のゆかりかゝりにてましまさば。はや〳〵おなのりさふらへや。牛若殿は聞召。さん候是は上らふの子にてもさふらはす。都は三條よね町に住居する下らふの子にて候物。長此よしを聞召。なふ御内はなにとの給ふぞ。みつからはよしともの妻女なり。まむじゆの姫と申てわすれかたみの御座さふらふを。いらたか寺のふもとに出家になしをき申なり。さて此あなたに一間四面に光だうをたて。あみだの三尊をあんじ申。義朝悪源太友長。父子三人の御ゑひをあらはし申なり。若も源氏のゆかりかゝりにてましまさば。しやうかうなんどあれかしなふあら心ぶかのくわしや殿や。源きこしめし。のきのたま水ちり〳〵ぐさ。つゝめともつゝまれす。さてかくせともかくされず。ちゝよといへる聲をきゝ。やまふきかほに打匂ひ。今は何をかつゝむへき。義朝には八なむ。ときはらには三男。鞍馬の寺に。住居せし牛若と申物也。長此よしを聞召。さてはくらまにおはせし。牛若子にて御座ありけり。若君を見申せは。しゝて久敷なり給ふ。義朝の御すかたを。見參る心ちのありてなつかしさよとの給へは。源も二歳の年。はなれ申せしちゝごをは。夢ともさらにわきまへず。只今かやうに仰らるれば。めいどにましますちゝごせを。おかみ申こゝちのありてなつかしさよとの給ひて。御たもとにすかり付。ふししつみてぞなき給ふたがいにつきぬ。其汨余所の。たもともぬれぬべし。君の長ははまちとりをめされ。あれ〳〵ぐそくし申御ゑいおがませ申せ。承と申て牛若殿をぐそくし申。さる間牛若殿たち入御覽ありければ。げにとよしとも悪源太朝長。ふ

し三人の御ゑいをあらはし申。牛若なのめにおぼしめし(下クトモ)しやうかうらいを參せ。ならはぬ旅の御つかれ。らいはむ引よせ枕とさため。少まとろみ給ひけり(コトハ)かゝりける所に。義朝悪源太朝長。ふし三人の人まつくろによろひ。牛若殿の枕神に立よらせ給ひ。あふうれしくも少心におもひ立て。奥へ下ものかな。吉次吉内吉六とて。兄弟三人かいふ事を。われ〳〵ふし三人がいふと心得。西をひがし北を南へともそむくへからず。吉次が太刀をかづいて。おくへ下候へ。暇申てさらばとてたちかへらんとし給ひしが。そよ誠わすれたり。日本國のぬす人が。吉次がかわこに目をかけ。青野が原によりきし。夕さり夜うちによせうす。用心よきに仕れ。我々ふし三人の者。くさのかげにてくろがねのたてとなるへきぞ。かくてもあらまほしけれども。しゆらがはしまるに。暇申てさらばとて。たちかへらんとし給ひし時。源夢心に。あらお情なやなふしはらくと仰あつてよろひの袖にすかるかとおほしめし。兩眼さめて御覽すれば〳〵御ゑいの〳〵袖に〳〵とり付申(フシ同)さては夢にてありけるや。あへなの今の。對面や。(下シヲム)とてりうていこかれ給ひけり(コトハ)去間牛若殿。慥御むさうのありつるものよとおぼしめし。本の座敷へおかへりあり。もえぎ匂ひの腹卷をくさずりながにざつくとめし。こむねむどうの腰の物一文字におさしあり。かうかいぬき出枕とさだめ。ひけ切の御はかせを腹の上にたふどをき。弓手の足をさしのへ。めての足をきつとたて。弓手の御目のまどろむまに。めての御眼か。天じやうをはつたとにらむで。とのゐをしてこそふされけれ。さてもあをのか原によりきするぬす人はたれ〳〵ぞ。まづ越後としなのゝさかひなる熊坂の長半親子六人ざす。善光寺の南大門のいばからひの右馬のぜう。こちやうのよむぢさい口の

七郎。はつたのぎやうぶかいつかみのわし次郎。窓をのぞくは空めくら。よひにぬつたるなまあぜを。あかつきはしるけら次郎。でむがくがくぼには。友をまよはすきつね三郎。同いたち次郎。ふじにばんどうじばむどう内。伊豆のお山のやけ下の小六。此人々をさきとして。大將は七十余人。其外つがふ小ぬす人。三百人には過ざりけり。あを野が原にうちより。大まく三重にうたせ。つゝ大瓶をかきすゑ。我等かたからをのまばこそ。吉次がかわごをのむなるに。のめやうたへや尤とてまふつうたふつさかもりする。かゝりける所に。熊坂の長半は東西のなりをしつとゝしづめ。面〳〵は何とさだむる子細によつてさやうに酒をば參ぞ。いで〳〵長半がぬすみしはしめしいわれを語てきかせむ。それかしが親にて候ものは。越後としなのゝさかひなる。くまさかといふ所にて唯佛のやうなるまとうどなり。それがしはいかなる佛神の御はからひにや。七歳の年おかのがふとい(ヲカ)所にて。おぢの馬をぬすみとつて。ならびいゝ田の市にてうつたるにちつとも子細が候はず。それよりもぬすみには。もとでもいらすよきあきなひとおもひさだめ。日本國をはしりまはつてぬすみをするに一度ふかくをとらず。かくてちやうはむ子を五人もつて候。太郎は畫かむだうが上手。次郎はしのびが上手。三郎は夜うちが上手。四郎は馬をよつくぬすみ候。五郎は人をかどへとつて。さどが嶋にてうつたるはちつとも子細かは候はず。きやつばらは一期すぎうずるのうをみむなもちて候が。七歳の年よりも一度ふかくをかゝぬちやうはむがこよひむねこそさはげ。あつはれ三百余人が中に。さいかくまはつてべんせつの明らかなる人やましますらむ。吉次がたちへ打こえ。内のけどをそつと見てやがてお戻候へ。人おゝき其中に。いつ〳〵御山のやげ下

の小六。何がし見てまいらんといふまゝに。かきのすゝかけしかまのときむ。まゆはつかにひつこふて。大はかの君の長の門くわひにたちよつて。大音あげてよばはる。色くまの山の山伏が佛法の修行の其爲に。おく松嶋へとをるなり。山伏は十人にあまつて候。今夜一夜のほいたうたへやつとよははつて。内のけごをしづかに見てぞとをりける。やゝあつて内よりもよねのたはらをなげいたす。小六きつと見て。やものゑの門出になわかゝつたる物よとおもひ。腰のかたなをひんぬいて。かけなははらりと切て捨。よねをすこし取て。あをのが原にはしりかへつて。中の座敷にとうどねて二のいきほつとつく。ちやうはむ是を見て。扨いかにやげ下殿。小六承て。さん候え物はいくらも候。八十四のかはごを切戸の脇につんだるはたゝ。たからの山のごとし。四十二疋のざうた。三疋ののり馬。いづれもみなよい馬にて候。四十余人のへうじのもの。弓やなぐいたちなきなたをおつとりそへ。用心するかほには見えて候へ共。例のだうつきをあつるならは。きやつばらは皆えんの下にかくれうず。馬もかはごもやす〳〵ととらふするが。爰に大事の事が候。長半聞て。今始てやげ下殿の大事とは何事ぞ。小六承て。かたらば聞しめされよ。いにしへはつれても下らぬ十四五なるしよくわんが候。此わつはがいしやうの躰をそつと見たる所は。色白くじむじむやうなるが。はだにはとむきんといふ物をきて候。きたるひたゝれは。日本の絹にては候はず。からきぬをもつて。地をば山ばといろに一はけさつとはいて。十八五しきの糸をもつて。物の上手がぬひ物をぬふて候。まづ弓手のひほつけには。いがきとりねしやだむをぬひ。めてのひほつけには。たけくらべに杉を三本ぬふて。源氏のうち神白はとが。十二のかひ子をかひそだて。は

ぶしと〳〵をくひちがへ。ぱつとたつてはさつとおり。舞あそふたる所をあり〳〵とぬふてさう。うしろのきくとちには北山殿さんざう。住吉のすひびん。おむろの御所のけいきを。あり〳〵とぬふてさう。扨又はかまのくたりには。しぐせいくわんをまなむで唐土のましも千疋。日本のましも千疋。唐土のましは。大國なればせいを大きう面を白くぬふてさう。日本の猿は小國なればせいをちいさう面をあかくぬふてさう。唐と日本の塩ざかひ。ちくらが沖といふ所にて。唐土のましは日本へこさんとす〵日本のましは唐土へこさんとす〵こさうこさじのがまのさうの所をばあふあり〳〵とぬふてさう。さて又はかまのけまはしに。岩にまつ鶴にかめ。いせきにかゝる川柳。おきのなみがどうとうつて。さつとひいてゆく。塩ざかひをぬふてさう。きたる腹巻は。けはもえぎおどしなり。よのつねの腹巻は。くさずりを八枚さぐるが此くさずりは。十二枚十二まいのくさずりに。白かねこかねをもつて。やくしの十二神をいが〳〵とあらはす。さいたる刀は。みなこがねつくり也。とつつけさやぐちに。くりから不動明王のあふ。瀧つぼへとむでおり。けむをのふたる所を。あり〳〵とほつてさう。面の目ぬきは不動の躰。うらの目ぬきは。鞍馬の大悲たもむの。御しむ躰をあらはす。さけをには法華經の七のまき。やくわうぼんのう。みながれくむで候ぞ。もつたるたちは。二尺六寸か。七寸かと覺たり。せつはもゝよせ。うむどうがかふとがね。誠のめぬき空めぬき。せめしば引石つきかはさきにいたるまても。上品のこがねをもつてひかめきたつて見えてさう。きたる烏帽子は。六原様の當世むきの。つふのちつとあらかなるを。一くせみくせませ。ひむながたにあひをあらせ。くしがたをいが〳〵と。ひとためためて。左へ

おつた烏帽子也。びんのかみはちゝんたり。まゆのけはかつたり。きのふかけふかの山出此わつはか。ありさまをものによく〳〵たとふれば。木ならばしたむ。鳥ならばほうわう。金ならはしやきむ。昔をとるならば。源氏の大將當世やうをとるならば。清盛。宗盛の御きむだちてましますが繼母の中ににくまれ。あづまときいて。吉次をたのふて奥へくたるとおほえたり。此わつはか目の内を。たゝ一め見てさうが。ゆたんする物ならば。三百七十余人の。やあぬす人のほそくひはたすかりがたくおぼえたり ちやうはむ聞て。 やげ下とのゝ物語はさらにきもさむせぬ事さふよ。そのわつはか何ともはやらははやれ。例のちやうはんがばうをもつてゆりひらいてたゝ一打のせうぶざうよ。夜は何時そやつの比。時分はよいぞはやうつたてや尤とて。てむてにたいまつとぼしつれ。大はかのきみのちやうの門外へのゝめきかゝつてをしよする。熊坂の太郎は。どうづきをおつとつてどう〳〵とあてた。みなもと聞召。あは夜たうよとおほしめし。わざと面のしとみを二三枚取て縁より下へなけおろし。よするぬす人を今やおそしと待給ふ。かゝりける所に。熊坂の大郎は。くろかはのとうまるき。かみをはつとみだし。長刀をひきづりて。たいまつをぱつとふりたて 人はないぞ。たゞ參れやあ參れや〳〵と下知をなす。みなもと御覽じて。きやつつはくせものかな。きらばやとおぼしめし。はしりかゝつて。いかつち切と名付て。ちやうときつて御覽すれば。むさんやな太郎は。あへなくくびをうちおとされてくひは内へころひければとうはそとへぞたをれたる。熊坂の四郎が。いそきはしりかへつて。いかになふちやうはん。太郎殿こそ手おふてましませ。ちやうはむ聞てやあ。いたてかうすてか。四郎承つていたでやらん

うすでやらんくびがうせてさうばこそ。ちやうはむ此よしきくよりも。無念の次第かな。そのわつはにてなみみせんといふまゝに。八尺五寸の。さてもばうをば。くぎながにおつ取のへ。源にわつたりあふ。源は御覽じ。ちやうはんがばう ば。一尺おひてつんと切。二尺おひてちやうときつて手もと計のこされたり。三百七十余人のぬす人。みなもとを。まむ中に取籠て。火水になれともふだりけり。源は御覽じ。玉になれたるほうらいの烏のふせいもかくやらん。驚けしきもましまさす大勢の中へわつて入。西からひかし。北からみなみくもてかくなは十文字。八はながたといふ物に。わりたておむまはして。さむ〳〵にきつてまはる。天はうづまひて。地わあけにそめかへ。龍が水をえ雲をわけ。こくうへあがるごとく也。未時もうつさぬまに。くつきやうのぬす人共を八十三騎きりふせたり。ちやうはむ此よし見るよりも。ぜひそれかし手なみみせんといふまゝに。六尺三寸の。扨もなぎなた。水車にまはひて。源にわたりあふ。みなもとは御覽じ。おゝくのかたきに渡合。ほねはおつたり。げにやちやうはむは。あらてのむしやなり。大長刀にて。たゝきたてられ。うけ太刀になつてきつ〳〵と引給ふ。ちやうはむ是を見て。あはよいそと心得すきまなくうつてかゝりけり。去間源。僧正がかけにて。ならひしさても。天ぐの法はでやう所とおぼしめし。霧の法をむすんでかたきのかたへなげかけこたかの法をむすんて。わがみにざつとうちかけ。ちやうと切て御覽すれば。むさんやな熊坂。まつかう。ふたつにうちわられあしたの露ときえにけり。それよりもみなもと。おくへ下らせ給ひて天下をおさめ給ひけり

山中常盤

（大頭左兵衛本）

去間牛若殿。十六のはるの比鞍馬の寺を御出あり。平家をせめむそのために。吉次が太刀をかづいて。奥へくだらせ給ひ。秀衡が舘に程なく付せ給ふ。ひてひらやかて對面申。まことにけむじの御大將と生れをなし給ひたる若君にて御座ありけると。なのめならすによろこふで。秀平父子の契約を申いつきかしつき奉る。さても都におはします母の常盤ごぜむは。うしわかどのをゆき方しらずうしなはせ給ひ。御なげきは中〳〵申計もなし。せめておもひの餘に。やわたへ御參あつて。一七日參籠あつて。若君の御いのりを申させ給ひ。其よりも清水にまいらせ給ひ南無や大慈大悲の觀世音ねがはくはわが子の牛若丸がゆくゑをしらせ。給へやときせいふかくそ申さるゝそれより紫野の御所へ御下向あつて。あかしくらさせ給ひける程に。八月なかばの事なるに。奥よりものぼりける。商人のたよりに。うし若殿の御文なりとてさゝけければ。近習の女房とりつきまいら上る。ときは開て御覽せらるゝに。何〳〵牛若こそ奥州へ罷下。何事も心に任せ候。明年の夏の比。かならずまかり上り御目にかゝり候べし。母御臺様へ牛若丸とぞかゝれける。ときは此よし御覽して。これ見給へや女房たち。我が子のあるとおもひなば。ちさとをゆくとも遠からす。いざ奥州に下なむめの

との侍從承つて。是より奥州へは雪ふかふして難所なれは。冬にむいてかなひ候まし。春にもなつてさふらはゞ。花見がてらにことよせて御下向あらば。みづからも御供せむといひけれは。常盤聞しめして。ともかくも侍從かはからひそとおほせあつて。百年をくらす心ちして。あかしくらさせ給ふ。すでに其年も打くれ。二月半の事なるに。いつまてかくてありあふべきいざ下らむとの給ひて。たびの出立をぞし給ひける。常盤御前の出立には。十二一重の御きぬのつまをとり。かちむのはゞきにあいかはのたひをめし。やつちの糸のわらんぢを。はきいちめがさにてかぼかくし。めのともいそげとの給ひて。さにたつてぞ出させ給ふ。めのとの侍從出立には。くちばの五重がさねに。やつちの糸のわらんちをはき。いちめ笠を手にかけ紫野の古御所を。夜を籠て御出あり。花の都を立出て。加茂川白川打わたり。人をたつぬる。門出には栗田口こそうれしけれ。四の宮川原袖の森。關の明神ふしおがみ。はやく大津に付給ふ。粟津まつもとうち過て。山田やはせのわたしぶね。漕行路は白浪や。石山寺をふしおがみ。瀬田のなか橋を。駒もとゝろと打過て。のちしの原の。宿過て。くもりかゝらぬかゝみ山。中のつち橋うちわたり。こすゐのふねを。ゑち川や小野の細道こかれきて。すりはり山にあがりつゝ。都の方をなかむれは。比叡山はかすかにて。遠かりしいふきのたけはちかくなる。ばむばときけは春風も。身にしみてふく。わか心。夢ちならねとさめがゐの。地水にうつる。かけ見れは。たれもおひせは八瀬の川。いま川原かしはばら。たけくらへを過けれは。をちこちの。たつぎもしらぬ。山中の宿にもはやく付給ふあらいたはしやときはごせむは。此間の旅のつかれに。風の心ちとの給ひて。やがて

うちふさせ給ふ。めのとの侍從見まいらせ。こはいかにしたてまつらんと。十二一重の御絹と。其外いろ〳〵の小袖をきせ申。四五日とうりうし。よきにいたはり奉る。かの山中の宿と申は。くつきやうのぬす人の住ゐする在所也。かれらが名こそおかしけれ。天火いなづまはたゝがみ。せめ口の六郎いまづの与大郎余川の十郎とて。くつきやうのぬす人の六人までこそ候ひけれ。かれら一所にあつまつていふやうは。此程はひまありぬ。

さかもりせむといふまゝに。遊君どもをするゐならべ。うつたりまふたりかうじやうに。うへなき者のあそひとてあふどめいて酒をぞのふたりける。かゝりける所に。せめぐちの六郎が。宿をまはつてかへりしか。いかにめむ〳〵聞給へ。此宿のはづれに。京くだりとおぼしくて。さもいつくしき上らふの。お宿をめされてましますが。色々の小袖に。風をひかせおひてあり。いさをしよせでとらんといふ。夜たうの者のふたうさは。尤とどうじて。夜半ばかりの事なるに。常盤のおやとへをしよせ。中のでいへ亂れいり。十二ひとえの御絹と。めのとの侍從か小袖まで。こと〳〵くうはひとる。ときは此よし御覽して。御聲をあげ給ひ。情なや。ものゝふも物のあはれはしるそかし。何にてはたえをかくすへきそ。小袖をひとつえさせよと。さも高聲にの給へは。せめ口の六郎が。此よしを聞よりも。にくき女の高こゑやと。たちかへり刀をぬき。いたはしやときはごせ。雪のはたえをさしとをす。めのとのぢうもかなしやな。たすけ給へといたきつく。なむぢもともにゆけやとて。ふたかたなさいて。をしふせてゆくゐもしらす成にけり。あらいたはしやときはこせむ。かすかなる御聲をあげ。旅の者の成ゆくはてを。見てたひ給へ人々よ。宿の太夫このよし承はつて。あはや夜たうか

入たるそとこゝろへ。たいまつにひをたて。中のていを見てあれば。あらいたはしや二人の人々は。あけにそみておはします。よく〳〵見たてまつれば。一人はことおはりぬ。今一人しゆ人とおぼしきは。いまたおはらせ給はねは。いそきだきおこしたてまつり。さもあれ御みはいかなる人にてましませば。御供人の一人もめしぐせられず。此宿まて御出あつて。われらにうき目を見せ給ふぞ。さて御名はなきかとたつね申せは。あらいたはしやときはごぜむ。さゝがにのいとより細き御聲をあげ。今は何をかつゝむへき。大和けむしの大將に。宇田のとうしがむすめ。ときはとはみつから也。義朝にちぎりをこめ。三人の若をまふけてさふらふそや。三男にあたりたる牛若丸。十六の春の比行衛もしらすうしなひしが。奥州にあるときく。餘の事のゆかしさに。これなるめのとを友として。此宿まで下りしが。戀しき子にはあひもせて。むなしくならんかなしさよ。いかに太夫たのむなり。黒木のじゆとひむのかみ。はだのまほりをとりそろへ。太夫にこれをあつけをく。もし牛若かゆかりとて。たつぬるものゝあるならは。かたみにこれを見せてたへ。さてみつからがしがいをは。みちの邊にとさうに。つきしるしを植てたび給へ。それをいかにと申に。戀しきわが子の牛若か。都へのぼる事あらば。くさのかけにて見むずるなり。子をかなしめるやけのゝきゝすも子ゆへにみをはこかすらむ。うつはりのつはめも子ゆへ小虵の餌とはなる。そのことくみつからも。子ゆへむなしくなるなれは。恨とさらにおもはすやきうせむにかゝるみつからをたすけ給へやかみ佛。南無阿彌陀佛と最後にて。御年つもり四十三朝の露ときえ給ふ。見る人聞もの。をしなへてあはれをとはぬ人そなき。太夫此よし見まいらせ。今はなげきてもか

いのあらばこそ。御ゆいごむにまかせ。道の邊にとさうにつきこめ奉り是は無縁の旅の人の卒都婆也。上下の人々念佛廻向あれと札を書てぞたてにける。さても奥にまします。牛若殿此程は母の姿かぬれは夢に見え。おくればみにそふ心ちして。さもものあはれに見えさせ給ふ。心元なくおぼしめし。秀平に日かすの暇をこひ給ふ。秀平承つて御上洛ましまさば。御供人を申付むと申す。牛若殿は聞しめし。これはおもひもよらす。しのびて上洛の事なれば。只一人と仰あつて秀平か舘を出させ給ひ。いそかせ給ひける程に。みのゝ國に聞えたるあかさかの宿に程なくつかせ給ふ。かの赤坂の宿より山中の宿へはそのあひ三里をへたてたり（サシ色）たゞ一夜をへたてつゝ。母（下）に對面なき事は無念しこくの次第也（コトハ）已に其夜も明ければ。赤坂の宿を御たちあり。山中の宿につかせ給ふ。みちの邊を見給へは。新しき卒都婆あり。立寄御覽ありけれは是は無縁の旅の人の卒都婆也。上下の人々は念佛ゑかうあれと札を書てそたてにける。牛若殿は御覽して人の上ともおもはねば。とふらはばやとおぼしめし。五のまきのたいば品たからかにそあそはしける。（中クリ）此御經のくりきによつて。（上クル）一切の衆生こと〳〵く。無常菩提とゑかうあり（ここ下シ）何とやらん若君の。塚の邊の哀さに。落るなみたに目かくれて。文字のならひも見もわかす。たといいかなる人なりとも。此御經のくりきにより。九品の上品上生へ。むかへとらせ給へやと。つかの前（上）にて牛若殿。とかくの時刻。まし〳〵て其日も。すてにくれにけり。（下クトキ）あらいたはしや牛若殿。門なみこそおほきに。ゆふべときはのうたれさせ給ひたる。一つ所に御とまりある（下フシ）前世の氣縁。くちもせぬ親子のちきり哀也（コトハ）あらいたはしやときはごせむ。こむはめいとにおもむけば。はくは憂世に留

つてめのとの侍從共として。牛若子の枕神にたち寄せ給ひ。いかに牛若めつらしや。はる〳〵とおもひ立。此宿まで上るもの哉。自も餘に汝がゆかしさに。これなるめのとを供として。此宿まで下りしが。夕（下）夜たう共が手にかゝり。むなしくなりてさふらふぞ。自がけうやうには。いかにもしてかの夜たう共を討てたへ（下クトキ）道の煩なかりせは。いかなるくどくにも勝なむ。けさ汝びよう所へ（フシ）來りし時。むくらならはひし（入）〳〵と。取付はやとはおもひしかわうし（上）やうの雲にへたてられ。親のすかた子のゆくゑをもたがいにしらざるかなしさに。くろきのしゆすとひむのかみ。はだのまほりをとりそろへ。宿の太夫にあつけをく。かたみにとりて御覽せよ。たれを見むとて牛若は。はる〳〵都へ上るそや。おきよ〳〵との給へは。牛若夢ともわきまへす。かつはとおきてはゝ上に。すかりつかむとし給へは。まほろしの。其まゝに夢は。やふれて（入）さめにけり（コトハ）あらいたはしや牛若殿かつはとおきさせ給ひ。はうせむとあきれて御坐ありしが。宿の太夫をめされ事の様を御尋有ければ。太夫承つてさん候此四五日が先程に。京下とおぼしくてさもいつくしき上らふの。お宿をめされてましますが。なむぼう哀成事の御座候。夜たう共が打入て御小袖をうはひ取。剩其身をもたちまちがいし申て候。我等ふうふいそき參事の様を見申て候へは。あらいたはしや二人の人々あけにそみてぞおはします。よく〳〵見たてまつれば。一人はことときれぬ。今一人しゆ人とおぼしきはいまたおはらせ給はねば。いそぎだきおこし奉り。扨も上らふはいかなる人にてましませば。此宿まて御下向あつて。我等に憂目を見せ給ふぞ。さて御名はなきかと尋申せば。あらいたはしやいきの下よりも。われはときはといふもの也　義朝にちきりをこめ。三人

の若をまふげてさふらふが。三男に當たる牛若丸十六の春の比。行衛もしらずうしなひしが。奥州に有ときく。餘の事の床しさに。これなるめのとを供として。此宿まて下りしが。戀しき子にはあひもせて。むなしくならんかなしさよ。黒木のじゆずとびむのかみ。はたの守りを取そろへ。太夫にこれを預をく。もしも牛若がゆかりとて　尋る者のあるならば。形見にこれを參らせよとの。御ゆいこむにて其まゝむなしく成給ひて候。なむぼうふびむなる事にては御座候はぬか。牛若殿は聞召。とかく御返事もなく御涙をながし。やかてうつふしにふさせ給ふ。太夫此よし見まいらせ御なげきの色。よそ人ならすに見申て御坐候。もし牛若殿ゆかりにても御座候はゝ。御名乘候へとて。數の形見をとりいたし。これ〳〵御覽候へとて。牛若殿に參らせ上る。牛若殿は御覽して。これは夢かやうつゝかや（中クトキ）今は何をかつゝむべき。是こそ牛若丸にて候へ。かみとまほりはしらねとも。黒木のしゆすは母上の朝夕もたせ給ひたる御しゆすなり。これ偽とおもはねば（下フシ）むねにあて。かほにあてりうていこかれ給ひけり（下クトキ）やゝ有て牛若殿。おつる涙をゝし留め。あらいたはしや母みだいさま。紫野に御座有し時。奥州へ下るべきよし申ければ。ときは聞しめされて。なにと申そ牛若丸。（下）けむぢよの法をそむき。敵のつまになひく事も。たゝなむぢらかある故也（ニフシ）まことと其儀にあるならば。我をもつれて下れやとて。様〳〵にとゝめ給ひしを。さらぬやうに申なし。紫野をたち出しが。おもへばそれが最後なり。けふよりして。母上とも。たれをかおかみ申へき。父義朝の御事は。二歳の年はなるれば。夢ともさらにわきまへす。今までか様にある事も。たゞ母上の御恩そかし。さては。牛若は親にふけうのものやとて。りうていこかれなき給へ

は。あるしふうふもなきにけり。牛若殿の御泪を。物によく〳〵たとふれは。しやうやうきうか春雨のふるやの軒の。玉水もかくやとおもひしられたり（コトハ）其後牛若殿宿の太夫をめされ。なげきてもかいのあらばこそ。いかにもしてかの夜たうともをたはかりよせうたはやとおもふは。さていかゝせんと仰けれは。太夫承つて。こは御諚ともおほえず候。かの夜たうと申は。一人ならす二人ならす。くつきやうのぬす人の。六人まてこそ候ひけれ。君はたゝ一人いかてかなはせ給ふへき（ッ）時節を御待候へ。わかきみとそ申ける。女房が是をきゝ。おろかなり太夫殿。上臈さまの御ために。何にいのちのをしかるへき。みづからたのまれ申へし御心（ヤ）やすくおほしめせなふ旅の殿とそ申ける。牛若なのめにおぼしめし。さらば座敷をかさるべし。承と申て。からふとかはごを取いたし。中のていをぞかさりける。其後に牛若殿。けむもむしやのひたゝれめし。宿をまはらせ給ひ。いかにや宿の面〳〵。奥大名の御つきあるがお宿をしらいてたづぬる也。をしへてたへとそ仰ける。其後に牛若殿。中間のまなひをし。御はかせひつさけ。宿をまはらせ給ひて。いかにや宿の面〳〵。奥大名の御付あるが。お宿はいづくて候と。ふれてとをらせ給ひけり。其後に牛若殿。がうりきのまなひをし。みのかさにて御みをまとひ。宿をまはらせ給ひて。いかにや宿の面〳〵。奥大名の御付あるが。馬のぬかはらかはむといひ。親のかたきをうたむため。様〳〵にみをへんし山中の宿をはふれてとをらせ給ひけり（コトハ）其後かの夜たうども一つ所にあつて申けるは。タ卩の宿にこそ奥大名のつかせ給ふとおほしくて。からふとかはごを取いたし。中（マヽ）にでいにつむだるはたゞ寶の山のごとし。いさやをしよせてとらんといふ。夜たうのものゝふたうさは尤とど

うして。夜半計の事なるに物の具ひし〳〵とかため。たいまつに火をたて。太夫か宿へをしよせ。おもての門をうちやぶり。中のていに亂入。かしこを見るに人一人もなかりけり。あたりを見れば。わつは一人ぬしてあり。いかにやこれなるわつは。汝がしうはいつくにふして有ぞ。たからはいづくにつむだるぞ。ありのまゝに申せつゝむ風情の有ならば。やかて切て捨んといふ。牛若殿は聞しめしなふそれまでも候はず。われらがしうとのはむかひの宿にふさせ給ひて候。たからはおくの間につませて候と。六人のぬす人共をおくのまへをしへやりいづくにかもたせ給ひけむ。御はかせひむぬいて。せめ口の六郎が。ひさの口をづむときり。のつけにかへす所を。ほそくび中にうちおとしあふ朝の露とそきえにける。のこる五人のぬす人ども。此よしを見るよりも。牛若殿をとりこめ。ひみづになれとぞもふたりける。牛若殿は御覽じて　このむ所とおぼしめし。おとりあかりとひしさり。ちやう〳〵と切て御覽ずれは。三人の盗人どもは六つになりてぞころびける。のこる二人の盗人。此よしを見るよりも。かなはしとやおもひけむ。中のでいへにけけるを。牛若つゝいておつかけ。夕ㄗ此所にてぞむぐわをふるまふなり。よく〳〵おもひしらせんと。おつつめ〳〵きり給へば。六人のぬす人どもを。ひとつ所にきりとめ給ふ牛若殿のうれしさを。なにゝたとへむかたもなし。宿の太夫も物の具し。長刀持てそ參ける。牛若殿は御覽して。おもふかたきはきりとめたるぞしかいをかくせと仰けり。承と申て。夜の間に淵へぞしづめける。其時は御ざうし。十八の事なり。廿一と申に。十万余騎をそつし。打てのほらせ給ひしに。みのゝ國にきこえたる。山中の宿につき。ときはのびよう所へ參り。けうやうまし〳〵て。宿の太夫をめし出

し。山中。三百町を。太　にこそはたひにけれ。たゞ人は情あれ。は人のためならず。終にはそのみのとゝなる是につけても女房の情ゆへとぞ聞えける。其後御ざうし。打てのほらせ給ひて天下をおさめ給ひけり

靡常盤

（平瀨氏本）

爰に物のあはれを尋ぬるにときはの母にてとゝめたりそれをいかにと申に六波羅かたの兵ときは御前をたつねかね九條の院におはします母のにこうを生捕て六波羅へ參らする清盛御覽して親子の中の事なれは知らてはいかゝ有へきとなんはせのをに仰付七十余度のかうもんは目もあてられぬ次第也せのをなんはにいふやうは心よはくて叶ましおとして申てとはんとて一所をかまへたゝらをたてあかゝねをわかしみやう火さかりにもゆる時いかにこう御覽せよあのとうゑんにあて申さんはやく〳〵ときはの行かたをおかたりあれと申〳〵にこう御らんして見るにたにも身の毛たつましてほのほに身をよせはしようねつ地獄のくるしみも是にはいかてまさるへき〳〵よしそれとてもちからなし迚もいきかい有ましやしぬへき物と思ひきり更に物をものたまはす〳〵せのをちからにをよはすいかになんは大事のめしうとをせめころしては叶ましいと清盛にかくと申すきよもり聞召いて〳〵すかしてとはんとて大口ひやくゑの出立にてにこうのあたりに立よらせ給ひいかにこう聞給へ平家の運をひらくる事出る日つほむ花なれや源家を物にたとうれは入日のことしいかにこうのあはれみて子共をかくし給ふ共つゐにはもれてきこゆへしにこうのをしへて取ならはにこうにもときはにもほうけよをあたへは

こくむへしはや〳〵ときはの行かたをおかたりあれと有しかはにかうきこしめしめつらしの御言葉や道理をわけてその給ふらん身つからか耳にはみなひか事のみ聞えさふらうそれをいかにと申にときわは生年廿八孫いま若は七ッつき乙若は五ッすゑの牛若は二歳也かれらか年を合すれとにこうか年のなかはなり身つからいく程いきんとてさかりのそんしをうしなふへき其上源家はこかねにたとへていとに朽ははてし也ときわか子共も三人いつれも男子にてさふらへはかれらか中に一人運をひらかぬ事あらし其上頼朝は天下の御めにかゝり　源氏のしやうのさうありと　くん王も宣旨有し也てんもんはかせ六こくしんもんせんのかみもふたを打かねて源氏の大將と天下に此沙汰かくれなしもしさもあらはすゑの世にのこりいたらん平しともうきめにあはむ事あらしまして源家のすゑの代を切からさんとおほす共いすゝ川のすゑつきす八幡山の月影の光りをやとする事なれはいかてやみにはまようへきみやうりよちけんにまかする上しなん事をはなけくましはやとく〳〵と仰けり

「此間のかうもんは物の數にてかすならす誠や聞はかうもんは眼をぬき足手を切血をしほりてせむるときくなとそれていにせめ給はぬ事おほしといへとも清盛の末の世に有へき事を今みるそ此合戰と申は大悪けきのの ふよりか朝敵となつてほろひしやそれも天下をかろくして世をさかさまにせしゆへ也是にもみこり給はすあまこそいやしくと宣旨なりとて免さるれは君朝敵の尼たるへくさあらん時は清盛も禮儀をたゝ敷すへき身か大口ひやくゑの對面はうへなき人の振舞かや世をしらんとおほさはこはきをやはらけよはきをなてきをおもくすへきなり君〳〵たれはしん〳〵たり御身の今のふる舞はまさかとの其かみすみとものらふせき拠さたたうかとう

あく今のふよりかけきらんもこれにはいかてまさるへき今たにもかくありまして平家一へ舞の御代ともなる物ならは君の位をうはい取て天下はやみと成へき也さあらん時に清盛も必ほろひはつへきなり末の代にこのあまか申すてし事のはを思ひ出し給ふへしいけて物をいはせんよりもとくせめころせとおゝせけり　清盛聞召案に相違のいひ事なれはせめころしては叶まし先なんちらにあつくるとの御諚也聞とき御前は是をは夢にもしろしめさす大和の國宇多のこほりきしの上の加藤次兵衛か宿所に數日とをぐらせ給ふ有時商人來たつて都の事を語りけりときわ物こしにて聞召都には何事かあると問給へはあき人承さん候都はめてたく候かこゝにあはれなる事の候義朝の御臺所雲の上のときわ御せんといふ人きんたちあまた引具し行かた知らすうせ給ふを六波羅方の兵ときわ御前を尋かね九条の院におはします母のにこうを生捕て六波羅殿へ參らする清盛おほせけるは親子の中の事なれはしらてはいかゝ有へきとなんはせのをに仰付様〳〵のかうもんはめもあてられぬ次第也

「子をおもふ道にはかゝるやみにもまよふとかたり捨てそとをりけるときは聞召こはいかに浅ましやわか子を思ふことくにさこそにこうも身つからを不便とおほしめさるらん　子をはまふけて又みれと親を二度みる事なし今は力にをよはれす三人の若子共を母うへの御命に取かへはやとおほしめし人にとうへき事ならねは我身一ッにおもひかへ八幡まふてと事よせて出させ給ひけるとかや　加藤次申けるはゆかんもいまた打とけす彌生の比になるならは花みかてらのまふてには御なくさみもおほかるへしとをしとゝめ申ときは聞召子共のための願なれは今參らてはかなはしと仰けれは加藤次ちからにをよはすと若達をは下男にいたかせ　よはにま

きれて出給ふ　〃西をはるかになかむれは雲をおひたるたかま山すゑは葛城雪白く花かとのみそうたかはる初瀬の寺の鐘の聲おのへにひゝく朝ほらけ三輪の山本すきかてにふるの中道在原や寺ゐの跡もなにしおふむかしおとこそ忍はるゝ　〃奈良の都をみわたせは堂塔軒をならへたり興福寺と申は大織冠の御願所こうはく女と申は異國の王の后となり御父の大織冠大からんをたてさせ給ふとつたへきこしめされて三國一の重寶五寸の釋迦のれい像をすいしやうの塔に入數のたからをそろへつゝをくらせ給ひけるとかや　〃すみかは他生なれとも〃親子の思ひ浅からす　〃心さしは　〃一ッにて　〃遠きも近き心なりされはくしのことはにもけをへたつるといへとも心かよふを憐といふ我も都におはします母上の御命に三人の若共をかへむとおもふ心さし七堂のほとけ達不便と思召るらん　〃七堂と申は興福寺のうちにありみなとり〳〵の御願しよありかたさよとふしおかみ行は程なく木津川やはるかにみれは八幡山いかてか八幡の捨ははてさせ給はしなみのをちかたやましはは宇治にこそまよひけれ　〃めくり來てみれは水車なかれはたえぬうたかたの槇の嶋こそうかりけれ　〃さんぬる正月十八日の雪の日をまよひくらして伏見山またきさらきの十八日にめくりきぬ清水へまふてたく思へとも心にまかせぬ事なれは余所なからふしおかみ九条の院にまいらせ給へは數の女官立出ときわを中に取こめて行かたしらすと聞しほとにさりともとこそ思ひしに雉のかくれのことくにてあらはれ出たるかなしさよ人目にめれぬ其さきにとくしのへとそ仰ける　〃ときわきこしめし忍ふへき身にてさふらはは何しに是まて參るへき母上の御命にかはらんため三人の若を引具し參りてさふらふと申されけれは　〃女院きこしめし親かう〳〵の心

さし世にはあらしと思へ共すゑも久しき事ならすやよく〳〵思ひさためよと　〃再三御諚くたりけりときわ此由承り仰はかたしけなけれとも君と親をくらふれはきみに命はすてやすし親と子をあわすれはいかてかおやをおろかにせん神明よりもかたしけなく佛躰よりもたつときは君と親にておはします思ひきりぬる事也と重而そうし申さるゝ　〃女院聞召君と親とのために命をすてんと申こそあまり思へは不便なれ　〃それ〳〵しやうそく出たゝせよ　〃承と申て十二一えにくれなゐのちしほの袴給りけり今若は七ッなり紫すりのひとかさね精好の大口すゝしのひとえ直垂きせめのとを一人つけ給ふをと若は五ッ也しらぬりぬきのはたつけにけんもんしやのひたゝれきせめのとを五人付られたり牛若は二歳也ねりぬきに紅梅かさねひきまはしの帶はかりめのとを三人付給ふときわに官を給りけり大納言のすけの局ににんせらるる最期の乘物也とて八ようのくるまを給りけりいく程のるへきならね共はいしんか錦のこゝちしてうれしさたくひなかりけり彼ときわと申はきうわ六年近衛の院の御とき美女そろへの有し時こき七たうへ勅使をたてみめよき女を千人すくり千人の中より百人すくり百人の中より十人すくり十人の中より三人すくつて中にもみさめなきとてときはとかれをなつけたり官中につかへしを常は院の御心かよはしおほしめさるれとおほろけの人にもまみえぬる事さらになしされは彼義朝は雲の上のときわを風のたよりにつたへきゝいもせは人をゑらはねとうき戀路にそまよいにきすてに彼義朝は天下にきこうる忠しんを繼ゆへ身をいたつらになしなん事の無さんさよ更はときわをとらせよと事にのせて給はりぬむさんやなときわは雲の上のをきふしれうかんにしたしみこうひのやうに有し身をくたされてはいしんにま

みえん事のかなしさに身はいたつらになさるゝとあたなはたゝしものうやとうらみなからも義朝の屋形にうつりけるとかやかくてとし月をふる程に忘れ形見をまふけをきかゝるうきめをみる事よと女院はるかにをもかけを御らんしをくり給へは數の女くはん立出てたおれふしてなき給ふ事のうちのなけきをみれは中〳〵物うきにはややれとこそおほせけれ牛飼車をとゝろかし　六波羅へすくにやり入る門のけいこ是をみてけうみやうなくは御車をえこそは通すましけれとをしとゝめ申さのみはいかてつゝむへきときわのくるまといひけれはいまた子細もいはせすして三人の若共を一人つゝいたきとつてこむせんさしてそ參ける　清盛御らんしてされはいつく嶋の利生のはやさよたすけをきてかなふましい急き是より次第に容すへしはやとく〳〵との御諚也いたはしやときはこせん母のそせうを申さんとせのをに付て仰けり　けにや親子おんあいはわりなきなかといひなからすゑも久しき若ともを老たるにこうにかへんと思ふ心さしたくいあらしと思ひつゝ　心のあるもあらさるも袖をしほらぬ人はなく清盛このよし聞召けに〳〵さこそおほすらんとといそんしたるにこうをたき出して渡しけりときわは母にいたきつきかの若共を一まつとおもふ心にまきれつゝ母こを跡に捨申かゝるうきめをみせ申も身つからゆへの事なれはめんぼくなさはかきりなくにこう此よし聞召出る日よりも頼みある若共をうしなひてこのとしよりをたすけんとやうれしく更にあらすやとたおれふしてそなき給ふときは聞召されて仰はさにてさふらへといかに子共をあはれみても前世の果報つたなくは世をしる事も有ましや今こそかやうにうんつきはてかたきの手にわたる共親に孝ある德によ〻來世にては必一ッ蓮に生るへし何よりも母上をみ奉つるうれ

しやとよそめもおほしめされすゝ聲をあけてそなき給ふ　清盛ときはのなけきを物こしよりきこしめしたとひなけきはとにもあれときはきこふるひしんときく我世にあるしるしにひとめみはやと思召玉章をねんころにしたゝめときわのなけきふし給ふかたはらへをくらせ給ふときわきこしめしつまのかたき子共のてき名を聞たにもうらめしやと更にみ入給はす御使かへり清盛にかくと申清盛きこしめし返事のあらんほとかゝむとて其日のうちに御文のかす廿三つうとそきこへけるときわ御覽してみくるしき事かなといち〳〵に引さきゑんよりしもへすて給ふ御使かへり有のまゝに申　きよもり聞召　あめか下の其内に某か消息をさかんものは。おほえね母には科はなけれともときわか心のにくけれはいかにもあらくかうもんせよ三人の若共も兄より次第に容すへしをそし〳〵とのたまひてあらうみのしやうしを立てはあけあけてはたてれいの長刀ひきつつてしんの板をとう〳〵とつきならし給へはきんしゆとさまの人々は一度にさしきをはらりとたつて方々へにけんとす清盛このよし御らんしてしつまれかた〳〵ふ覺なりあふ一たんはかりのをとしてあり　もりくにこうへ參て申さるゝかやうに御文のしけき事も若君様の御氏神の御はからひとこそ存候へ御返事の御座あらはわかきみ様もめてたくわたらせ給ふへし御けうくむあれと申さるゝにこうけにもとおほしめしときわのまへにひれふしわかれしつまのためならはそんしをそたてをきてこそ草のかけなるはうれいも嬉しくおほしめさるへけれ其上御身一人にかきらす昔もさるためしあり異國のかんのしやう王と御てう王と數度のたゝかひ有しときしやう王かけまけ給ひくわんくむみなちりうせ后の宮も王子達も御れいさんにこもらせ給ふ彼しやう王の后の宮ようかんひれ

いにおはしますてう王叡覧あつてきさきの宮にいはゝむとの勅諚なりきさき聞召れてくんしの法にもれしとて
更になひかせ給はねはてう王いからせ給ひ王子五人をいけとつてすてに死さいにをよひし時王子たちをたすけ
んためなひかせ給ふと承るそれのみならすならの葉のすゑはの露をなかめしにさいこ中將にはよゝの后もなひ
かせ給ひしとなり　石と成しはまうふせきかゝみをわりしとくけんもおもはぬ中のちきりなりたゝ清盛にな
ひき給へ御身か名はくたす共すゑも久しき事ならすや　さらすは御身もみつからも扨三人の若共もさいこの
きわめ今てありいかに〳〵とのたまひてなみたもあせももろ共に床もうかふとおほえたり　ときわきこしめ
し母の仰のわりなさに兎角物をものたまはす思ひ入てそおはしけるにこう御覧してすこしくつろく色かとてそ
はよりも返事をしたまひけり御使の見給ふことく身つからか返事也百夜のしゝのはしかきも數かさなれはなと
ゝ申こと人のさふらふそやより〳〵異見を申へしと仰けれはもり國急きかへり清盛にかくと申其時きよもり氣
色をかへ御座になをらせ給ふさる間ときわの御返事あり清盛御らんして筆のたてとふんしやう書なかしたるに
ほひすみあらおそろしや主たにもいまた見ぬさきに文にて人をころすやと打もをくへきこゝちもなくまいつひ
らいつみ給へは奥に咲山のことはありいもか契りはさためなや後の世懸て契れとも一重にかはる縁もありいね
かりそめと思へ共なからへはつる縁もありすゑもとをらぬ池水のあた名は余所にたつか弓引かへしてもいられ
はこそかゝる時のみのうさも心つくしをいかにせん人目もまみへさふらはゝ三人の若共を實子に御なし有へき
とのちかひの證文たゝ敷はともかくもとそかゝれける清盛御らんしてこはいかにせんと案しわつらはせ給ひし

か蜘蛛のいにあれたる駒はつなく共れんほの中のむすひめはつなきもはてぬならひなりたとへは三人の若を實
子になしてあれはとてなんの子細の有へきと　かたしけなくもいつく嶋の　大明神をしよけんとして三人
の若達に敵をなさしとちかひつゝときはのかたへをくらるゝときはこの由御覧して清盛はさありとも或は孫子
一そくの御世ともなる物ならはさためて相違有へしとおほしめされける間八人のきんたち卅人の御一門十人の
侍大將の起請文なくてはあたなはいかてたちなんと重而おほせ出されけり清盛聞召か程まてきしやう書扨のみ
やまん無念さよと御一門の人々に起請かけとのふれ狀はあふけに淺間敷次第也しけもりきこしめしけにけいせ
いと書てはみやこかたむくとよまれしも今こそ思ひしられたれと仰せなから書給ふ御一門の人々も思ひ〳〵に
起請書心〳〵の判をすへときわの方へをくらるゝ其後ときわは清盛になひき給ひけりにこうは大方殿ときわは
北の政所いねうかつかう中〳〵申はかりもなかりけり扨こそ壽永の秋のころ平家都をおとされほろひはて給ひ
しも起請ゆへとそ聞えけるかのときわの心中をは貴賤上下をしなへかんせぬ人はなかりけり

上山与兵衛尉
宗久(印)

文祿貳年七月十四日

腰越

（毛利家本）

去間判官殿。おこる平家を三年三月に亡し。三種の神器ことゆへなく。二度帝都に納めまふし。剰へ平家の大將大臣殿父子生捕。天下の御目に懸奉り。御身は六條堀川に新造をつくらせ。かくて爰にすみ給ひ。御門を守護し給ふ。彼義經を見聞人。あつはれ弓箭の大將やと。ほめぬ人こそなかりけれ。有時義經參内有て奏し申されけるやうは。彼大臣殿と申は。平家にとつても大將にて候へは。都にてうしなはるべうもや候へき又くわんとうの賴朝に。一目御見せもや候へき。かやうに申候へは。憚多候へとも。一つには御朝敵。又は我等か家のかたきにて候らへは。恐なから賴朝に。下し給り候はゝ。家の面目たるへき由奏しまふされたりけれは。御門叡聞ましく〳〵て。けに〳〵申も理なり。さらは守護して下るへし。承るとまふして。大臣殿父子をは籠輿にのせ奉り。手勢そろへて二百余騎。都のうちの神々にも。さま〳〵の御いとまこひをまふし。殊更八幡の御神は。當家弓箭の守護神にて。めてたき神にてましますと。八幡のお山を伏拜み。五月七日の曉。あはたくちをもうち過て　色大内山を雲井のよそになかめこし。せきのしみつにつき給ひ。大臣殿おもひつゝけてかくはかり。都をは。けふをかぎりのせきみつに。またあふさかのかけやうつさん　詞　かやうにくちすさみ給ひ。さしていそか

ぬみちなれと。駒もうちでのしゆくにつく。是や天智天皇の。大和國おかもとの京よりも。此所に遷り。宮作し給ひし其舊跡をふしおかみ。勢多のからはしうちわたり。のぢしのはらのしゆく過て。くもりかゝらぬ鏡山。昔年ならの叟が　色鏡山いさたちよりてみてゆかむ。としへぬるみはおいやしぬると　老をいとひてよみたりし　色そのいにしへの　言葉　入まておもひ出しつゝあはれなり。ゑち川わたれは千鳥なく。をのゝほそみちすりはり山。はんはさめか井柏原。をちこちのたつきもしらぬやまなかに。不破の關屋のいたひさし。月もれとてやまはらなる。たる井の宿をうち過て。はやく熟田につき給ふ。彼明神とまふすは。かけまくもかたしけなや。天照大神のそのひとつにておはします。をはり第三の。宮とはまふしなからも。をよそは日本第三の。御神にてましますと。其時こそ大臣殿判官にかたり給ひけれ。なにとなるみと聞からに。磯邊の波に袖ぬらし。三川の國に入ぬれは。八はしにさしかゝり。橋の風情をみ給ふに。砂にねむる鴛鴦は。なつをしらてさり。みつにたてる杜若は。ときをむかへてひらけゝり。花はむかしをわすれすしておなし色にそさきにけるはしも昔のなゝれとも幾度か渡しかへつらん。すゑをいつくととをたうみ。はまなのはしを見給ふに。南には海上。漫々としてきはもなし。北にはまた湖水あり。しんか岸につらなつて。松吹風なみのをと。いつれも法のたくひそと。うちなかめくたるほとにおほ井河にもはやつきぬ。大臣殿御覽して。我世か代にて有し時龜山の御幸の御とも。紅葉みたれてなかれ出し。清瀧川や大井河おもひ出しつゝしのはしや。うきしまかはらよりも。ふしのたかねを見あくれは。時しらぬ雪の色かのこまたらにふりなして。麓には東西へなかく見えたるぬまの

あり。あしわけふねに。さほさしてむれゐる鷗のこゝろのまゝに。かなたこなたへ飛さるを。うら山しくやおもはれけん。大臣殿父子共におもひつゝけてかくはかり色クルしほちより。たえすおもひをするかなる。みはうきしまになをはふしのね　御子うへもんのかみも　我なれやおもひにもゆるふしのねの。むなしきそらの煙はかりは　はらにはしほ屋のけふりへん〳〵とし。風にまかせてゆくゑもしらすまよへり。伊豆の三しまにつき給ふ。彼明神とまふすは。昔能因か。苗代水とよみたりし。哥のみちをなうしうし炎旱の天より雨下り。かれたるいなはも忽に。みとりの色と成たりし。めてたき神にてましませはたのもしくおもひまふすなり。來世にてはかならす。九品の蓮臺にむかへとらせ給へやと。祈誓をまふさせ給ひつゝ。さかみの國に入ぬれは。義經の爲に喜をきくかはのしゆくと。うちなかめすゑはさかはの宿につく判官むさしをめされ。案内をもまふさてかまくらいり。不禮のゐたりと存るなり。飛脚をたてゝ鎌倉へ。案内を申へし。此儀尤しかるへう候とて。伊勢の三郎義盛をもつて。鎌倉へあんないをまふされたり。頼朝聞しめされて。さては義經かさかはまて。くたりけるかやめてたさよ。此鎌倉とまふすは。新造の所にて。見參所みくるしゝ。見參所をつくらせよ。わかいの津よりも。材木をあけさせよ。かちはんしやうを揃へつゝ急け〳〵と仰けり。かちはらうけたまはり。おつとこたへておまへをたつて心のうちにおもふやう。あさましや此君。在鎌倉ましまさは。まつりことしきてう。たゝしきたみのむねまても。みな此君の御はからひとなるへしさあらん時に梶原か。逆櫓のいこんのこりて。我々父子ひきいたされ。ゆいのはまにてきられん事はうたかひさらに有ましひ。其儀にて有ならは。此

君の御うはさを。あしさまにまふしなし。まつおつかへし奉り。時々讒奏仕り。此君うしなひまいらせて。うきよのなかに樂〳〵と。すまはやなんとおもひけれは。あんしすましてかちはらはまた君のおまへにまいりけり詞如何に我君聞しめせ。東國には君かくて御座有。都には。義經の守護とまし〳〵てこそ。御代はおさまり目出度候へきに。一圓に關東に御座有ては。天下をたれか守護まふさむ。頼朝聞召れて。けに〳〵これはいはれたり。其儀にて有ならは。大臣殿父子をは鎌倉へうつし。義經をは都へのほせよ。かちはらおもふさまにしすまし。土肥の次郎實平をちかつけ。君よりの御意にて候。御身さかはへうちこえ。大臣殿父子をは鎌倉へうつし。義經をは都へのほせまふされ候らへ。實平承り。あつはれ大事の御使かなといふまゝに。義盛とうちつれ。さかはの宿にまいり。判官の御前にて笏とりなをし申す。君よりの御意にて候。いしくもおけかうさふらひたり。くわんとうのけいこにも。すへ申度候へとも。實やらん凶徒おんむのともからが。逢坂にかくれゐて。世をみたらんとたくむよし風聞す。まつ〳〵しやうらく候らひて。禁中警固ましませとの。御使なりとまふす。判官聞しめされて。いや〳〵是は頼朝の御返事とはおほえす。れいのかちはらめが。ちうにてまふすとこゝろへたり。唯鎌倉にをし下り。梶原父子か首をはね。此間の無念さをさんせんとこそ仰けれ。實平うけたまはり。御諚尤にて候さりなから。先大臣殿父子をは鎌倉へうつし御まふし有。暫とうりうまし〳〵て。かさねてちうしんさふらはゝ。實平かふて候うへ。よきやうに申へしと。とかくなため奉り。大臣殿父子うけとり。鎌倉へうつしまふされたり。其のち義經。また義盛をもつて。土肥の次郎してまふされけれとも。是もかちは

らか中にて心得。急き上洛さふらへとまふしつけて候に。逗留の次第心元なく候さりながら。此度のけじやうには。伊与の國一ケ國を。申あつけ奉る。べつしたるちうのあらは。追而九國の御代官を。まふしあつけたてまつらんとの。御返事なりと申て。よしもりをかへす（さしくとき）義盛やかて立歸りさかはの宿に參り。此よしかくとまふしければ。義經聞しめされて。こはいかに木曾義仲を。ちうりくせしよりこのかた。平家を三年三月にほろぼし。三種の神器事ゆへなく。二度帝都におさめまふし。あまつさへ平家の大將大臣殿父子生捕。是まてくたりたる義經に。いかに讒人有とても。一度のたいめんはなとかはなふて有へきそ。是もおもへは景時か。讒人によるなれは頼朝にうらみさらになし（詞）さりながら。全く不忠なきよしを。諸神諸社の牛王。寶印のうらをもつてまふされけれとも。是も梶原がざんそうによつてかなはす。義經無念におほしめし。其儀にて有ならは。一通の狀をつかはし。頼朝の御目にかけ。返事に隨ひともかくも。はからふへきにてはんへるそ。夫〳〵むさしと仰ければ。（色）弁慶承り。墨すりなかし筆にそめ。さうあんまてもなく。唯一筆にそかひたりける

（文脈）源ノ義經乍レ恐申上候其意趣ハ。御代官ノ一ニ撰レ。勅宣ノ御使トシ。累代弓箭ノ藝ヲ顯シ。會稽ノ恥辱ラ雪ム。忠賞行ルヘキ處ニ。思ノ外ニ虎口ノ讒言ニ依テ。莫太ノ勳功ヲ默セラル。義經犯シナウシテ咎ヲ蒙ル。功ヲ以テ誤リナシトイヘト。御勘氣ヲ蒙ル間空ク紅涙ニ沈ム。熟亨ノ意ヲ案ルニ讒者ノ實否ヲ糺サス。鎌倉ヘタモ入ラレサレハ素意ヲノフルニアタワス數日ヲ送ル。此時ニ當テ御顏ヲ拜シ申サスンハ骨肉同胞ノ儀絶。既ニ宿運究テ空キニ似タルカ將亦先世ノ業因ヲ感スルカ。悲哉此條故亡父（尊靈）再誕シタマワズンバ。誰ノ人カ

愚意ノ悲歎ヲ申披カン。何ノ人カ哀憐ヲ垂ラレンヤ。亨新キ申狀（同書）述懷ニ似タリト雖ト義經身體髮腐ヲ父母ニ受莫太ノ時節ヲ經スシテコカウノトノ。御他界ノ後孤子ト。ナリハテヽ母ノ。懷ニ抱カレ大和ノ國宇多ノ郡ニ趣シヨリ以來一日片時モ安堵ノ思ニ住セス。甲斐ナキ命ワ存ストイヘト京都ノ經廻難治之間諸國ヲ流行シ身ヲ在々所々ニ隱シ邊土。遠國ヲ栖トシテ土民百姓等ニ伏仕セラル然ニ幸慶。忽ニ純熟シテ平家ノ一族。追討ノ爲ニ上洛セシムル。手合ニ木曾義仲誅戮ノ後平氏。亡ホサン爲ニ。有時ハ嶬々トアル。巖石ニ駿馬ニ策テ敵ノ爲ニ命ヲ。亡ハン亨ヲ。顧ミスマタアルトキワ漫々タル海中ノ上ニシテ風波ノ難ヲ凌キ身ヲ。海底ニ沉メンコトヲ痛マス骸ヲ。鯨鯢ノ腮ニカク加之。甲冑ヲ。枕トシ。弓箭ヲ業トスル本意。併。亡魂ノ憤ヲヤスメ申シ年來ノ宿望ヲ遂ント思ウヨリ外他亨ナシ。剩ワ義經五位ノ尉ニ補任ノ條。當家ノ重職何亨カコレニシカン然リトイエト。今愁深ウシテ歎キ切ナリ。佛神ノ助ケニアラスヨリホカ他亨ナシコレニ依テ諸神諸社ノ牛王。寶印ノウラヲ以テ野心ヲ更ソンセヌ旨ヲ日本國中ノ大小ノ神祇冥道ヲ。鬱シ奉リ數通ノ。起請文ヲ書進ストイヘト。猶以宥免ナシ。此國ワ神國ナリ神ワ非禮ヲ。ウケタマウヘカラス。頼ムトコロ。他ニアラス則貴殿。廣大ノ慈悲ヲ仰キ便宜ヲ伺イ。高聞ニ達シヒケイヲ。メクラサレアヤマリナキムネヲ。優セラレ。芳免ニ預カラハ。積善ノ餘慶家門ニ及ヒ永ク榮花ヲ子孫ニツタヘン依テ。年來ノ愁眉ヲ開キ一期ノ。安寧ヲドクシユセシメンコトハツキス亨ノ心ヲ。アンスルニ爰ニ攝津ノ國。渡邊ニテ逆櫓立ノ遺恨ニ依テ義經景時ガ中ヨカラス動スレハヒマヲウカヽヒ。折ヲエテ。義經ヲウタントホツス。ナヲモツテカナワサレハ。教

頼ノ御手ニ付テ先立テ關東ニ下着シ。頼朝ニチカツキ奉リ時々讒奏ヲイタス處。其イワレナキ物ナリホンノ罪ハ。疑イヲハカロクスルトモ無實ノ罪ハ。疑イヲハ。重クセヨ理ハ萬民ノ悦ヒ非ワマタ諸人ノ。難キタリ。賢王ハ一心ノ爲ニ。理ヲマケス先者ノ。クツカエスヲミテ。後者恐ヲナセリ上直ヲナレハ下ヤスシ水上。スマサレハ河流ニ依テ。月ヤトラス何ソ梶原。一人ニ諸國ノ諸侍ヲ思ヒカヱラレンヨリ急キ。遠嶋ニ配流セラレ諸家ノ歎キヲヤメチウキンノイサミヲナシ玉へ。誠惶誠恐謹言元暦二年六月五日進上因旛守殿へ。義經判ト書タル。彼弁慶カ筆勢。ホメヌ人コソナカリケレ

元和六年暢月上旬

桃幸若
行年七十三歳
如滴（押花）

伊豆ノ三嶋大明神ニテ　能因法師詠之

心あらは小田の下益雄いとまあれや
なはしろみつを空にまかせて

此哥ニテ忽ニ雨フル也

ほり川

（内閣文庫本）

去間判官殿。あけけれは參内申さるゝ。御門ゑいふんましまして。幾程なくて上洛は。心もとなくおもへとも。御門守護せん爲ならは。相坂より西。卅三ケ國をとらすると。せんしを蒙りたまひて堀川殿に移らせたまふ。かくて近國の大名小名。關東よりの御上洛と承り。くんこうけしやうにあつからんとて。門外に駒のはなゆるす事こそなかりけれ。されとも關東よりの御ゆるされもなきあいた。おこなひたまふ事もなし。四國西國は皆此君におもひつき申。今こそかやうにましますとも。終には日本半國の。御大將にてましますと。いつきかしつき奉る。すてにはや此事關東にかくれなし。梶原今はかうそとおもひ。君の御前にかしこまり。すてにはや御さうし。御ゆるされもなけれとも。相坂より西。卅三ケ國を我かまゝ成とのたまひて。四國西國よりも關東へ參るつわものを。こと〳〵く都にて押とゝめたまふ。其上此君。かくて都に御さあらは。終に日本は此君の。御はからいと成へし。いたはしくは存れとも。此君をうちまいらせ。御きやうやうを懇に御とひあれと申す。頼朝聞めされて。實々それはさそあるらん。急き討手をのほせよ。梶原おもふさまにしすまし。御前を罷立。たれを討手にのほすへき。是ににくき相手あり。御内の土佐正存は。心も剛にて智惠ふかし。やゝともすれは

某に。敵をなすものなれは。かれを討手にのほすへき土佐を討手にのほするならは案ふかき者にて。（カヽルホシ）き
けいもうたれたもふへし。たとひうたれたまはすと土佐をは終に討るへし。土佐たに討れて有ならは。義經も
ほろひたもふへし。兩敵なからほろほして。浮世の中を樂〳〵と。すまはやなんとおもひけれは。あんしす
まして梶原はしやくとりなをし。申けり。（コトハ）けふこの比關東に。弓矢をとつての名仁。其かすおほしと申せ
とも。御内の土佐正尊は。心も剛にて智惠ふかし。かれを討手におのほせあれ。頼朝きこしめされて。實々此
者十九の年。いまたこんわう丸と有し時。かうの殿の御供申。尾張のおさたかたちにて。長田か子とも。その
數人をほろほし。その名を得たる者なれは。かれを討手にのほせよ。はやとく〳〵との御諚なり。梶原承り。
御判をたまはつて仰つけんと申す。頼朝御判を出させたもふ。土佐か宿へそつけにける。土佐は御判をたまは
り。あらあさましのことゝもや。日本かよつてせむるとも。やわか討れ給ふへき。義經の御討手を。土佐一人
に仰つけらるゝ事。御前へひき出され。頸をきらるゝ程のこと。ちたい申たけれとも。御意にもれても正尊か。
命生てもかひあらし。たとひのほると此事を。ふかくつゝめといふまゝに。むねとの兵を。（カヽルホ）八十三騎揃へ
つゝ。（ホシ）鎌倉内を忍ひ出。道にて出立けるやうは。鎌倉殿の御代官に熊野へ參ると披露して。上から下に至る
まて。しやうゑひさふりたちきせ。いちめかさにして付させ。よろひいれたるなかもちに。をはけたてしめひ
かせひき馬ともの。尾かみにも。ゆいして切て付させ。渡る瀬毎にこりをかき。夜を日についてうつほとに鎌
倉を出て廿日には都入とそきこえける。（コトハ）五條油の小路に宿をとり。土佐はきこふる名仁にて。まつてうを

かたらひ。御所のけこをみする。てうは走歸り。いつ〳〵よりも御所樣には。御用心もましまさす。よきをり
からと申す。正尊聞て。扨はをりこそめてたけれ。明明日の暮程に。せひにおひてかゝるへし。つめかゝせた
る駒共の。すそをひやせと下知すれは。さつしきともか乘つれて。堀川おもてへ打ひてゝ。駒のすそをそひや
しける。かゝりける所に所に（ヤウ）大將の御内成。伊勢の三郎吉盛は。堀川おもてをみてあれは。かうたる駒のけよ
けなるをのりつれてこそひやしけれ。吉盛是をみて。都にをゐて。大將の御内にもかほとの馬はなし。いか樣
是は東國方の大名の。上洛にて有けるや。とはゝやとおもひ立寄物をとふに。つゝみてさらにあかさす。やう
ありけると存れは。舍人おほき其中に。口のきいたる舍人有。かれかそはに立寄。きたる笠をひんぬいて。物を
はとはすしてのつたる馬をそほめにける。あつはれ御馬さふらふや。つめかみの切やうは鎌倉やう候な。追樣
むかふよこはたはり。尾口さうとうつまねのくさり。しゝあひ骨なみよめのふしは。つくり付たることくなり。
あつはれ御馬候や。か程におほき御馬の中にうり馬なんとや候覽。けうかるかわりにひきかへて。參らせんと
そいふたりける。舍人此よし聞よりも。御身いかなる人なれは。そゝろに口のきゝやうは。あやしゝとそとか
めける。吉盛聞て。ちたひ我等かならひにて。くちをきかてはかなはぬなり。景（ヤウ）と田舍を家として馬をあきな
ひ身を過る。本は丹波の國の者。いはらのことうさことて。藥かひの針つかひ。すその血をも出すへき。御馬
なむとや候らん。御ひけいあれとそいふたりける。舍人此よし聞よりも。扨はくるしくなき人や。此御馬とも
こそ。明明日の暮程に。大事にあはんす御馬てさへ。すその血をも出すへし。宿を尋て御入あれ。御宿はいつ

くて候そ。五條油の小路にて。土佐殿の御宿と。尋ねて御入候へよ。土佐殿と申は。法師の御名さふらふか。又俗の御名にてましますか。とねりかきひてうちわらひ。けふこのころ關東に。鎌倉殿の御内成。いほうきほう土佐坊とて。三人の法師武者の。ありとは國にかくれもなし。しらぬはいこく仁かなとてから〳〵とわらひける。吉盛聞て。さほとならん大名の。上洛ましまし候か。國に披露のなきことは。そらこと成とそいふたりける。披露なきこそ道理なれ。大事のかたきを討たん爲め。忍ひて上洛ましませは。扨こそ披露は世になけれ。大事の敵とのたもふは。天下の御敵候か私のしゆい候歟。土佐殿の御身にあてゝなんてう敵の候へき。鎌倉殿の御身にあてゝ討へき御敵候ようたれたまひて其後。名字かくれよもあらし。南無阿彌陀佛と申けれは吉盛ともに念佛して。扨は義經の御事と聞すまして吉盛は堀川の御所にそ參りける。君の御前にかしこまり。東國の土佐坊か。君の御討手に罷のぼりて候。判官きこしめされて。何と申そなにかしか討手に土佐なんとをのぼせらるゝ事は。たうろうかをのをとつてりうしやにむかふかことし。時刻うつしてかなふまし。いそひてくして參れ。承ると申て。土佐か宿へ尋行。物申さんとありしかは。人を出してたそととふ。くるしうも候はす。大將の御使に吉盛成とそこたへける。土佐此よしを聞よりも。されは人の耳はかへにつき。眼は天をかけるとは。今こそおもひしられ。たれタ卩着たる正尊を。たれやの者か參。御所にてかくと申つらん。對面せてはあしかりなん。いそきこなたへしやうせよ。承ると申て。若堂あまた出相。吉盛をていへしやうする。やゝあつて正尊は。おうひやくへにひやくたんし。わたほうしにてひたひをつゝみ。わつは二人に手をひかれていへよろほひ

出て。吉盛か對座にとうと居て。如何に候吉盛。久しう御目にかゝらす候。某只今の上洛。別の子細にて候はす。關東の君のいれいもつての外にましまして。伊豆箱根三嶋。若宮の御ほうへい中〳〵申におよはれす。又都の内の神〳〵へも。様々の立願をこめたもふ。ことにとりはき候て。人數ならぬ正尊は。三の御山の御代官を給り。熊野へ參候か。はや老躰に罷成。あふみあたりよりいれひし。行歩心にまかせす候へとも。のほらて叶ぬ道なれは夕卩上洛仕る。頓て出仕を申。此由申上んすると。隨分存て候へ共。いれいもいまたすまされは。不參申て候所に。おもひもよらす吉盛の。御目にかゝり候こそ。何より以嬉しけれ。何様御酒を申さんと。三々九度とそしいたりける。酒もなかはなりし時。正尊申けるやうは。めん〳〵御中へ。いなかつとの有けるを。とりこしぬると存るなり。何かある御めにかけよ。承ると申てくら具足をそひいたりける。正存是をみて。あらみくるしのくら具足や。馬にそへてはなとひかぬ。兼て申せしよし盛の。りうの御馬はこしらへたるかゝ承ると申て。黒鶴毛なる名馬の。いつきにゆりたるを。宿の小庭へ引出す。さきひいたるくら具足。目の前にてとりをかせ。此間の長旅に。つめをかゝせてそんすれとも。是に乘て御かへりあれや。御所様の御機嫌を。萬事はたのみ奉ると。まことしらかにたはかりけれは。酒にはたけき鬼神も。とらくるならひなりけれは。さしもにたけき吉盛も。やす〳〵とたはかられ。なに事もか事も。吉盛かくて候へは。御心やすく思召せ。御在景の間に。重而參候はんと。暇をこうて吉盛は堀川の御所にそ參りける。義經の御前にかしこまり。關東の君の御代官に。熊野へまいると申す。熊野參りのたうしやなれは。さしも御置候へかし。わか君とこそ申けれ。

義經きこしめされて。いや〳〵日本一の義經を。討にのぼりたるくせものに而。萬事にきよくをかへへし。いかさまにも吉盛は。正存にかたらわされたとぞんするなり。いふしうさうおたちあれ。向後對面申ましいと。御座をたゝせたまへは。吉盛めんぼく失ひ。ひきて物こそ敵よと。馬をは尾かみを切て河原おもてへをつはなし。只壹人切て入。正存とさしちかへしなんとこそはくるひけれ。其後義經武藏をめされ。まことやきけは東國の土佐坊か。名にかしか討手にのぼりたるか。五條油の小路にありと聞そ。いそひてくして參れ。まいれといふにまいらすは。くひを切てまいれ。弁慶承り。あつはれ大事の御つかひかな。さりなからあんの內に存れは。黑糸威の腹卷を。草すりなかにさつくとき。上帶ゆつてちやうとしめ。一尺八寸のうちかたなを。十文字にさすまゝに。黑き馬にしろくらおかせ。かるけにゆらりと打のり。わつは壹人あひくし。土佐か宿へ尋ね行。駒をかしこに乘はなし。おちゑんにつんとあがり。事のやうをきけは。土佐は吉盛をたはかりおうせ。いまはとゆるすこゝろにや。てういみこのみなみすへて。酒もりなかはとそみえにける。弁慶是をみて。あひの障子をさつとあけ。隨分は正尊の。うしろをそしらぬ弁慶にて。時すいさん申て候。何樣御意の通りを。まちかく參て申さんと。大勢の兵を。のりこへ〳〵とをり。土佐か對座にとうと居て。妻手の小うてをむすと取。申せと御諚の候ひつる。いれいときこしめされて。もりに武藏を參らせらる。はや〳〵御參り候へと。こかひなとつてひつたてゝちゝめかひてそ出にける。大勢の兵とも。そは成るうち物を。ひつたをし〳〵。はゝきもとをくつろけ。すてにたゝんとしたりけり。土佐はきこふる名仁にて。手こめにはせられつ。かなふへきやうあ

らされはやあ。何をさわくそわとのはら。いまはしめぬ武藏殿にてさけうことなくましますそ。しはらくそれにて酒盛せよ。やかて歸らん人々とて。宿の小庭へ出にけり。土佐か郎等つゝいて出て。あれまておとも申さんと。我も〳〵とすゝみけり。弁慶是をみて。きやつはらにすくめられ。あしかりなんと存れはやあめしもなきに推參して。むさしめうらむるなかた〳〵と。大のまなこににらまれて。すこしひらむ其隙に。土佐かよわ腰むすとだいて。鞍つほにとうとをき。我か身もやかてとひかゝり。後馬にのつたりけり。弓手の手にて正存か。はかまのきゝわむすととり。めてに刀をぬきすかし。さもあれ御へんはいれひして。行步心にまかせすと。承はつて候か。おもひの外にひきかへて。ちよいろこのみなみすへて。酒もりしたまふあやしさよ。何事にのほりたるそしいしゆを殘さすはやかたれ。いかに〳〵と云けれは。土佐はきこふるめいじんにて。爰にて御へんと某と。問答たいけつしたれはとて。りひをわくへきなかてなし。迎御所へまいる上は。あれにてしいしゆを申すへし。しはらくまてや武藏とて。こまをはやめてうつほとに堀川の御所にそ參りける。門外に駒をのりはなし。はやくして參つたるよしを申上る。さすか正存も。鎌倉殿の御代官に。熊野へ參ると申。熊野參のたうしやなれは。ちかふめせとの御諚にて。ちうもん迄めされ。さぬき圓座をなけ出す。正存をめすなをりしきたひし。かうへを地につけ赤面す。義經御覽して。いかにめつらしや土佐坊。まことやきけはなにかしか討手にのほりたるときく。勢はいかほと持たるそ。いつくにかくし置たるそ。ありのまゝに申せ。いつわる氣色あるならは。まつたくそこをはたゝすましいそ。いかに〳〵との御諚なり。正存しやくとりなをし申す。さん

候某只今の上洛。別の子細にて候はす。關東の君の御いれい。もつての外にまし〳〵て。伊豆箱根三嶋。若宮の御ほうへいなか〳〵申にをよはれす。又都の内の神〳〵にも。樣々の立願をこめ給ふ。ことに取わき候て。人數ならぬ正存めは。三の御山の御代官をたまはり。熊野へ參り候か。はや老躰に罷成。瀨々のこり水身にしみ。あふみあたりよりいれひし。行歩心にまかせすさふらへとも。かゝる御きたうの折節。いれひと申て關東への。きこえもおそれと存タ卩上洛つかまつり。頓て出仕を申此由申上んすると。隨分存して候へとも。いれひもいまたすまされは。不參申て候所に。おもひもよらす吉盛を御つかひにたまはり。參候はんと出立候所に。いまにはしめぬ五條のちよいろこのみ酒もたせ。門出いわひ候を。あのむさしとのゝ御出あつて。おさへてつれて御參りある。關東より御言傳の御狀なんと候を。持て參候はんと。すいふん存候へ共。おく病至極のくわしやはらにて。武藏殿の御いきをひにおそれ。かなたこなたへにけさり。どうてんの間にとりまきれ持てまいらす候。諸事の次第をは武藏殿と吉盛の。御覽せられて候うへ。私曲は努々候はすとまことしらかに申す。日本一の義經も。二さうをさとる弁慶も。まさる土佐にたはかられ。けに〳〵それはさそあるらん。みえたる事もなきさきに。きりてすつるもむさんなり。まことになんちすこらすは。しやうしついてに起請をかけ。ゆるすへしとの御諚なり正存承り。御ゆるされたに候はゝつかまつらんと申す。義經きこしめされてそれ〳〵武藏と仰けれは。弁慶承り。熊野の牛玉一枚に。硯を添てそ出されたる。土佐はきこふる文者にて自筆にかうこそ書たりけれ敬白天罰を起請文の事。上は梵天たいしやく下は。四大天王ゑんまほうわうこたうの冥官。下界の地には。伊勢天

照大神を初め。奉り。熊野白山。金峯ぜん。わうしやうの鎭守。稻荷祇園。賀茂春日八幡は。正八幡大菩薩松の尾平野。梅の宮惣して。ゑんふたいのうちの有精むせい。かう〳〵たんのもうりやう鬼神きゝいれなうしう。たれたまへ今度。正存か。君の討手にまかり。のほりたる事。候はゝすまた。私のしゆくいさらに。候はす。もし僞り申て。候はゝ只今申おろす神罰。みやう罰を。正存か。四十四の繼目八十三のわう〳〵ことに罷蒙り。候ひて今生にては正存か弓矢の冥加。なかくすたり。來世にてはむけんのそこにたさひし永劫うかむ世さらに候まし。仍狀如件。文治元年。卯月廿日藤原の正存判と書たるは扨身の毛もよたつはかりなり 義經こま〳〵と御覽して。誠に起請のおもてはこまやかなり。神慮にまかせてかへすそとて。正存を宿へそかへされける。正存我宿にかへり。されはゆみとりはとにもかくにも物をは書へきもの也。正存もんまうなりせは。かた〳〵の御目にふたゝひかゝるへきか。あつはれ法師。よひ法師とそゝろに身をそほめにける。堀川殿の案内を。みおほせぬるこそ嬉しけれ。夕さりの夜半にせひにおいてかゝるへし。名殘惜みの酒もりせよ。承ると申て。たりはらとうがうかきすへて。すてに酒盛をそ初めける。夜既に更けれは。時こそよけれ人々。はやうつたてといふまゝに。てんてにたい松をとほしつれ。堀川殿に押よせおもての門のうちやふり。大庭さして亂れ入。その夜堀川とのには。御用心もましまさす。十二人のおもひ人をめされ。夜とともの管絃なり。かゝる遊の折節。との原たちはむやくとて。みな〳〵宿へそかへされける。武藏坊弁慶も。北白川に宿ありて私にかへりて居たりけり。適々有やう人とては 女房達に 中居の人 扨は諸職の者計。〳〵うたて。かりける時分か

な。荒口惜や酒宴に草臥て前後もしらすふさせ給ふ。十二人のおもひ人のなかに。磯の前司か娘。司土御前はかりこそ。宵の間にしらぬ女の。けこをみつるとあやしめ。夢もむすはすまとろ[illegible]す。相まつるところに。夜討うんかにみたれ入る。義經のすかたをみ申に。前後もしらすふさせ給ふ。なう〳〵とおこし申せとも御返事もましまさす。司土心におもひけるは。實やたけき弓取は。物の具の音にをとろきたまふと聞てありとおもひ。御きせなかをとり出し枕かみにさくと置。義經かつはとおとろき。ことさう〳〵や司土こせ何事にやとありしかは。夜討か入てさふらふにをき相たまへと申す。義經きこしめされて夜討といはんにこと〳〵しく。正存にてそあるらん。何程の事のあるへきそ。あまり草臥。まつしはらく。いややすまんとのたまひて。又こそやすみたまひけれ。司土みまいらせなう。既にましかく參るなり。をき相たまへと申時。義經かつはとをとろき。さらはきせなかまいらせよ。承ると申て。御きせなかを奉る。弓手の小手をさしたまへは。妻手をしつかまいらする。妻手のすねあてしたまへは。弓手をしつかまいらする。はいたてとつてをしあつれは。物の具のわたかみつかんて引立。草すりなかにさつくとめし。上をひしむるその隙に。甲をとつてまいらする。しのひの緒をしむるひまに刀をとつてまいらする。さやからみしたまふ間に太刀をとつてまいらする。帶とりしむるその隙に。えひらをとりて參らする。かけ緒をとゝむる其ひまに弓をは司土押はつて。すひきつる音ちやうとして義經に是を參らせけり。義經此よし御覽して。あつはれ司土は弓とりのおもひ物やとのたまひて既にすゝむて出られけり。しつかもつゝひて出たりけり。義經御覽してやあ。さたうなり司土こせ。しのへ〳〵

と仰けれとも耳にもさらに聞いれす。まつさきにこそすゝみけれ。すゝむ姿を御覽すれは。もえきにほひの腹巻を。きぬの下にそきたりける。義經祕藏の白柄の長刀弓手の脇にかいこふて。たけ成髪をはつとみたれは黑母衣やらんとみえたりけり。義經御覽して。荒面白の合戰や候。四國西國のたゝにも。かほと面白き軍はなし。とてもの事にてあるならは。庭へ出てのあそひに花と蝶とのみたれ足。みてこそ心はすみ候へや。あこなたへこよや司土とて西の小庭に。出たまふ。ころはいつその比そとよ。文治元年卯月廿日の夜の事なり。藤花は松にかゝりて。色々の草花のらんてんしたる。あり樣は錦をさらすことく也。池のみきわにのそむとき。しつかか姿は。花に似て。いまた秋にはあらねとも。女郎花かとうたかはる。義經中さしを打つかわせたまひ。矢さきにかたきはきらうましいと。指とりひきつめさん〳〵にあそはす。おもてにすゝむ兵を。十七八騎はら〳〵と射られ。すこしやころをひきしりそく。弓矢をからりとなけ捨たまひ。御帶刀ひんぬいて切て出させ給へは。司土もつゝいて切て出る。弓手を義經切給へは。妻手を司土そきつたりける。二人の人々。爰をせんとゝきり給へは。手もとにすゝむ兵を。二十七騎きつて落したまふ。殘る兵。風に木の葉の散やうに。むら〳〵はつと引たりけり。義經司土か手をひいて。をちゑんにつんとあかり。ことの子細を御覽すれは。手負死人の伏たるはあうさんをみたしたことく也。かゝつし所に大將の御内成。伊勢の三郎吉盛は。君の御ふしん蒙て。七條しゆしやかに有けるか。夜討の由を承り。とう丸とつて打かけ。上をひゆつてちやうとしめ。一尺八寸の打刀を。十文字に指まゝに。三尺八寸のいか物作りのうち物を。するりとぬいてうちかたけ。もみ

にもうてはしりしか。堀川殿につきしかは南の門につつ立て。大音あけてよははるやう今夜の夜討の大將は。土佐坊にてましますか。かう申兵を。いか成物とおもふそ。大將の御内成。伊勢の三郎吉盛なり。御身ゆへに某。君の御ふしん蒙る上。手なみの程をみせんとて。おもてもふらす切て入。土佐からうとうともしうをかたきにうたせしとて。まんなかにとりこむる。吉盛此よしみるよりも大勢の中へわつて入。さん〳〵にきつたりけり。くひ二つとつて。大勢に手をおほせ東西へはつとをつちらし君はいつくにおはします。義經是にひかへたそ。是へ〳〵とありしかは承ると申て。をちゑんにつんとあかつて。二つの頸をさしあけ。義經に是をみせ申彼吉盛かふるまひはたゝはんくわいもかくやらん。（コトハ）其後義經。敵にいきをつかせて何かせんと。またきつて出んとしたまへは。弓手に司土妻手に吉盛すかりつき。しはらく御待候へ。今は武藏も。くまいも源八も。定て參候はんと。申もあへぬに。門外によははる聲そきこゆる。武藏坊弁慶は。北白河に有けるか。生れ付たるすいさうのあり。ことのあらんするとては。むなさわきしきりにし。左の手をだにかきぬれは。はやことありとさとりをなすか。今このすいさうのしきりなるによつて。堀川殿に何事かましますらん。みて參らんとい

ふまゝに。とうまるとつて打かけ。上帶ゆつてちやうとしめ。一尺八寸の打刀を。十文字にさすまゝに。れいの大太刀さけはいて。夜は杖こそよけれとて杖をもつてそ出にける。堀川殿の門外に。せつなか間にはしりつゐて。ことのやうをきけは。夜討うんかにみたれ入る。よの者にてはあらし。正存にてそあるらん。是はきこふる名仁なれは。もし君やうたれてましますらんと。あまりの心もとなさに。君はいつくに御座候とよははる

聲にて候ひけり。義經きこしめされて。武藏かやあ是にありとの御諚なり。さては心やすふ候。かくあるへしとどしたらは。長刀持てこうするものを。持もならはぬばうつゐていかゝせん。去間武藏。ばうにて人をまたうたす。されとも人の持程に浦山敷てこしらへたり。武藏かはうと申は。嵐はけしき高山の。岩間より生出たる白つけを。八尺五寸につつきつて。はしをひらく中をあつくとうかい渡るふなろなりにこしらへ。しさうかねをのへつけ。はみねにやつてやいばをつけ。八尺五寸の其内に。八十三のいほをすへ。くきのかしらをみかきたて。はさまを黒くぬつたれは。いほはかゝやく地はくろし。やいははしろし物によく〳〵たとうれは。ひとへにつるきのひしほこてつちやうなんとのことく成。かゝるめいよの杖ついて。南の門につつ立て。大音あけて名乘樣。唯今爰もとに。すゝみ出たる兵をいかなるものとおもふそ。めつらしからぬ。大將の御内成。武藏坊弁慶也。夜討の大將に見參せんやつとそよははりける。かゝりける所に。あらいかわのとう丸に。ひおとしの袖つけたるか。三ケ月のことくに。ひとそりそつたる長刀を。ひらりくるりとまはひておもてもふらすかゝりけり。弁慶是をみて。武藏と名乘にをこのけなくもかゝるは。只者にてはあらし。名字をなのらせきかはやとおもひ。唯今爰もとにすゝむたるは。たうかかうけか名字をなのれきかんと云。ちたひ夜討のならひにて。なのるほうはなけれとも。私ならぬ夜討なれは。しんてもめいよをせんためけみやうはかりなのるなり。むつの國の住人。あねはの平次光景。年つもつて廿八。八十五人か力なり。武藏殿のてなみの程をうけてみんとそいふたりける。弁慶聞て。扨はなんちは。正存か郎等よな。なんちかしうの正存をたにも。あはぬ敵とそんす

るなり。そこをひけとそいふたりける。光景聞て。さしもかくれぬ武藏殿の御諚ともおほえぬものかな。世にある人をたのむはみなよのつねのならひなり。戰場にてのそくしやうたてさらにきかれぬことさうそ。心のかうなる者をこそ。武者とは申候へ。賤しき者の打太刀か。世に有人の御身には。たつやたゝすや。うけてみたまへ武藏殿といふまゝに。長刀の石つきくきなかにをつとりのへ。弁慶かひさのあたりに。小風を吹せてさらり〳〵とないたりけり。弁慶是をみて。あつことそんすれは。はうを庭へさしおろし。石つきをおとらせ。このはかへしといふ手を出し。すそをはらつてすねあての。をくひやうかねまねきのいた。はうの石つきからりとあて。ッやゝもすれは光景はあゝうたれつへうにみえにける。去間光景も長刀は一手ならふたり。はうにあいては大事のもの。あしかきてはかなはぬわさ。いかにもかたきをなふりて。ひらまんところを一太刀と。心の内に存れは。敵かかゝれはとひさる。長刀の切つてには。おもてかへし芝なき。うしろをきるはなか切。さゝ浪切に水くるま。やあ。きりこみわきこみたゝくやみうちすて刀。隨分大事の秘書の手を。のこさすこそはつかひけれ。弁慶あまりのやさしさに。しはらくうたてあひして。おもしろい手をやつかふと。めをすまひてそみたりける。されとも今は武藏にまし。ひしとおもふ手もなけれは。いつ迄をいてつみ作りに。いとまとらするさらはとて。ほうの石つきをつとりのへ。をかみうちにちやうとうつ。甲のからくりはらりとくたけ落花のことくちりけれは。首の骨か打こまれ。とうへくつとそにへ入たる。五十四郡にかくれもなき。あねはの平次光景も。武藏坊か手ににかゝりみちんになつてうせたりけり。殘るつわもの是をみて。武藏坊にてあれはと

て。鬼神にてはよもあらし。もらすなうてや尤とて眞中にをつとりこめ。ひみつになれともうたりけり。弁慶是をみて。ほうの石つきをつとりのへ。はつはうをさしからんて。一方へをんむけ。ひしほことをしやすつき。さてくしさしといふ物に。さしつらぬいて忍いとなつた。柳櫻松楓。四本かゝりの庭の內。くるり〳〵とおいめくる。池のみきわのたゝかひには。山鳥水鳥けたてつゝ。けんさんところたいのや。ちうもんめんらう遠侍。こゝみいつゝこみたいつ武藏かはうにあたる者。いきてかへるはなかりけり。鎌倉にて正存は。一騎は十騎十騎は百きに。むかふほとの兵を。八十三騎揃へしか。唯十七騎にうちなされ。行方しらすおちて行。むさんやな正存は。から〳〵命たすかつて。河原をさして落けるを。吉盛と弁慶か。あとをもとめて追つめて。からめてつれて參りけり。義經此よし御覽してやあ熊野まいりの正存に。繩をかくるはもつたいなし。いかに如何にとありしかは。正存ちつともさわかす。いたけたかにのひあかり。カヽル大音あけて申樣。命は。義によつてかろし。命は恩の爲に奉る。頼朝の御爲にすつる命はをしからし。君もにくしとおほすなよとく〳〵いとまたひたまへ義經不便におほしめし。泪をなかしたまひて。あつかうなりや正存。たすけたくはおもへともなんち二君につかへし。さらは暇をとらせよ。承ると申て。いや六條河原て切に。けりかの正存をみし人。きせん上下をしなへ。かんせぬ人はなかりけり

四國落

（大頭左兵衛本）

去程に判官たいりを退出ましく〳〵て。堀川殿に下向あり。むさしをめして仰けるは。御門のせむじを蒙て義經都にあらん事。いちよくの臣と存也。旅の出立をかまへよ。弁慶承てむねとの人々二百余騎すぐつて堀川殿を出させ給ふ。十二人の北の方も御供なりとそしたはれける。義經此由御覽して。こはいか成御事候そすてにはや義經は關東の頼朝より。ふけうのみにて候へは。天にこうのあみをはり。地にさかもぎの關をすへ。いつくにてもよしつねが。うたれむ事は治定也。さあらん時は中〳〵御前くそくし奉り。そこともなき遠嶋に捨をき申ならは。義經かあとのゆみやのきすたるへし。たゝ〳〵とまりたまへとよ。十二人の北の方このよしを聞しめし。たとひ龍たつ山のおてして三津の川なりとも。友にこかれはうかるまし。とゝまるましの都やとて。先にそたゝせ給ひける。義經きこしめして。あふしたふもひとつたうり。誰をたのみてまつら姫。都にとゞめをくならば。道のさはりと成へし。きれともきられぬあひよくの。うきみのさはりはこれなりと。二百余騎の人々はおこしを中に。とりこめて涙と友に出給ふ。これやゑむきのせいたいに。家をはなれて三四月。おつるなみたは百千かう。万事はみな夢のごとしより〳〵ひさうをあふぐと。詠し給ひしきうせきと。今

の義經のはいるの旅。すがたはいづれ。かはるともおもひはさならひとつなり。末は山崎たから寺。かうないかちおり過ければ。しとろもとろに。らむもんしあらむつかしやあくた川。手嶋瀬川はむせうし。みの山のこうように心のとまる折ふし。またうち出れは西の宮。南宮の御前の。沖のあらひゑす。松原殿の御さむさう。むかし戀しとうちなかめ。かすむうらちは。住吉のきりの。隙より松見えて。なみにたゝよふあまをふね。心ほそしと打なかめはや大もつの浦に付く。弁慶申けるやうは。これより西國の旅の道は。難所岸石也御こしのかちゝゆめ〳〵もつてかなひ候まし。これより御舟にめされ四國へ渡り。伊与の川野を御たのみ有。あれにしはらく御坐有世のありさまを御覽せられ候へ。四國九州一圓におもひ付申さは。十万余騎は候へし。其大勢をそつし。都へせめて上り。ざむしんのともがらを御心のまゝにほろぼし。今一度なとか御代にたゝせ給はて候へきと申す。義經聞しめされて。さらは舟を用意せよ。承と申てむねとの大船八そうに。十二人の北のかた。御供の人々二百余騎。おもひ〳〵こゝろ〳〵に取乘て。おひての風をまつほとに日ものとかなりいたせとて。ともつなといてをし出す。まことに順風はよかりけり。二時はかりの事なるに。音に聞えたる和田のみさきを。心ほそくもはしり過〳〵弓手を見れはゑしまか磯〳〵めては明石の人丸の〳〵雨のふる夜も〳〵ふらぬ夜も〳〵風の立夜もたゝぬ夜も。嶋かくれゆくあまをふね心ほそしとうちなかめ。おのへ高砂過ければ室の沖にそ付たまふ。義經仰けるやうは。いかに水主かむとりとも。こゝかしこの津泊へ中〳〵舟をよするならは。自然の事もあるへし順風よくは此ふねをたゝすぐにわたせと仰けり。承ると申てかち取なをし御座ふねを。四國をさして

をし渡る。かゝりける所に。さぬきの八嶋の上よりも黒雲一むら立おほふ。水主申けるやうはいかさま惡風おこらんやらん。雲のけしきらむてんし。海のおもてとうようし。白浪せかいをあらひ候。いかゝはせむと申す。義經聞しめして。あふそれかしもさ存る。去年八嶋へむかひし時。渡邊より舟に乘。をし出したる風雲にちつともちかはぬけうあひなり。ふねをよくのれ用意せよ。夜舟ならは此舟いかさま風にさそはれ。舟人ともにうせぬへし。たとひ風かはけしく共。とちうをさいてやつて見よ。なをしも風かはけしくは。きなかほかけてはしらせよ。それにも風かふきかはらはほはしらはかりてやつて見よ。おもかちをつよく取。とりかちをよはくとり。わいろをたてけしきを見て。四國をさしてやつて見よ。やあかむとりともとそ仰ける。承とは申けれともよき程の風にこそ（カヽル）おもふさまにはあつかはるれこの惡風と申はつ（下）の國のむこ山おろし。紀の國の岩山おろし四國の白峯山よりもおつこつたる惡風にてへい。〳〵としたる海のおもて俄に谷峯いてきて。白浪せかいをあらふ也水主かむとりともろかいとるへきやうはなし。十二人の北のかた。近習の人々はふな底にひれふして。さなから前後もわきまへす。かゝりける所に。四方より惡風が。もみ合てふくかせに。ほはしらふたつにふきおつて八そうのもやいのつなか一度にはらりときれたりけり（フシ）風にとられてふねともか。おもひ〳〵におとさるゝ。四國へおとす。ふねもあり西國へおとすふねもあり。土佐のみなとへおとすもあり。あるひはもとの明石なた。兵庫の沖へおとすもあり。はつそうのふねともかみなちり〳〵になりにけり（クヽヤ）あらいたはしや大將のめされたる御座ふねには。十二人の北のかた。御供の人々卅人。あらきなみにあてられつ。さなから前

後もわきまへす。やう〳〵のこる人とては。義經弁慶たゝ二人。ふねの前後をあつかひ。風に任せておとさるゝ。心さしこそ。あはれなれ（コトハ）〳〵弁慶申けるやうはそれ風は龍王の出し給へるいきとして。時のふしきをなし給ふに。たからをしつめて御覽候へ（カヽル）さらは寶をしつめむとて。十二人の北のかたの〳〵かさねの小袖紅の〳〵ちしほのはかま判官の〳〵金作の〳〵御はかせ（フシ）かいていにしつめ給ひけり。もとよりもこの人々。寺そたちのかくしやうにて。法花經の一のまき。時。うつる程こそしゆせられけれ。まことに龍王も御納受やまし〳〵けむ。浪風少しつまれはふねは小浪にゆりすゆる（コトハ）〳〵かゝつし所に又八嶋のうへよりも大きなるひかり物か。七つ八つとむてきて又。惡風こそおこりけれ。弁慶たゝ事ならすとおもひ舟底へつつといり。ときんすゝかけ打かけ。舟のへいたにつつ立あかつて。大音上てよはゝる。只今とゝもとへ。すゝみ出たる兵者をいかなるものとおもふらむ。小野の高村右大臣か末孫。田邊の別當たむそうかちやくし。生所は出雲の國枕木の（マヽ）の里（カヽ）〳〵そたつ所は三條京極（ツヽ）學文するは天台山。あくまかうふくの貴僧と生れ。それ風は龍王の。出し給へるいきとして。時のふしきをなし給ふしりそき給へといふまゝに。いらたかしゆすを取出し。さら〳〵とをしもむて。東方にかうさむせ明王。南方に軍多利夜叉明王西方に大威德明王北方金剛夜叉明王中央大聖。不動明王見我身者發菩提心もむかみやうしやたむあくしゆせむ。長我せつしやとく大智惠ちかしむしや即心成佛と。この眞言のひみつにて黒けふりをたてていのられた。まことに龍王もさても惡りやうも。御納受やまし〳〵けむなみかせ少。しつまれはふねは小波にゆりすゆる（コトハ）かゝる刻に平家の惡りやうたち其數あまたゆしゆつせられけれとも弁慶にか

ちせられ皆海底に入給ふあかつき方の事なるにそこともなきゑむたうにともしひかほの〳〵と見ゆる。義經御覽して。さとちかきうらなれはこそ火は見えてあるらんあの火をたよりに此舟をこきよせよと仰けれは。承ると申て火をたよりにこきよせ見れは八十餘の老おう。鉤をたれてそゐたりける。義經御覽していかにやせう殿。此浦はいつくの國いかなる浦にてあるやらんと御尋ありけれは（イロ）〳〵翁承り御返事にもおよはす。ふねほと〳〵とうちならし。一首はかうそ聞えける（哥）いさり火の。もしほのけふり風にきえて。ふきあかしたる。おきの一むら（コトバ）〳〵義經きこしめされてあら面白の哥や候たれか此哥の心をしつたる人のあるやらんと御尋ありけれとも。いつれも皆ふな心ちにてしつたると申人もなし。されとも十二人のおもひ人の中にしつかこせむはかりこそ。いまたふねにはよはさりけるかすゝみ出て申す。あらうれしや此舟か。しむらはくさいしむたむとやらんへもおとされてあるやらむと心元なくおもひさふらひしに。今ははやあむとにてさふらふそ（イロ）〳〵されはおきにあまたのいみやうありよしとも申あしともいゝ村といふはさとの名其上ふるき哥にもいさり火といふ事は〳〵難波入江に〳〵よせられたり（フシ）〳〵いかさま此うらは津の國のあしやのうらの。事やらんなふ我君と申けり（コトバ）〳〵義經聞しめしてそれかしもさ存いかにせう殿この浦は津の國のあしやの浦候か。さん候。扨はぜう殿は此浦の人か。いや住吉のかたのものなりとて（カヽル）けすかことくにうせさせ給ふ（コトバ）〳〵さてはうたかふ所なし辰巳の明神の義經をあはれみてをしへ給へる（フシ）たつとさよとうしほて手水うかひしてそなたをらいし給ひけり（コトバ）去間御坐舟をあしやの浦にこきよするかのうらの國民。あしの（マヽ）三郎光重。舟子にあひてとふたふな子こたへて申さむ候是は。鎌

倉殿の御舍弟。太夫の判官よしつね。西國下向ましますか。惡風にふかれ。此浦へよらせ給ひて候と申光重聞て。されはこそ此君は鎌倉殿の御中たかはせ給ふ人よいさ此君をうち申。關東へまいらせ。くむこうけしやうにあつからん人々やつといふまゝに。うらうちをふるゝ尤然へしとて。我とおほしき浦の人二三百まつくろに鎧。御座舟と二重三重におつとりまいて時をとつとあくる。あらいたはしや御座舟にはいつれもみな舟心ちにて前後もさらにわきまへす。其中に弁慶いまたふねにはよはさりけり。もとより用心きひしけれは物の具小具足さしかため。卅六さいたる大中黒のそやおふて。五人はりのまむ中にきり。舟やかたにつつ立あかつて大音上てよはゝる。只今爰元へむかひたる兵者はいかなる者にてはむへるそや。これはかまくら殿の御舍弟。太夫の判官よしつね。西國下向ましますか惡風にふかれ。此浦へよらせ給ひて候に御ふれ狀はなくとも。御けいこをは申さすして（カヽル）なむそや今のらうせきは（ッ）手なみの程を見せんとて。さし取ひきつめさむ〳〵にいたりけり。おもてにすゝむよきつはものを十七八騎はらりといられ。すこし矢比を引しりそく。光重これを見るより。御座舟に今はやたねやつきぬらん。かへせもとせ人々とて。御座ふねまちかく切てかゝる。弁慶是を見て。弓矢をからりとなけ捨。長刀ひむぬいて。舟より下へとむており。光重とわたりあひ。おうつまくつつさむ〳〵にたゝかふたり。去間光重弁慶か打長刀。うけはつし候て。光重か。甲のまつかうを。ふたつにはつかと切わられ。うしろはしころほろつけ前ははつふりよたれかね。四まいかなとうひつしきくさすり二つにさつと切わられて弓手めてへさつはけたり。是こそ軍の手初大勢の中へわつて入。西東北南くもてかくなは十もむし。八

花かたといふ物に。わりたておむまはして。さむ〳〵に切たりけり。手もとにすゝむ兵者を。五十三騎きりふせ。大勢に手をおうせ東西へはつとおつちらし。いくさの門出めてたしと。又御座舟に取乗。住吉の浦にあかるゝ。すゑはむしやうと聞えけり

しつか

（大頭左兵衛本）

コトバ梶原平藏景時鎌倉をたつて都につく。判官殿のおもひ人。しづかごせむの御ゆくゑを尋給へどゆき方なし。辻々にふだをたて其つうげをまつる。九重の内にも。あはれしづかゝのがれよかし。たとひくむこうあるべくと。たれやの者か參り六原にてかくと申べきと。上下泪をもよほしてあはれととはぬ人ぞなき。かゝりける所に。はゝのぜむじめしつかひしあこやと申女。ある札をようて見るに。判官殿のおもひ人いそのぜむじがむすめ。しづかごぜむの御ゆくゑを。六原に參り申たらんする輩に。上らふならは官をなし。下ならばいとのしやう。くむこうはこうによつてけじやうのそみたるへし。景時判とかきとめたり。あこやさうなく此ふだを懐中し。六原さしていそく。すでに梶原は。しづかごせむをたづねかね。關東下向とて馬引よせのらむとす。あこややがてはしりより。人目をはばかり此札を景時がたもとに落入。梶原やがて心得。此女房をさき馬に取のせ六原を出る（上ナシ）女たつなを引むけ大和おほちにさしかゝり。（下）一二の橋うち渡り。法性寺をば行過。伏見とふかくさとのさかいなる（フシ）淨土寺へのり入てこゝぞといふて。馬をとむ（コトバ）梶原馬にのりながら大音あげて申。いそのぜむしのむすめ。しづか御前の此寺に。ましますよしを承り。關東の梶原か御むかひに參て候。はやく〳〵

御出候へと大音あけて申。しづかもはゝも諸友に。夢にも人のしらじと。ふかくたのみをかけつるに。たれやのものかまいり六原にてかくと申つらん。うらめしさよとかきくどき。すたれのまより見出せは。年比めしつかひしあこやと申女。さき馬にのりて來りたり。さてははや此女が。注進によりにけり。とむよくまうねむは。情をもふり捨てはちをもさらにかへり見ず。あこやがしるへをするうへは。なにとおもふとかなふまし。いかゞはせむとかきくどきなくより外の事はなし。母のぜむじたち出簾まきあけ梶原に見えければ。まづあまさしととらむとす。ぜむじなみたをとゝめなふしつか御前はきのふまで。此寺にさふらひしが。みやこの人めをつゝみかね大和の方を心がけ。さよふけがたに出つるが。おとこをつれぬ夜道にてうぢのかたにやまよふらん。おいてをかけさせ給へと一たむ僞たりければ。梶原きひてまづ寺中をさがし申けになくは。おひてをかけ申べし。ひがしはあぐるつがるのはて。西はろかいのとゝかんほと。あめが下の其内にさがさぬ所あるまじ。たれかあるまいり寺中をさかし申せやあ兵者ともとけぢすれば。しつか此よしきくよりも。なふそれまてもさふらはす。みづからはこれにさふらふそや。しばらく暇たひ給へ。此程なじみ申びくにたちにおいとま申。やかてまかり出へし。乘物用意し給へ梶原殿。梶原聞て腹をたて。さらばとくにも此みちを。かくとはおほせもなくして。そのあひたは門前に待こそ申候らはめやあ。こなたへしされつはものと。門よりとに引出すあしろのこしのふりたるにりきしやばかりを。相そへて門より内へ入にけり。あらいたはしやしつかこせむ。此程なじみ申びくにたちにお暇申。なく〳〵いてむとしたりしを。母のせむしこれを見て。しはらくなふ

しつかごぜむ。いとゞだに女は。五しやう三しうにゑらはれ。つみのふかいと承る。よしつねのくさのたねやとして露のきえもやらす。たらちねのすの中まて。さがせといふ事あらは。めいとにおもむく人そかし。かたきの手にわたらぬまにかみそり衣ぬきかへ。かいたもつてめいどの道をしへられさせ給へけに〳〵これもいはれたりと。あたりにたつときおひじりをしやうし。かみおろしてとありしかば。公方のおとがめいかゝせむと。人を出して梶原に出家の暇をこひければ。梶原きいて。これも關東よりの御使。わたくしにてはかなひ候まじ。先御ぐしをつけなから下向あれ。よきやうに申なし。御出家の御暇を參らせむと申げに〳〵是もいはれたりとて。かみをはいまたつけながら。かみそりはかりひたいにあて。かいきやうのもむをとなへて。五かいをさゝけ給ひけり。抑五かいと申は。せつたういむまうごおむしゆ。このみなもとをたつぬるに。りやうへむたしやうの。かゝのながれをくむて。がむじむの法をつたへたり。天平せうほう六年にならの都にかいだむをたて。しやうむくわうてい初てじゆかいし給ふ。又てむだいのかいだんは。こうにむ五年にきむさすのたてさせ給ふ。上下万民をしなへて。誠の道に入人の誰かはかいをうけさらん。抑第一に。せつしやうかいと申は物のいのちをころさぬなり。そのいわれをあむずるに。むかしげむじやう三さうの。しやうげうをわたさむためにりうさをわたりそうれいのみねをこえさせ給ふ時。六ぞくわうきたつてしやうげうをうばひとる。見る人これをとふらひしに。三さうののたまはくおろかなり。たとひしやうげうをばとらるゝとも。いのちといふおもき寶をとられねば。何をかさしてなげかむとうれへたるいろもましまさす。此世一世のみならす。生

々世々のいのちはおもきたからなるへし。このいはれをしらずして。或はとむにたえず。したしきをうしなひ
うときをほろぼすはぐちのいたせる所也。今は人をころすをも。因果はみにつもるへし一世にものをころ
して。一生までころさるゝ。くわぎうのつのゝ上にして何をかあらそはむ。石火のひかり水のあは。たゞま
ぼろしの世の中に一たむのとむに。ふけつてせつしやうをするそはかなき。抑第二にちうたうかいと申はたの
たからをおかさぬ也。今もひむくにあるものは。さきの代に人の物をぬすみしとおもふへし。とうばうさくが
みたびまてせむのもゝをぬすみ。せむきうにこめられしも。さこそはくやしかりつらん。遠山鳥の花の色。
かすみにこめて見えねども。にほひをぬすむ春のかせ。おなし其名はたちなから。とかにはおちしとそおも
ふ。おさへてあやめらるゝこそ。三かうの。ふかき。よになくほとゝぎす。音をぬすみ。めいとのとりとなり
にけり。あらあさましや。かりにもちうたうを。おかす事なかれ。抑第三にじやゐむかいと申は。わがいもな
らぬ女に言葉をもかけず。わがせなゝらぬおつとのことばをもかゝらす。しつとのつみはたしやうまてきちく
しやうに生るゝなり。むらかみのあいしの女院は。せいりやうてむのくわうくうに。ねたまれさせ給ひ。深
淵のちやとなつて。むそちのながきあきの夜もくらき。やみちにまよへり。しやうやうじんといつし人はや
うきひにねたまれ。しゆじやくゐむのおにとなる。おそれてもあまりありじやゐむかいをたもつへし。抑第四
にまうこかいと申はそらことをいましめり。僞おほき言葉には其とがおほきもの也。されば北野の天神の
かむせうじやうにておはせし時。しへいのおとゝに。さむせられ。心つくしへなかされて。ゑのき寺に

てうせ給ふ。そのとがにおとゝはならくにしづみ。給へば。かむせうじやうは。まさしくも今の。北野の神と
なる。まうせうくむがいたつらに。鳥のそらねに關をあけて。かたきにうたれ給ひけり。猶いましめの。ふかき
事はまうごまかいにとゞめたり。抑第五に。おむじゆかいと申は。さけにゑひてひれ。ふしうりかふ事をい
ましめりぎくわとうによと。いつし人は五百生の間。くちの闇にまよひしもしゆくしゆはかいなるがゆへ。あ
るいはじゆぶうぜむの。いましめとかうし。又は三十六の。とがありときらへりかゝる。いましめふかき酒を。
何とて。てんだい山に。ゆるすそと尋るにむかしてむたい山に。おむじゆをことにいましめ。酒をきらひ給ひ
しに。九條のせうじやう。御登山のありし時。きやうわうの餘に。はしめて酒をゆるす事かむをふせかむため
なり。たいれいのゆうかんになを此酒をゆるせり。ましてくわていのゆうゑいにたれかは酒をのまざらん。樽
の前には。ゑひをすゝめ。きよく水にさかつきをうかへ。しうのちやうやを見わたせは山も紅葉にゑふとかや。
酒をあいする人をば。ふくしゆとこれをなづけ。のむ事をゆるし。うりかふ事をいましめりそれはいはれぬ所。
佛をはじめたてまつつてあなむかせうしゆぼたい。いづれかさけをこのみ。よろぼひありき給ひし。ゑひては
心みたれつゝ。をのづからしたをたちまちせつかいすなをいましめのふかきは。おむじゆかいにてとゝめたり
かゝる五かいをまたふして。ひとつもやふる事なくは。てむりむわうと。生へし。むかしゑしむのそうつ
わうの御幸をかならずおかみ給ふ。僧都のおばあむやうのあまふしむをなしてとひ給ふ。何とて僧都は。佛の
やうにわうをおがませたまふぞ。僧都こたへていはく。わうのたつときにあらず。前の世によくかいをたもち

今國王と生れ給ふ。そのしゆくぜむのちからのたつとさにさておがむよと仰けり（下クトキ）いかにもわれらさきのよに。かいぎやうなきかゆへに。心もぐちにさとりなし。いま此さつけ申かいぎやうによつて。しむげうの衣の上に。かいほつとつゝみ捨されよ。當來にてはかならず。じゆかいのしゆゐむあさからず。むじやうとくだつなり給ひかへつてわれをみちひくへし（コトハ）ねざめにわすれ給ふなとときをしへ申其日すてに入あひのかねつく〳〵とちやうもむす。梶原待かねておそしといひてせめければ（下クトキ）ひじりなみだをなかし。ゑかふのかねうちならし。とうみやうをけし庵室にいらせ給へば（フシ）しつかはものゝふの手にわたる（上）ともしひくらふしてはすかふくしがなむた。夜ふけぬれば。しめむ（クル）そかの聲とは。ぐしがわかれをかなしみて。作給ひし詩にてあり。それはいこくの物語。これはしづかゞみのなげき。かむとわてうは。かはるともおもひのいろはひとつなり。かみはぎよくろうきむでむ。下はしつがふせやまて。しづかをおしまぬ人ぞなき。みめといひのうといひ。心のなさけのみちといひ。たぐひもやわかあるへきと人々のなけき。しうたむは四方にも。あまるばかりなり（コトハ）かゝるあはれをもよほす所に爰ににくき事こそ候ひけれ。あこやと申女。梶原にそせうするやうは。わすれさせたまはぬさきに。御約束のほうろくをみづからにたへと申。梶原きいて腹をたて。何と申ぞあの女。しづかごぜむの關東下向とて。上下万民をしなへてあはれをもよほす所に。申さむやなむぢは。きのふがけふにいたるまて御内にありしものぞかし。わかれをばかなしまてほうろくのこひやうこそ心へられね。あまりにものをしらぬ女にいむぐわれきせむのたうりをかたつてきかす（セン）へし。それにてよくちやうもむせよ。よひには。ろう月を

もてあそふといへと。あかつきはべつりの雲にかくれぬ。心はこくうじやうぢうにしてかたちはかりはかりの宿。みゝはとせいのみゝ。目はじやうはりのかゞみ。したはわざはいのね。くちはわざはいの門。した三寸のさえづりをもつて五尺のみをはたす。たれかあるあの女にひきて物をとらせよ。承と申て。（カシコ）さう車にとつてうちのせてわたす所はとこ〳〵そ。上は一條やなぎはら。下はから九條。小路〳〵をわたし。見る物ごとににくませて。のちには此女を。かつら川の。ふかき所をたづねて。ふしづけにしたりけりみやこの上下これを見てものいひしたる女房の。所知をばたまはらて。よみ（ノル）の國の大國を。たまはつたりやと申つゝ見る人きくものをしなへてにくまぬものはなかりけり（コトハ）かくてしづか御前をこしにのせじやうどうしを出る母のせむしもなく〳〵かちにてあこがれいづる（中クトキ）しつか此よし見るよりも。母をかちにてあゆませ申其子かこしにのりたればとてやすき心のあるへきか。年寄たるはゝをのせてかけとて。こほれおつる（コトハ）げに〳〵これはだうりとて馬をたて母をのせ（サシ）みやこになごりうきおもひ物うき事にあはた（下）ロ〳〵われをはとめよせき山しなのすさましさに。すぎふる雪の下みちを跡よりもたれか大津のうら〳〵きえばや爰にあはづが原〳〵おもひはなをも瀨田の橋〳〵野路に日くれてしの原やうきふししけきかりの宿の〳〵夜ことにものやおもふらむ（フシ）此程は心のやみに。かきくもりかゝみの。山も見もわかず。なはさめかへときくからに。ふかき心はいつみ哉。いとゝなみだの。おほかるに雨山中やとをるらん。あらしこがらしふはの關。月のやとるか袖ぬれてあれ。（上）たる宿の板まより。露もたるわと。きくからにしぼりかねたるたもと哉。夜はほの〴〵とあかさかや。うちこそわたれくむせ川。植（上クル）しさな

への。いつのまに黒田とはなりてはらむらん。夏はあつたとなるみがた。三川にかけし八橋の。すゑをいづくととをたうみ。戀をするがの。ふじのねの。けふりは空に。よこおれてくゆるおもひはわればかり。いづの三嶋やうらしまが。明てくやしきはこね山。さかみの國に入ぬれはなをうき事を。菊川の宿にもはやくつきにけり。梶原みちよりはや馬をたてしづかどせむをば菊川の宿までめしくして候。みちのくさばの露霜ともなしもやせむと申。頼朝きこしめてたつぬへき子細あり鎌倉までめしぐせよ。承ってしづかを大御所さしてかきいるゝ。折節ありあふ大名小名。かゝる時にこそみゝをうたする學門の候へ。しづかはきこふるがくしやうなればぼ。いざや參てちやうもむせんと。内さふらひとうさふらひに所せきなくなみゐたり。やゝあつて頼朝。御たいめむの其爲に。あをかりぎぬたて烏帽子めし。和田ちゝふ左右にして御座になをらせ給ふ。申しつかこしよりおりかゞみをもみわかすして。はるかにざしきのあいたるをわかためぞとおもひ。人々のかたをうしろになし。づゝめとこほるゝなみたのいろ。みだれがみをつたひてつらぬくたまのことくなり。頼朝御覽じていそのせむしかむすめしつかとは女房か事か。四國九國のかつせむはめづらしからぬものがたり。頼朝がいせいによつて諸國はをのれとしづまりぬ。代がわがまゝにもならぬには。兵法のじゆつもかなはす。とをくいてうをたづぬるに。けいかしむふやうはむゑきかくひをかつて。しくわうていをねらひあはうてむまてのぼるといへど。うむつきぬればうたれぬ。いはむやよしつねけいかしむぶやうはむゑき程はよもあらじ。ましてはむくわひちやうりやうがいきおひにもおとりたる。よしつね一人たゝかひて。天下にみちし平家をかたふくへしとも

おぼえす。頼朝かいせいのおもき所なるへし。それによしつねこのよをくつがへさむとおもひたつ。よしつねといちみし。あひねむふかくさだめなきちぎりをこむるしづかには。心ゆるすへからす。たとひ女のみなりとも。おむねむのふかきをばがうてきとこれをするなり。なにさまひくてさだめなき遊女のみとありながら。さしも頼朝うらめしきくさのたねをつくときくやあいかにとの御諚也。しつかうとましかほにしてたもとをかほにあてなから。なく〳〵申ける樣は。抑人のちぎりの。定なしとはいひながら。生々世々きうえむの。つきせすくちぬきえむにや。むかし源氏のだいしやうも。きりつぼはゝきゞうつせみの。もぬけの衣きたりし尼にもちきり給ひぬ。若むらさきすゑつむはな。紅葉のが花の緣。あふひ榊はなちるさと。須广やあかしみをづくし。せきやよもぎう繪あはせまつふくかせやうす雲。それのみならすげむしは。六十帖の。物語はかなき。ちきりこれ多し。一じゆのかけ一河の水をくむ事も。他生のきえむとこそきけ。とめる人もいつまてぞ。いつまてくさのいつまてと。霜かれゆくをしらぬぞと。袂をかほに。をしあてゝなくより外の事はなし。頼朝きこしめし大きに腹をたて給ひ。なにと申そしつか。ことは多しと申せともいつまてぐさといひつるは。かべにおふるくさなり。平地にねをさすたにもあきはてぬれは霜がるゝ。ましてやかべにつかのまの。ねをかくるくさなればみなあきはてぬそのさき。さかりのなつにかるれば。いつまてぐさとこれをいふ。さればにやしづかわがみの上をくわむし。けむじによそへ六十帖所〳〵語つなり。それはともあらばあれいつまてくさといひつるは。頼朝が。事を申也今よに出てあめが下を。わがまゝにするとも。いつまでさかふべきそと。申つる所。そ

れはしつかゞいはずともうゐてむべむのよのならひ明日までたのむ事やある。しかりとは申せともよにある程はいつまても。久しかるへきためしには。かねては松を植をき。住吉とこそいはふなれ。みやうせむぢしやう中〳〵。うつろひやすき世の中にいはへはかなふ事なるに。それにしづかゞなむぞそも源氏の。物語にいつまでぐさといひかすめ。賴朝がみの上をてうぶくするとおぼえたりかゝるふしやうをきくみゝ。ゑいせむの。ながれあらざればあらふつへしとおほえずと。御ざしきづむとたち板あららかにふみならし内所へ入せ給ひけり。連座ありし人々。一度にざしきはらりとたつ。心ほそくもしづかはたゝ一人ぞのこりける去間梶原はおもふさまにしおほせ。内々うちわらひ。しづかゞあたりへたちよつて。是はくぼうの御座ちかし。こなたへ御出候へとともなひ出したりけるが。いや〳〵かゝるめしうとなむどは。時刻うつれは内縁あり。後のわづらひむつかしゝ今夜の内に胎内をさがし。てうてきの御末をからさはやとおもひ。宿をとりてをしこめ。日のくるゝを待る。さすが人のせむどなれは。最後をしらせそのしたくをあらせばやとおもひ。しづかゞあたりへたちよつて。あらいたはしや。今夜御内より胎内をさかししつけむとの御諚の候。おぼしめさるゝ事のさうは。何事も母御前に仰をかれ候へとそらなきしてかたるしつかゞ母のぜむしむすめにいたきつきつゝ。抑人のおやのならひにて。あしき子のあまたあるだにも。わかれといへば物うきに。ましてや申さむみつからが。唯一人のしつか御前。みめかたち心さま。上下にならふ人なしと。世にもかくれぬ一人子をさきだてなにと成へきぞ。いかなるてうてきげきしむも女をころす事はなし。たとひげむかくあらけなき武びすの住家なれともさか

りの花を風なふて。きりからしたる事やある。うたてかりける鎌倉の。まつりことゝ。かきくときなくより。ほかの事はなし よく〳〵物をあむずるに賴朝よりの御諚ゆめ〳〵もつてあるまじ。是はたゞざむしんのなせる所なるべし。事もなのめの時にこそ人めもつゝみはつかしけれ。北のたいへ參りしづかゞそせうを申さばやとおもひ。こゝかしこをわけくゞり。然へき人についてしつかゝそせう申上る。折ふし北の御方御機嫌めてたふて。人のおやのならひにて。子をおもふみちはあさからぬぞ。これは時刻うつしてかなふましはや と〳〵との御諚にてかたしけなくも北のたい奉書を下し給ふ。しづかゝ母のうれしさは何にたとへむ方もなし。鳥ならは一とびに。とむてもつげたけれとも。女のみの。此程のおもひにやせ。おとろへ夢地をはしることくに。唯一所はかりにおとるやうにぞおもひける去間梶原は。日も入あひの鐘をきゝ。今はとおもひすまし。けいどのもの四五人けしからぬすがたに出たゝせ。しづかゝ宿へこしよせて。はやめされよと申しづか此よしきくよりも。今をかぎりの事なれば。からあやのふたつきぬ。かけおびまほりかけながら。しゆへむに御經とりそへて。こしの前へそ出られける。われよりもなみたは。たれをさそふてさきたつそや。などやかむろの母御前。都の内を出しより。かくあるべしとはしろしめさすや。最後のみちにおもむくを。御覽せさるぞいたはしき。とてもかなはぬそせうゆへ。けさ御所中へいてられつる面影。はかりのたちそひて。けさのわかれを。かぎりそとしらて待つるはかなさよ。おやは一世と。きくなれは。めいとて又もあふべきか。それもこうくわひすへからす。夫人間のならひにて。すゝみしむそきとにかくに。物うかるべきうき世かな心にまか

せ。ざりけるはしやうじむしやうの世なりけり かやうにかきくどき最後のこしに乘給ふ。乘かとみればものゝふ共。こしを中にとばせ。ゆいのみぎはにいそぐ。爰にて胎内をさがさむとたちかくす所に。といの二郎眞平は鎌倉のけいごにて。暮れば十騎廿騎にて鎌倉内をまはりしが。何とはしらずはまはたに。あやしき人の見えければ。駒うちよせてたそととふ。梶原これにありといふ。何事そやととひければ。しづかゞ胎内を只今さがすなりと申。さねひらきいて。あふそれはよくこそしたゝむれ。去なから此邊は若宮ちかき所にてかなふまじ。これより少引のけ。なこやか入江のさむまいはいしかりなむと存る。あふもつともと同し 又こしよせて打のせてあふなこやか入江そいそぎける。しつか此よし見るよりも。これやめいどのかしやくかぎやくろうのたびもかくやらん。かねて一世と聞たりし。親には生てはなれつゝ。又もあはぬによみかへり。くらきやみちをまたゆくや。當鎌倉の けいしむはかの若宮にしくはなし。しかも八幡大井。そうべうの神として。はうじやうゑをなし給ふ。毎年八月一日より一切の有生の。とられてしすべかりしを。あたひをはうじてかひあつめ。同き月の十五日にいはし水のなかれに。はなちてたすけ給ふ也。此ことはりにまかせつゝ。はうじやうゑとは申也。神〳〵ならばきこしめせ。人こそ人をころすとも。和光のかけの。あまねくは。我をたすけてたひ給へ。たとひいのちは露のみの。きえやすきならひにて。なけくしるしのあらすとも。いきてわかれし。母上をまいちと見せてたひ給へ 神は哥にかならず。なうじうましますなれは。こしおれながらはうだいの。ぐゑいをゝみて參らせむ なとされはなにはに捨し浦なみの。しづかもあらき。はまのなはたつ か樣にゑい

じ若宮へゑかう申されたりければ。なにとはしらずうしろより。人のよばはる聲はかすかにこそは聞えけれ。けいこの者これをきゝ。何事にやととひければ。しづかゝ母のせむじよばはる聲にてぞ候ひける。梶原きもをつぶし。奉書や下し給らむに。何ともぜひのなきさきにはからへやれつはもの。承と申てこしをちうになげおろし。しづかをとつてひき出し。がいせむとせし時。といの次郎ふさがつて。眞平かくてありながらもし。奉書や下給ふらむに。あはてて後の大事と。をしとゞめたりけれは梶原いとゝいかつてたゞがいせよと申。ぜむじは奉書これありとよばはりさけびはしれば。しつかは母の。聲と聞ておそしともたえこかるゝを物によく〳〵たとふれば。つみふかきざい人くしやう人のてにわたり。むけん大しやうのそこにおとさるべかりしを。六たうのうけのぢざうの。しやくぢやうを。からりと打ふつてかゝむかむみさんまいとよばはりかけすくひあげ。たすけむとし給ふも。是ほどそありつらん。心なきつはもの刀を捨てなきければさしもにたけきかけときも大聲あげてあげてなきにけり。さてこそ奉書。よみあけてしつかも母も諸友に。同こしにとりのり。きらくのゑみをふくめば。しづかは母に。すがりついて。是は夢かといひければ母はむすめにいたきつき夢とないひそうつゝぞ。さもあれあやうかりつる。わどせがけふのいのちとてはら〳〵となきにけり。うき時はたうり。なかすなみたはことはりや うれしき今の。何とてかさのみなみたのこぼるらん かくてしづかごぜんをばといの次郎にあづけらるゝ。頼朝よりの御諚にはしづかゝ胎内の子男子ならはてうてきにてちからをよぶべからず。女子の躰にてあるならば。はゝかたからとなすへしとかねて御下知くたる しづかもはゝももろ

ともに。都にありし時には。よしつねのわすれがたみにて御座ある間。男子に生れ給へと。いのる心を引替て。女子になれとぞいのられける。されどもかなはぬ憂世のならひ。玉をのべたるごとくなるわかぎみをまうけ給ふ。つゝむにたえぬはつ聲の。あたりのさとにかくれなし。梶原やがてきゝつけ源太をつかはし。御さむすでに平安に御座あるよしを承て。男子女子の御かたちを見て参れとの御諚にて候。景末まいって候と大音あけて申。しつかもはゝも諸友に。源太が聲ときくからに。あはうらせつの使のゑむまのせめをつぐるかときもたましゐもみにそはず。母のぜむじたち出なふいかに源太殿。女子をまうけてさふらふに。御やくそくのことくみつからにたへと申。景末聞て。何様一目見まいらせやかてかへし申さむといふ。しづかさん所をいて。源太にうちむかひなくより外の事はなし。七いろの嶋に。八いろのふねをかくすとやらん。申たとへの候そや。ともかくも源太殿殿をこそ。たのみ申さふらはめ。これ〳〵御覽さふらへとて。たまのやうなる若君を。いたきあけて見する。源太此よし見まいらせ。あらいつくしの若君や候。かゝるゆふなる御わかぎみを。わたくしにてはかなひ候まじ。御所中へ御供申御目にかけ。やかてかへし申さむと。たもとにつゝみふところにをし入。駒引よせてうちのり。ゆいのみぎはにいそぐ。二人は跡をしたひなふせめてなく聲今一度きかせてたばせ給へと。よばはりさけびはしれども。馬にはいかでおつつくべ。きあら情なし源太。ゆいのみぎはにて取はづしたる躰にてなみうちぎはにておとしけり いそうつなみ〳〵なく聲〳〵はま松をさそふ〳〵風の音 みにしみ〳〵とおもへとも。とりもとどめぬ事なれは。あたりにたをれ。ふしこがれ聲を。ならへてなけゝとも。源太はすこし

もあはれます。沖よりなみがどふときて。たまのやうなる御すがたを。落花のことくうちくたく其後むちを。しとゝうつて源太家にかへりけり。しづかもはゝも諸友に。ちりたるしがいをとりあつめ。たもとにつゝみかほにあて。なくより外の事はなし。しづかおもひにたえかねて。みをなけむと。せし時に。母のぜんじ。これを見て。たうりなり。ことはりやなにゝいのちのおしからん。われをもつれてゆけやとて。二人手にてをとりくむで。みをなげむとせし時に。折節ありあふ人々がすがり付てそとめにける。おもひきりぬるみちなれとも。心にまかせぬ事なれは。此人々の。しうたむはたとへむ方もなかり かくて日かずをふる程に。大名たちの北の方。しづかゞおもひさこそやと。其文かずはかずしらず。しづかもしゆせき世にすぐれ。源氏いせ物語をはうちをく文の言葉にもたゝ此心なりけり。御れうの北の御方。仰出されけるやうはうら山しやなしづかは。いかなるちゑのふかうして。女ののうをのこさすしつたる事のゆゝしさよ。それわがてうの女はやまと言葉をむねとして。哥のみちをしるし。そさのおのみことのやくもたつと。五のもじに詠し始給ひしはわかてうのまふり。花ほとゝぎす月雪はあだなる物とおもへとも。四季てむべむのむじやうをあらはす心なりけり。佛もたゞ此事を一大事とて。五十年ときをかせ給へども。しむなふかふして。とゞかぬ言葉なりけり。ふせつふかしぎ成ゆへたゝふかとくとばかりにて。ことばにはのべつくされず。爰をもつてまさしく。ふりう文字なるゆへ。ぶつそふでむと是をいふ。たとひうばそくうばいにてかたちは女なり共。さとりをうけば佛なるべし。かのしつか御前と申は。ないでむげてんくらからすしかもわかてうのふうそく和哥のみちはたつしやなり。いざやし

づかによりあひて源氏いせ物かたりの心をたづねむ。尤しかるべしとて。北の御かたを始奉り。靜が宿へ御出あつてうちとけあそばせ給ふ。母のぜむしもらうえひしもてなしかしづきたてまつる。かくてよろづをとりしづめ。北の御方仰出されける樣は。哥の不審さま〳〵おゝしと申せ共。源氏いせ物語のあふぎを委しる人稀なり。しづか御前の情にをしへをかせ給へと。仰いたされたりければ。しつが承て。みづからもいかにとしてそのあふぎをば知べき去ながら。心得てさふらふ程は申べし。抑いせ物語と申は。なりひらの中將の一生がいをかたるなり。かの業平と申は。へいぜいてむわうに第四の御子。あほうしむわうに第五のわうじこれなり。母はくわむむ天王に第八の御むすめ。伊藤内親王の御子。天長貳年きのとのみのとしむまれ給ふ。じゆむわ天王の御時。七歳にてわらは天上し給へり。ふかくさの御門の御時。春日のりむじのまつりの時。だいりよりれうのすがたにいてたつて。すきひたいのかふりをき。五せつのれいじむにたちしゆへ。しのぶずりのおみのころもをきたりしなり。又せうわ七年にうちの藏人にふせたまふ。これたかのみこの御時かたのゝみかりにあひぐせり。かの業平の中將。しやばのほうさんつきはて給ひ。大和の國山田の郡ふるの鄕在原といふ所にてみはかをてんじ給ふ。これまては業平のいつしやうがいを語なり。さても此物語を春宮の御所にて作られけるに。ふるざれ色の絹きたる男一人來つて。ゆゝしくも此物語を作り給ふもの哉。某も哥二首入むとありし時。いづくよりの御使ぞととひければ。其返事にはをよはすして神風や。いせのはまおき折しきて。旅ねやすらん。あらきはまへに おもふ事。いはてたゝにややみぬへき。われにひとしき。人しなければ。かやうにゑいじ

たちかへらんとし給ふ時。人々御たゝとにすかりつき。さも候へいづくよりの御使ぞと問ければ。是はいせと計にて。けすがことくにうせさせ給ふ。扨はうたかふ所なし。伊勢太神宮の。御使なりと心得て。此ことはりに。任せつゝ伊勢物語とは申なり。北の御方きこしめし。さてうゐかふりとはいかなるいはれにてざふらふそ。それはふかくさのみかどの御時。春日の臨時の祭の時。內裏よりりやうの姿に出立て。すきびたいのかふりを始て給りしゆへ。扨うゐかふりとは申さふらふ。それもはやこゝろへぬ。其外の不審は。ながめあかしつみをづくし。とぶほたる。ぬきすといふ言葉たのものかり。みのしろ衣ちいろのたけ。しのぶずり都鳥。此しな〳〵の不審は。いかなるいはれにて候ぞ。そのしな〳〵の不審は眞言の極ひじ。あばうむのたらに。あばらかけんのごもむごちの如來のしゆじとして。四季てんべむのしきさう。あめつちひらけはしめ。日月星の三くわう。有生非生のたねとして。ゐむやうふたつ和合して。四季てむべむの。色をなす春の色はあをけれど。何とて花はくれなゐのいろには出てひらくらん。夏のいろはあかけれは。照日もやかてこくねつす。あきのいろはうれひにて。虫のなく音はことはりや。冬されぬれはねはむにて。雪ふる山は白妙の是をしやうらうへうしの。四季さうさためなき事を。三十一字の哥によむ。此哥のすかたは。しやはせかいの人のみ。こくうと同事にて。佛と衆生。へたてなしされは。歌をよくよめば。神も佛もなうしうあつて。衆生もやかて。佛となると。ときをしへ申時。北の御方を。はしめまいらせつゝ其外の女房たち和哥のみちはくらからず。たうとくむじやうぼたいの。眞如の道に入給ふ。かくてうかりしかまくら。昨日けふとはおもへ

と。女房達の。情の。えさりかたきに。ほたされてふかくの。いみもはれぬへし（コトハ）大名高家さしあつまつて。さゝやき申されけるやうは。かのしづかゝ舞と申は。日本一の上手。それをいかにと申に。いむじやうわの夏の比。日でりおゝくつゞき。さうもくもこと〳〵くせいみやうのこるべからす。諸神諸山へ仰付。雨のいのりをし給ふに。なをしも日でりつゞき。かなふへきやうあらされは。此事天下のせうしとて。くぎやうせむぎまち〳〵たり（上色）夫龍神の腹をやすめ。神の心をとる事は。（コトハ）女の舞にしくはなし。たれか名人あるらんと御たつね有し時。こむゑの左大將すゝみ出て申さるゝ。たれ〳〵と申ともいそのぜむじがむすめ。しづかと申しらびやうし。ちゝはふしみの中將とて藤原氏のくぎやうなり。其子にしづか生年十六歳にまかりなる。舞は天下にならびもなし。これをやめされ候はんとそうし申されたりけれは（カヽル）あふもつともとぎせられ（中）。やかて（下）ちよくをたて。ないし所へめされ。駿河のまひをまひけるに。（上ツメハル）月卿雲客ひやうしをとつて。はやされたり。舞（下）の袖ひやうようし天人のかけることくなり。うたふ聲はさながら。かれうひんかのことく也。（上）きみをはしめ奉り。月卿雲客。（上）かむにたえさせ給ふ時。（下）てる日俄にかき曇。（ハヽル）とゞろ〳〵（下）となる神も。ひやうしに合せたりければ。雲へきらくにあつうして。しむの雨こそふりにけれ。此程てりし草木。一ちうの雨をそゝけば。みとり若葉となりにけりさてこそゞく葉はさかへ。ねはふかく末は雲ゐにのひあきは其身のまたき事。すむのいなつぶたまにして。しやくのほたけもなかかりき。臣もきみも。此舞をかむせぬ人はなかりけり（コトハ）かゝる名人たまさかにまれにもいかゞあるべきぞ。いかゞはせむと内談す。かゝりし時の折ふし。御れうの北の御かた仰出

されけるやうは。はゞかり多き事なれど。日本一の舞とやらんを一目見はやと仰けり（上クトキ）しつか承り。（下）まはぬとがめにふたつとなき。いのちをめされさふらふとも。まはしとこそおもへども（コトハ）きみが情のふかければまはではいかゞなむどゝ。したうちとけて申されたり。北の御方きこしめしうれしやまはせ給はゞ。わがみや殿のすきらうにて。神慮も諸人までも。目をおとろかすものならば。一は神のかいなざし。又はわがみのいのり。かれこれもつてめでたしと。仰出されたりければ。しつかもこのきにとうじ。吉日とつて若宮にてかいなざしとふうぶむす。すてに當日になりしかば。若宮殿のしやうめむに大將殿の御さじきに。まむまくをひかれたり。北の御方のさじきには。外にはみすをかけ内にきちやうをひかれたり。諸大名はことゞく。くわいらうと大庭に所せきなくなみゐたり。きせむくむじゆは中〳〵に申計はなかりけり（カヽル色）かの若宮と申は。うしろはやま前はうみ。さうにはのきをならべみむかの門家々。むねのかすおほうして太唐の。（上）みやうじうの津ともいつつへし。（上）あら面白の寺〳〵のろうもむはうむこむにさしはさみ。みねのあらしはまつにふき。みきはのなみはよせ。引てむしのざいごうをあらひけり。おきのかもめは海上の。白浪よりもたちゐけり（フシ）とうかく眞如のおきのなみほつしやうのきしをよせてうつ。大慈大悲の若宮は。（中）無明の闇を。てらさむとかくらおとこのしやうこのをときねがたもとになるすゝいつれをきくも。いさぎよく和光の。影そすゝしき（コトハ）しつかゞ舞のしやうぞくはちは殿の御役。笛はちゝぶの六郎殿。つゝみは公藤すけつね。かの祐經と申は大内に門やくのありし時。つゝみをうつてめいようす。きうろうきむ中のひやうしにたにもあはてたりしつゞみにてさゝるゝもたう

り下むさしの住人に中ぬまの五郎はとひやうしのやくなり。しつかはこれに。はやされて何の情にかまくらにて。舞まふべしとおぼえすと。たもとをかほに。をしあててなくより外の事はなし。母のぜむじ是を見て。いかなる事ぞしづか御前。かほど目出度御さじきにて。舞まはぬ程ならば。きみのとがめをいかゝせむ。庭ばらひざふらふとて。さきにたつてぞまふたりける。本より舞は上手。かたくれしほりはきをうたひすましたりければ。しづか此よし見るよりも。あらいたはしや母御前。何にこゝろのなくさみ。かやうにうたはせ給ふそや。これもたゞみづからを。たすけむための舞そかし。それにみつから只今。物うき心のあるまゝに。舞まはぬ程ならば。母のとがめを。いかゞせむ。まはばやとおもひて。うちきぬのそてひきつくろひ。はかまのおびをさしはさみ。たち出たりし心の内。さこそやとおもひしられたり。みわせは。れき〳〵とさせられたる人〳〵に。和田ちゝふ殿江戸かさい。ちは小山うつのみや。いづれか日比わかまゝに。ふるまはさりし人やある。義經のつまとありし程は。大名高家おそれをなし。舞まはせて見るまては。おもひもよらでありつるか。きのふは人を。したかへつゝ。けふは人にしたがへり。天人の五すひのけうさめぬると。おもへはよ。その見る目もはづかしや。はつかしなからしつかこせむ。時のしうけむなりけれは。きみをはしめて。おかむには。ちよもへぬへし。ひめこまつ。とうたひすましたりけり。かたちは日本一なり。聲はたゞかれうぐひすかみやうのひゞきなりけり。うつもふくもみなじやうず。ひらりとあくるかいなに。天人もあまくたりふみそろへたるひやうしに。地神もうこくばかりなり。入まひになりけれは。しつやしつしつがをたまきく

りかへし。むかしを今に。なすよしもがなとうたひすましたりければ。みすもきちやうもざゝめき。おめきさけぶ所に。頼朝みすをおろさるゝ。故をいかにと申に。しつやしつしつがをたまきくりかへし。むかしを今とうたふたは。よしの山でわかれしよしつねをしたふ所。それは頼朝見ぬ所。ちゝぶ殿申さるゝむかしを今とうたふたはごていのむかし今にき。代はおさまるといふ所。目出度おほえ候に。みすを上られ候はで。いかゝと。申されたりければ。御領げにもとおぼしめし。みすをさらりとあげ給ふ。しづかはこれを見。こくらくじやうとのたますだれ。かむじゆまむしゆのたまのはたあくれは。いよ〳〵光ます玉躰つゝがなふして。あめが下こそ。のどかなれと。三遍ふむてまはれば。みすもきちやうもざゝめきほうしやもゆるぐばかりなり。頼朝かむに。たえかね給ひ。おどり出させ給ひてともにかいなをさし給ふ。大名高家。庭上にころひおち。聲をあげてぞおめいたるさてしも舞はおさまりぬ。きみよりの御諚にはするがの國かむばら。八十余町たひにけり大名たちのほうろく。たからの山を前につむ。しつかは。いよ〳〵これにはぢいつその程にまひまふて。ほうろくにほこるべきかへせばおそれありやと。鎌倉内のみややしろみだう寺にきしむし。義經の御いのり又はわか子のためにと。ひとつもみにそえず都へとてそのほりける

とかし

（大頭左兵衛本）

去程に判官山伏の姿をまなび。下らせ給ひける程に。十三日と申には。加賀の國に聞えたるあたかのまつに程なくつかせ給ふ。判官松を御覽して。あらゆふちやうなる姿哉。四國西國都にて。其かずまつを見てあれど。かほどゆうちやうなるすがたはなし。名のなき事はよもあらし尋てまいれむさし。弁慶承つて。まつのあたりを見てあれば。わらんべ四五人まつのはよせてぞゐたりける。弁慶すゝとたち寄て。やあいかにわらんへ。此國にて此まつをばなむのまつといふそ。こさかしきわらんへすゝみ出て申す。さむ候當國は坂をへたてこなた。くさふかき遠國にてかほどのまつに名付る人も候はす。去なから在五中將のなかめには。あたかのまつともよまれて候。それのみならす鳥羽院の御内なる。佐藤兵衛教清は。うはの空なる戀をして。北國修行に出るとて西行とかれはなのる。かの西行の哥には。ねあかりのまつと。よまれたり客僧と申けり。判官聞しめされて。物聞給へかたゝ。勸學院のすゝめは蒙求をさえつる。智者の邊のわらんべは。ならはぬ經よむとは。よくこそこれはつたえたれ。こさかしきわらんへに引出物をとらせ。是よりおくひらいつみへの順道を委とへ。弁慶承つて。笈の中よりも色よき扇とりいたし。わらんへともにとらせ。やあいかにわらんへ。

是よりひらいつみへの順道は。いつくをとなたへ行そと委尋とふ時に。こさかしきわらんへすゝみ出て申す。さん候是よりおゝへあまたの道か候か。いつれも是は難所也。先下道の難所を。かたらは聞しめさるへし。くろべは四十八ケ瀨。おやしらす子しらす。一ふりしやうどうたのわき。二三のはざまもがみ川。あねはのまつ〳〵かめわり坂と〳〵申つゝ。四十二所のめいよの是か難所也。少人もおはしますがいかてか下給ふへき。さて上道の難所は。都のはるは過行と。こしちの雪がまだきえず。去年の雪の村きえにことしの雪のふりつもり。谷の下水おちあひて水かさまさり。鳥羽らてかよふへきやうさらになし。中道と申は。道も順道にて。人の心も慈悲なるが。爰にひとつの難所あり。鎌倉殿よりも。此國のとかしとの。觸狀か下つて。城墻をかまへ。山伏の禁制こはくして。おとゝいのくれ程に。九人とをる山伏を。判官殿のおつれとて。をさへて切てかけられたり。昨日の早朝に。六人とをる山伏を。五位殿のおつれとて。これをも切てかけらるゝ夕部も五人きらるゝ。けさも三人きれてさう。かほとなる難所をいやたしやうこうはふるとも。いかてか下。給ふへきなふ客僧と申けり。判官聞しめされて。さては某一人故によつて。ゆくゑもしらぬ山伏たちのさやうにいか程もきられさせ給ふ事よ。ゆきてとふらはばやとおほしめし。五人のわらんべ共をさきとして。松原にいつてみ給へは。去年の冬の比よりも。二月下旬まて切かけたる事なれは。百ばかりほとまつしぐろにかゝる。十三人の人々は。れいしせむほうをたつとふあすばす。其中に弁慶。せむぼうをばよまずして。爰かしこをはしりまはつて。首を披見し。五人のわらんべをはつたとにらんて。此國のとがしは何もしらぬといふ。わらんべ聞て腹をたて。

此國のとがしどのゝ物しろしめされぬ謂はざう。弁慶聞て。いで〳〵富樫が物しらぬいはれをかたつてきかせむ。亂行ふぎやうの大ぞゝの首を上にかけ。鬢髪をまろめ。げたつとうさうのしゆ〳〵の。法衣をみにまとひ。法戒道場にし みろくの出世 生れをなさうす法師の首はるかの下にかけたるはさて物をはしらいてかけぬかれ。わらんべ聞てうちわらひ。横手をちやうとあはせ。あふいはれたり客僧。それをとかめ給ふか。上にかゝつた俗の首にあまたの短冊付られたり。むかふばそつてさるまなこ。こびむのかみのちゞんて。色の白きをは鎌倉殿の御舍弟に。源九郎よしつねの。御首と號して。遙の上にかけられたり。又下にかゝつた法師のくひにあまたの短冊付られたり。かふ申てあれはとて。腹ばしたゝせ給ふなよ。御坊のごとくにあくまてせいはたかふて。極て色はくろくして。またこにくじをもつたるが。物いふたるこはつきの。ぎごつなき法師をば。判官殿の御内なる。ひさもとさらすの西塔の。弁慶と號して。遙の下にかけられたるそ。御坊といひければ。さしもかうなる むさし坊か。わかみの上と聞なしてひさふるうてたつたりけり 弁慶心におもふやう。あらうれしやさてはとかしは。某か面はよくも見しらさりけるや。其儀にて有ならはなにかし一人打越。とがしが城の躰を見はやとおもひ。君の御前にまいり。いかにわかきみ聞しめされ候へ。先それかし一人とかしがたちへ打越。城の躰を見てまいらんと申す。判官きこしめされて。心かはりかむさし。心かはりにをよふならは。都の土とはなさすして。北國の道芝となさむ事こそ口惜けれ。弁慶承つて。こはくちおしき御諚哉。かほと山伏きむぜいの所を。一人ならず二人ならず。十三人がばめいてとをり。あやしめられてはいつかにちむずるともか

なふまじ。先なにかし一人打越。とかしが城の躰を見むずるに。見おふする物ならは。山伏の法にてある間。よろこびの貝を二つ三つふかふず。又見損する物ならば。最後の貝を。たゝひとつふくへきなり 貝ばしひと たつならは。すはやむさしめが。最後そとおほしめし。北かたの。みまむたうにて清き自害おはしませ。暇申てさらはとて。たちはなれむとしたりしか。おもへはこれか最後なり。はうはいの人々に名殘やおしくおもひけむ。かめゐかた岡いせ駿河。まちかきさまにちかつきて。いかにかた〳〵むさしめ一人富樫かたちへうちこえて。城のけこを見そむじたらは。弁慶が腹きらふず。君御腹をめされなは。四手の山にて待申さむ。あふかた〳〵さきにも腹を切ならは。三途の河にてまち給へ。暇申して。さらはとて名殘おしけに出にけり 去間弁慶は。ひだのたくみがうつすみなはにてあらねとも。唯一すちにおもひきつて。藤づか手どり打過。さしも待かくる富樫の舘へ入たるは人にかはつておぼえたり。山伏の法にて有間。れいじせむぼうをこそよむべきが。なにとかおもひけむ。高念佛申。あけつち門よりつつと入。富樫が城の躰を見てあれは。まつほどにそこしらへたる。面の矢藏十三所。わきのやぐら九所。二重三重に高やぐらをあげさせ。東面にくらをき馬四五十疋ひづたてゝをひたりけり。わきのとをさふらひ見てあれは。富樫の若黨百人はかりなみゐて。ひきめくつたり矢はいだり。碁將棊双六に心をいれたる所もあり。着座を見てあれは。四十計なる男の。狂紋のひたゝれき。烏帽子のざしきたむぶ〳〵とあげさせ。ぶむどうにかゝつて。若侍に双六うたせ。助言してゐたりけるは これそ此國のあふ富樫の助とおほえてあり。あら口おしや時こそあれ日こそあれとかしの出たる所へ。な

にかし來つたるは。つめたるこうとおほえてあり。しのははやとおもひしか。見えたる事もなきさきに。かたきにけごを見えられて。あしかりなむと存れは。一くわむびきの聲をば。六てうしにさし上て。熊野山の山伏か佛法修行の其爲に。出羽のはぐろへ通り候ときれうたべとこふたりけり。富樫これを見て。もつたる扇にて。たゝみのおもてを。ちやうとうつて。あれを見よ人々。愚人夏のむし。とむて火にいるとはよくこそこれはつたえたれ。心をつくして待かくる。西塔の弁慶こそ。唯今來つたれうてはれ搦よいや。さしなはなむとゝひしめいた。もとよりむさし。わかみの上とはしつたれとも。きかぬ躰にもてなして大木枯木の花ながめ空うそふいてたつたりけり。時刻もうつさすとかしの若黨百人ばかりまつくろによろひ。むさしをまむ中に引籠たり。弁慶是を見て。はやりうのわかものにひし〳〵とうちとられかなはしとおもひ。とがしのゐたる縁のはなへづむとあがり。大の眼にかとをたて。とがしをはつたとにらんで。いかなるやじんちやうぎやうの者をめしをかれ。唯今參りたる法師まで。うき目をみんするやらむと存所に。よく〳〵承つて候へは。此法師がみの上と聞なして候がひか事さうかとがし殿。富樫聞て。扨は御坊は。判官殿の御内の。ひさもとさらずの西塔の弁慶にてはなきか。えゝとこにざう。それ山伏の名はよのつね多しと申せとも。判官坊ひざもとさらずなむどゝいふ山伏の名は。今こそ聞て候へ。富樫聞て。さやうに才覺まはつて。べむせつの明らかなるはさて弁慶にてはなきか。武藏聞て。さいかくまはつてべむぜつの明らかなるが弁慶ならば。さの給ふ富樫殿の。才覺まはつてべむぜつの明らかなるは。さて御みも弁慶か。富樫聞て。いやなにともちむぜよたゝ弁慶と云。武藏餘にちむじか

ね。若かふ申法師かひたいに。弁慶といふ字ばしすはつてさうか。あふ字のすはつたと同し事よ。かまくら殿よりもたむじやうの有うへうたかひあらしといふ。むさし聞て。よもたむじやうはあらじたばかり事よとおもひ。支證のあらば見むとこふた。あらむざんや弁慶が。いく程いのちなからへむとて。たんじやうこふつるやさしさよ。それとりいたして見せよ。承と申て。富樫が若黨四五人。ざしきをはらりとたつて。八尺屏風をとりいたし。むさしかまへにさつとたて。繪圖をさらりとなげかけ弁慶に見する〳〵うつしもうついたりかきもかいたる畫師かな〳〵むさしがたけは〳〵六尺〳〵二ふむ。繪圖も六尺二ふむ也。いろくろくたけたかく。眼のにくしをうつひてあり。剰はむさしめか。左のまなさきにあさのあるまて。うついたはのがれつべうはさらになし。むさし今は言葉をかへてちむぜばやとおもひ。なふいかに富樫との。以前に此法師熊野山伏と申て候は。御みの心をちつとひきみ申さむため也。これこそ南都東大寺の。勸進ひじりざうよ。とがし聞て。あふたつとうさう。南都のすゝめにて御坐あらば。勸進帳はおはすらむ。おがまむとこわれたり。むさし南都のすゝめとはのへたれども。勸進帳があらはこそ。もたぬといはゝ棒うちに打ふせられうず。もつたといはゝあらはこそ。ぜひをむさしわきまへかねてたつたりしが。いや〳〵もつたといはゝやとおもひ。おろか也とかし殿。三國一の大伽藍の。すゝめをせうする聖が。勸進帳をもたてはいかで候へき。是非見參にいれむとて。笈をひたとおろし。からげなはふる〳〵とひつといて。上たむに手をいれ。からり〳〵とさがしけれとも。都にていれざる事なれは。笈にはさらになかりけり。むさし餘のくちおしさに目をふさぎ南無や八幡大井。けむじの氏子

をは。百王百代。まほらんとの御ちかひと承りて候そや。ひとつの瑞相を。見せしめ給へやとからり〳〵とさかさるゝ。實や八幡大井の。あたへたひけるか。自然の往來の。まき物一卷候ひけるを。おつとりてさし上て。勸進帳はこれにありおがみ給へと見せにけり（コトハ）富樫是を見て。さあらばこれへたへおかまむとこはれたり。武藏此勸進帳がまことの勸進帳ならば。いつかに富樫かおかむましといふとも。をさへておかませうするが。これは自然の往來。あやしめられあしかりなむとおもひ。をろか也富樫との。辱も十善帝王だにも。かふりのこじをかたふけ。おがませ給ふ勸進帳を。いはむや御みは大俗のみとして。手に取おがむ程ならは。五躰すくむてたち所にてあやうししとおどす。とかしむさしにおどされ。さらばそれにてあそばせ。これにて聽聞申さむといふ。むさし此勸進帳をよみおふせむは不定。よみそむぜむは治定。讀損する物ならは。人手にはかゝるまし。あれについてたつたる。しらえの長刀ひむばうて。とむでかゝらむ若ものを。おもふさまにをつはらひ。あれにひかへたつたる。あしげの馬の爪かたさうて。いつかにかけあしのはやかるらん。ひむばうてうちのり。みまむだうにまいり。君にかくと申。一の刀にて御前害し奉り。むさしめ腹をきらふす。君御腹をめされなば。十一人の人々も。みな〳〵腹をきらふす。いきてはこうをなさずとも。死てはこうをなすべきなり（カヽル）日比吾君の。七しやうまでとちぎりをかせ給ひたる。あたこの山の太郎坊。ひらの山の次郎坊。山々の諸天狗天王やい神。八しやう神。どつ馬頭あはうらせつ。異形異類の鬼ともを。引具し候て。本望なれは關東へ。せつなか間にみたれ入て。箱根山の峠より黑雲をたなひき電光をとばせ。たまをみがく鎌倉に。しやぢくの雨をふらし。

やつ七かふをあらひなかし。にくかりし梶原を。さうなくもころさすして。百鬼神に仰付。ねつてつのゆをわかし。口の内へなかしいれ。六腑五臟をやきはらひ。七代子孫をとりころし。本望をとくるならは。菅丞相にはあらねとも。あら人神とむさしめか。あをかれむする事ともは。あむの内とおもひけれはちつともさはくけしきなし（コトハ）武藏此勸進帳をたかく持てよむならば。うしろなる人によまれうず。又ひきくもつてよむならは。かみがうすふて字がとをり。まへなる富樫に一字成ともそれはといはれあしかりなむとおもひ。六尺二ぶむの弁慶が。七尺ゆたかにのびあがり。しらうちての笠を。つかふにきつときなし。字ならはふたくたり三くたり（下カヽル）そつとひらいて。双眼にをしあてて。なにとはしらねとも。敬白とあけたりけり。敬白勸進の沙門こう件のちしきの狀にいはく。和（下）州山科のさと。東（マヽ）太寺の。勸進の事を。ことに十方旦那の助成を。かうふらむとほつす。右のしいしゆ。いかむといふに。かの伽藍のらむしやうは聖武。天王のきさき。光明皇后と申は大織官の。御むすめ。正心の觀音なり。しかるに雨露のしやうがいは。あゆみをたがいにかくる尺尊又双林の煙と。のほり給ふ。然るに御門きさきの。御わかれたえにして。雲上に曇あれは。月卿光を。うしなへりかの追善のために。一宇の伽藍を建立し給ふ今の。大佛殿これなり。御堂のたかさは二十丈本尊の御たけ。十六丈とをく異朝を。尋るに大唐四十八ケの。大伽藍にすくれ。天竺祇園精舍にも。こえまして。吾朝にならびなし。されはしやうどむ。七寶をちりばめくわうようらむけいをみがき。みたうの内に珠玉をかざり。瑠璃のかべ硨磲のたるき。瑪瑙のゆきげた。はりの柱本尊は金銅るしやな佛。ならびに四天はこかねをのへ。十一重のやうらく。

こうむがの。風にみたれ。花せうゑむの玉のはた。かゝる無双の。大伽藍に雷火ふつて火灰す破滅の時にあひたかはす。爰にふかくさの御門の行さう。五ちのささみに。合力し。こと〳〵くみかき給ふ。これはこれ王法の繁昌也。王法の繁昌は。天下の吉慶たり。めでたかりける。おりふしに東大寺。興福寺。兩寺の間に衆徒喧嘩いたしたがいにはめつの。火をはなすまことにまゑむの。しよいをなし。煙庭に。とむで落雷火雲をはしれは佛像。跡をけづり。五時の箱やけ八敎の軸も灰となす爰に女躰のみかとのぎやうさう。勸進の力を。はげますとはいへども三代御願も半作なり。目出度かりけるおりふしに爰に平家の大相國惡逆の下知に。したがつて本三位の中將重衡左衛門知高民部重善つかふ其勢三千余騎。治承四年十二月。廿八日。南都へはせむかふ南都の衆徒。ふせきたゝかふとはいへと法末世につき。かたしけなくも二階の總門輾磴の門に放火をせしむ。かのみやうくわ。みち〳〵て堂塔。僧坊神社。佛神のきらひなく一ちうものこらず。やきはらひおはむぬ。煙うちやう。天にあかり。雲となつてあらそひけれは十六丈の。るしやな佛の。みくし落て塚のごとくこしむはわいて。山のごとしこむしむ世界の。しやうごむをうつし。たてまつる東金堂。西金堂刹那か内に。やきはらひおはむぬかなしきかなやおむあひへつりの生死の輩かれを見是を見るにいつをか。ごすべきぞ御眼は。しかとなつて。春日山へとひ入給ふ。比丘も比丘尼たうそく男女の。きらひなく大佛てむの名殘をかなしみ煙の中へ。とひ入〳〵。やけしするものは。かすしらす。阿難譜續のれいちのけさ灰燼となつて地にふまるゝ行こうほろひ荊曲たるこそたへの露。ぜう〳〵たり。たま〳〵のこりとゝまるもの。ししやうきやうていの門にたちよ

りしはらくはねをやすむる。爰に俊乘坊ひじり善請坊。春日大明神の。御示現をかふふりくわむじん帳を額にあて。おほそれ〳〵 法皇の御方へ訴狀をあけらるゝ。法王ごむじつをはこばせ給ひ。肥後肥前。筑後筑前豐前豐後日向大隅さつま九國を。よせらるゝ。女院の御方より。伊与讃岐あはとさ。四國をよせられたり。四國九國よりかち千人番匠千人杣千人三千人。春日山へ。わけ入て材木を取て淀こつ河へくたす事。おひたゝしゝかの大もつ。小もつといかにとして。地形の面に引付べしとなけきかなしみ。かつがふのなむだ肝にめいじ。三寶のめくみにより。大國より。ちしやのうしか來つて。一日一夜に引付て牛大國へかへりけり。日本仁よろこひ。地形のおもて。御堂のたかさは二十丈。本尊の御たけ十六丈。かうは八丈多門持國增長廣目。百余膳のふむつくへ。鈴獨鉆花さら。本のことくいたてまつるさりとはいへと御堂のくやう佛の供養かねのくやう三供養をまたのへす。此くやうをのへむため。六十六人の。さても小聖。六十六ケ國へをの〳〵まはて。すゝむる所の勸進なり一帋半錢に。入たらんするともから。今生にては安穩けらくの。德をかふふり。來世にては。ぐせいのふねに棹をさし。千ようの蓮花にたはふれむす事はうたがひあるべからず。南無歸命敬とよみあげ。くる〳〵とひむまいて。本の笈へなげいれた。むさし坊がありさま人間の藝てなかりけり

笈さがし

（大頭左兵衞本）

武藏坊弁慶は。とがしの舘にて。勸進帳奉加帳を。ことゝくよみ上ければ。とがし能々ちやうもん有て。誠にしゆせうや候。南都のすゝめにて御座有けるを存申さて。一時なれども白すにたゝせ申つる事よ。さこそ佛神三寶も。われをにくしとおぼすらん。それ〳〵こなたへ申せとて。弁慶をでいへしやうぜらるゝ。武藏あむどのおもひをなし。今はこゝに笈をゝかはやとおもふが。いや〳〵しれたるものに笈さがされ。あしかりなむと存れば。笈かけながら座敷にむずとなをる。とかし御覽じて。少勸進にて候へどもとて。まきぎぬ五十疋むさしが前につませらる。とがしの北のかたも。まき絹三十疋むさしが前にをかせらる。其外心ざしの人々は。武藏殿が前に。寶の山をつむ。弁慶これを見て。あらおひたゝしの御奉加共や候。たゝ今給りたくは候へども。これよりおくへあまたの難所の候へば。こうする三月みやこへ付てたべと申。富樫ぎひて。あふやすき間の事。京は何條ととはるゝ。むさしいつもいひ付たる事なれは。都は三條かはらさきの。弁慶か宿へ付てたべといはむと心ざして。あふ都は三條川原さきの。弁といつしがあつとおもひ弁僧の御坊へ付てたべとぞのへにける。さらはおいとま申すとて。たがひに暇をこひこはれ。とがしの舘をそ出にける。みまむだうに。まいりてきみに。かくと申ければ。武藏殿にてなかりけり。たゞ八幡の。御けむけとて御手を。合せ給ひけり其夜はみやのこしさらたけの大明神に一夜のつやゝ申。夜籠て出給ふ。みや人申けるやうは。越中へのお下向は。おもひもよらぬ事にて候。それをいかにと申に。くりからがたうげには。となみの十郎か。七百余騎にてさゝへ。山伏を通し申さず。下みちの間をば。加賀と能登の堺を。しほの小大郎かふさぎ。さら〳〵山伏をとをし申さず。越中への御下向は。おもひもよらずと申。弁慶きひてはまに下り。もし能登の方へ下るふねやあるとぞとふたりける。折ふしのとの國。すゞのみさきへ下るふねこそ候ひけれ。天のあたふる所とて。このふねにびむぜむし。其日の内にのとの國。すゞのみさきに程なくつかせ給ふ御舟よりもあがらせ給ひ。みぎはの岩に腰をかけ。あたりの山を御覽ずれは。石岸がゝとそびへ。風ちゞんたる万木は繪に書たるがごとくなり。西の沖ははてしもなく。さうかひ雲をひたし。ろかいをわたるこしぶねやなみまゝ。かづきうきしづむ。水にはふれてとふかもめ。汀の岩に。なみかけて底あらいその岩間にも。くだけて見ゆる。うつせがい。人の心はあらいその。かたおもひなるあはひ貝みるめ。なのりそとらんとて。あまともうみに。おりひたりかつきのためにうきしつむ去間弁慶は。とある岩間よりもにしにみるめのついたるを。取あげて御前にまいらする。にしはいきてうごきけれは。みるめもともにぞうごきける。判官御覽じて。御前みやこにましまさば。いきたるみるめをはなにとしてかは御覽すへき。遠國のはてにても。義經かとくにより。かゝる見いよのもてあそひを。御覽するよと仰ければ。御前とりあへさせ給はす都より。なみのよるひる。うかれき

て。道とをくして。うき目みるかな　判官きこしめされて。あら面白の御ゑひかや候。いて〳〵義經も御返哥申さむとて　下野　うき目をは。もしほと友にかき捨て。よろこひとなる。すゝのみさきや　此哥になぐさみて。今はふなぢのたよりもなしと。はる〳〵のまはりをして。越中へこそあゆまれけれ。いそづたひ山づたひ。たえ〳〵ほそきたにのみち。順道なれば石動山をふしおかみ。くだらせ給ひける程に。越中の國にきこえける。ろくどうしのわたりにつかせ給ふ。ふねにのらんとし給へは。渡守が申やう。此渡りと申は。南都ざうゑいのためなり。ちむなくはわたすまじひと申。弁慶きいて。いかなる關〳〵津とまりにても。山伏の法にてちむといふ事はなきぞ。たゝわたせと申。ちむなくはふつつと渡申まし。其儀ならば是よりおもどりあれと申。ちむはなしいそがはしゝ。ちさむせば跡よりも。いかなる事か出來なむと。御前のくれなゐのちしほのはかま取いだし。せむはうつきてふたちむに。これこそあれとてたひにけれ。是はわれらが見しり申さぬ物にて。ちつとふそくには候へとも。さらばわたし申さむとて。ろくどうしをこきわたし　カヽル　はうしづ　マヽ　をあゆみ過〳〵いはせのわたり〳〵けふもはや　フシ　うちての宿と。うちなかめ。おとをりありし所に。旅人あまたゆきあひて。是よりおくへのみちすから。少人を。あゆませ申ていかてか下。給ふへきなふ。客僧と。申けり　コトハ　判官きこしめされて。さてそれは關〳〵のふさがりか。いかなる事のあるやらんと。御たづねありけれは。旅人申けるやうは。いやみちに關も候はす。此國をゆき過。越後との堺。にぐるはまおうはま。おにぶし落合なむどゝ申て。あまたの難所の候。惣而くろべは四十八ヶ瀨　ゝ　時しも春の。末なれは　同ノシ　こその雪の付きえに。今年の雪のふりつもり。

谷の下水おちあひてみかさまさりて。鳥ならてかよふ。へき様。さらになし　コトハ　判官きこしめされて。便船のたよりもあれかしと仰けれは。折ふし越後の國。なをいのつへ下る舟こそ候ひけれ。又此ふねに便船し。越後の國なをいの津に程なくつかせ給ふ。御ふねよりもあからせたまひ。なをいの太郎が宿所に。一夜の宿をかり給ふ。此浦の人々。一つ所に指あつまつて。內儀評定するやうは。抑此浦は當國のこう。善光寺へまいるみち。そうじてあまたのみちつじ。見もしらぬ山伏たち。せい〳〵つかせ給ふは。もし判官殿かあやしや。いざ〳〵とがめ申さむとて。我とおぼしき浦の人。七八百人さしあつまつて。ゆみやをたいしひしめいたり。御宿の女房。情のみある人にて。弁慶をまねき。さゝやき申ける様は。あらいたはしや山伏たちを。判官殿とてからめとり。鎌倉へまいらせむするとて。只今大勢そつしてむかふなりと申。弁慶聞てうちわらひ。あふうれしくもきかさせ給ふものかな。われらは羽黑山の山伏にて。別に子細はよもさうじ。御心安おぼしめせと。さあらぬ躰にもてなし。さて判官の御前にまいり。此よしかくと申　上サシクトキ　義經きこしめされてこはいかによしつねは。いかなる月日生れけるそや。天にごうのあみをはり。地にさかもきの關をすへ　フシ　五尺にたらぬ。きやうかいをかくし。かねたる。口惜や　コトハ　口おゝくしては詞のあやまりもあるへし。御邊たちは山伏の。みねのこぎとるにまなびして。上の山に入給へ。よしつね一人のこりゐて。問答してみむずるに。ちむじそむずるものならば。あいづの貝をふかうず。其時おりくだつて。友に腹をきり給へ。けに〳〵御諚尤とて。十一人の人々は。かたはらにたちしのぶ。其跡に浦の人々うむかのことく押よせ。大音あげてよばはるやう。鎌倉殿の御舍弟。大夫

の判官よしつね。此浦へ付せ給ふと承り。鎌倉殿の御代官に。なをいの大郎(マヽ)か參りて候。はや〳〵御いて候へ。かまくらへ具足し申さむと。聲〴〵によばはる。義經聞しめされて。何とざう判官殿とはいづくにまし〳〵候ぞ。あふ去事あり。いつぞやの事かとよ。平家をせめさせ給はむため。おくよりも打てのほらせ給ひしを。羽黒の片原にて。そと見まいらせて候が。判官殿ならは只今も。千騎におとる事はよもさうじ。やはかか程の小勢にてかなはせ給ふへきそ。山伏共に具足たべ。一夜の御宿の情に。ていの殿の御供し。一方ふせくべしと仰けれは。浦の人々これをきゝ。もつての外にさおひして。あきれてこそはたちたりけれ。なをいの太郎が申様。判官とのと申は。せいちいさういろ白く。むかふばそつてさるまなこ。あかひげにましますと承るが。只今さやうに物仰らるゝ御坊のぎやうさうちつともたかはず。判官殿におひては。うたかふ所もなし。はや〳〵御出候へ。鎌倉へ御供申さむと。聲〴〵によばはる。義經きこしめされて。あらうれしやついてをもつて音にきく。かまくらとやらんを。見てとをらふずるうれしさよ。とく〳〵つれてゆき給へ。浦の人々是をきゝ。いや〳〵さもなき山伏たちを。判官殿なりとてからめとり。はる〴〵と鎌倉まで具足したりとも。さしたる高名はなくして。山伏どもにのろはれ。よかりつべうもおぼえず。所詮は笈を給はり。中をひらいて見むずるに。誠の山伏行者ならば。山伏の道具あるべし。又そら山伏にてあるならば。山伏の道具よもあらし。おいをたまはれ中を見むと。聲〴〵によばはる。判官力に及ばせ給はず。八ちやうのおいを取いだし。浦人にわたし給ふ。浦の人々八ちやうの笈をとりてゆき。中をひらいて見てあれば先一番の笈にはごむごうかいのまむだら。た

いざうかいのまむだら。ごまのしだひしよそむの法。かずをつくしていれにけれめぐらしぶみかあやしやと。うたかひ申所に。くがみの寺よりも。法師一人來つて。こと〴〵くおかみしつて。あしくしてばちあたるなと。て本のことくにとりおさむる。二番のおいの中には。けむみつ二しゆの法。しやつけうのとめひあり。これもかたじけなしやとて。本のことくにとりおさむる。第三番のおいには。さむごとつこれいしやくぢやうくわしや花ざらを入にけり。四番のおひの中には。五大尊のれいざう。不動かうまのしよてむ。本尊のかずをつくしたり。五番のおいの中には。へむちやうがむもむ往來。かなまむなの手本。弘法の御自筆。たうふうがふるひふて。秘本のかずをつくしたり。しるもしらぬもをしなへてたつとしと申つゝ手をあはせぬはなかりけり笈に子細のあらばこそ。いざもとらむと申す。なをいの大郎(マヽ)が申様。一切のわさが。そつじにてはかなはぬものぞ。のこりたる笈を。たがためにのこしをきたるぞ。みなさがせと申。げに〴〵これもいはれたりとて。つぎなる笈をとりて行。中を披て見てあれば。あらいたはしや判官の都よりもたせ給ひたる。もえぎ匂ひの御はらまき。こて小具足をとりいだし。是も山伏の道具ざうか。されはこそ判官殿よと聲〴〵によばはる。判官きこしめして。さては面々。當國の諸山寺の山ぶしたちを見ならつて。羽黒の山伏の禮儀をばしろしめさぬよなふ抑(上色)羽黒山と申はゐむのぎやうじやのこけのみち。山伏のひしよたり。爰に衆徒となづけ。わかまゝにふるまふかたあり。山伏是をそねみて。しむいのいかりたえせず。これによつてぶくきうせむをもたぬ法師かさうばこそ。此邊にもあはよきうりぐそくやさうごひけいあれ。そうじて山伏のかつちう持事。しよはうに

かくれさうばこそ。あらせけむせばや面〳〵。浦の人々これをきゝ。げに〳〵これもいはれたりとて。又次なる笈をとりてゆき。中を披て見てあれば。あらいたは　や御前の都よりもたせ給ひたる。五尺のかづら七尺のかけおび。唐のかゝみ。十二のかけご入たりし。手箱なむどをとりいたし。是も山伏のだうくさうか。あらしゆせうとおこなひすまさせ給ひたる。山伏の道具ざうや。さればこそ判官殿よと。聲〳〵に申。判官ちつともさはがせたまはず。あふ面〳〵の不審尤理なり。さりながらかけおびかづらしやうぞくのゆらひは。此法師がおばごにてましますは。羽黒の權現の一のみこたるによつて。いまむかふ三十かうのみこしの御供申さむため。都へあつらへてかひくだし給ふなり。さてまたかけご手箱しやうぞくのゆらひ。越中の國みづはしを通し時。水橋殿のひめぎみの。きやへいをつよくいたはりて。ぞむめひ不定におはせしを。此山ぶしの中に。げむじやの上手あるにより。七日留りかぢし。たちまちげむにつけ申。これによつてざいほうを　本尊の前にとりかくる。おぼつかなくは。使者をたて水橋へとはせ給ふべし。浦の人々これをきゝ。さやうに御のべあらんには。いづくにつめがさうばこそ。御みにても候へ。同行にてもましませひ一人たまはつてかまくらへ具足し申さむと。聲〳〵によばゝる。判官ちからに及せ給はす腰なる具をとりいたし。ふたつみつふき給ふ。具の聲たにしつまりければ上の山にかくしをく人々に。武藏坊弁慶。ひたち坊かいぞむ。かめゐ片岡いせ駿河此人々を先として。打刀まさかり。面〳〵にもつてみたれ入て。何とてわ法師は。貝をばふくぞ。夫山伏の貝ふくは約束かあつてふく物を。さうなく貝をならす事。ひがことなりと申つゝ義經を中にとりこめたり。判官きこし

めされてなふしつまり給へ面〳〵此浦の人々がこの法師一人とりこめて。判官になれ。義經になれと仰あれともうぢもしゆじやうもなきにより。ならじと申候を。たゝなれ〳〵と。仰候程にあまりせむはうつきはてゝ唯今の貝をはふいて候御免あれやと仰けり。弁慶が是を聞さてはきたひな事かな。羽黒の方の山ぶしによしなき事をいひつけ。判官になれ。義經になれとは何事ぞ。とてもの事にてあるならば。なをい千間を。われらかすみかとなすべきなり。爰にたつたる大夫殿。見しらぬがほにはゐたれとも。六條ぶねのせむどう。七月のはじめ。あひたさかたをこきいだし。八月のはじめ。越前の國をかや。つるがめつに聞えたる。せいじがもとを宿として。七里はむ。あらぢの中山かいづの浦よりふねをたて。大津ののほり大ちの。藤太夫かもとを宿として。一年に一度つゝ。おりのぼりし給ふ。ろくでうふねのせんどうと見なした事は空事か。今こそこめ見るとも。明年の夏の比。いづくにてもまいりあひ。あら口惜や此わむれひを申さむとて。から〳〵とわらひけれは浦の人々是をきゝ。判官殿でましまさばわれらかふねのつけ所やはかしろしめさるべき。事のこわらぬ其さきこちこよ浦の人々とひとりふたりにけてゆく。弁慶。つゞいておつかけて。何とて面々は。笈をからげてえさせぬそそれやまふしのかけおひ。わたくしならぬ事ぞとよ。みねの八だひ。どむどうどうじの。のりうつり給ふなる。かけおひを。ふぢやうのみにて。ときほどき候て。たゝはをくへきか笈からげてえさせよとつゞいておうて出ければ。たち戻手をあはせけむげにとが。さうばこそ。何事もうちわすれて御めむ候へ。少人も御座あれはてむまなむとの御用は。御めにかゝるへしといふ。さしもかうなる浦の人。御かいりきにおさ

れて。其後ものを。申さぬは。ことはりとこそ問えけれ（コトハ）判官むさしをめして。くがをゆかは此さきに。物うき事もおゝかりなむ。便船のたよりもあれかしと仰出されたりければ。むさし承り。ことのほかにはらをたて。そうしてわがきみの。爰にては便船。かしこにては便船と。びむぜんどのみをめさるゝによつて。かゝるむつかしき事の出來候ぞや。四國西國の御合戰に。みなふないくさのみにて御座ありし間。ふなぢの事をばよつく心得て候。あはよきふねをかいとつて。われとこきくだらんに。何の子細の候べき。判官げにもとおぼしめし。なをいの大郎（ヲヽ）をめして。此邊にうりふねや候御ひけいあれ。なをい承り。よそをたづぬるまでも候はず。こたかはやふさなみくゞり。石はり太郎よふこどりと申て。あまたのふねを持て候。御用にまかせてめさるへしと申。義經きこしめして。あらおびたゝしと持せ給ひたるふねや候。其中にとつても。小たかといへるふね。いか程もせよとて。義經のひさうにおぼしめす。白ざやまきの御腰物を。なをいの大郎（ヲヽ）に下し給ふ。なをい御腰物を給り。ふな具足ひし〳〵としつくろひ。ふねをしうかめて。はやめされよと申（上色サシ）十三人の人々は。われも〳〵とめされけり。うかりけるなをいのつを。事ゆへなくこき出し。順風をえてほをあげけり。雲海万〳〵としてきはもなし。雲の波霞のけふりわけがたし。さうはなをみちとをし。みきはの海はにしきにゝ。鴈北天に。とひにけり。いつれのせい月か。よしつねともろともに。かへらむ事をえむ事は。かむせう。じやうのなかめなり。浦山しやなかりがねは。はつきにならはきこそせめ。よしつねはいつの時に。みやこへとてはかへるへき。せめてたまつさはかりをは。ことつてむとのたまひつゝ。うたをよみしをつくり。かちをと

りほをあけて。なみちはるかに。ふかれゆく心（コヽロ）さしこそあはれなれ（コトハ）かゝりける所に。さどの國北山がだけよりも。黑雲ひとつたちおゝふ。雨か風かあやしやと。仰らるゝ所に。又越後の國さわうだうの上よりも。らいでむ雲をひゞかす。あはけしきのわるいは。山陰風のかくれじま。いつくにかある（カヽル）ふねよせて（ツノ色）此なむをのがるへしといふ。いはせもはてずして。大風木ずゑをふきくたきなぎさにいさごをとはすれはへい〳〵としたる雲海に。雪の山こそおほかりけれ。水を天にふきあけさかさまの雨とそなつたりける。上下ふねにゑい給ふ。其中にとつても。よしもりと弁慶。二人はかりこそ。大はたぬきにはたぬいて。ともへにたつてそまはりける。いかにもして此船を。いそへよすへからす。あらいそへふねをよせ。ふねそむじてはかなふまいい風にまかせてかぢをとれ。ほどもが風にもまれば。ほわたをきつて風をとをせなをしも風かはげしくは。大つなこづな切捨ともつなにいひつけひかすべし。とりかぢより水いらば。おもかぢへのりなをせ。かめかかたおかはせむぢやうばかりのたしなみにて。かゝる時には。前後ふかくに。見え給ふものかなやうふなぞこにおりたつて。あかゆをなりともかへ給へ。たとひ此ふねがきかいかうらひけいたむどくへ。おとさるゝと申とも。我〳〵二人あらん程はなむの子細の候へきぞ。わかきみと申。判官きこしめされてあのよしもりと申は。いせの國のものにて。渡りの船にならつて。ふなぢの事をも心うべきが。ふしぎやなむさしは。ぶむにもふにもたつしやなるか。ふなぢの事をもこれ程に心得けるかふしきやと。そゝろにほめさせ給ひけり（上ウトキ）あらいたはしや御前の。御みもたゝもましまさぬに。あらきなみ。こわき風によはりはて。たけとひとしき御ぐしを。な

みとなみたにゆりなかし。むつかる聲もよはりはて今を。かきりと見え給ふ。十一人の人々は。此よしを見まいらせ。けに〳〵ふうふの中程に。わりなき事はよもあらじ。いたはしや御前の。みやこにござの御時は。なゝえの屏風。八重のきちやう。九えのまむの内。みすふきかへす。かせをたにも人かといとひ給ひしに。今はいつしかかはりはて。かゝる遠國はたうにて。さてはて給はむいたはしやと鬼神をあざむく。どもからもふかくのなみたなかしけり かゝりける所に。只今まてはありともおぼえぬふねどもが。そのかずあまたほの見えたり。判官御覽じて。あれはたすけふねかうれしやと。仰られける所に。さはなくしてあかはたさし上たるむしやどもが。いかほともおゝくわき出たり。ふしぎにおぼしめす所に。ふねの内に聲あつて。宗盛ふしこれにあり。當國の九郎くわむじやこひしやと。よばはりかけちかづくと見ゆる。能登のかみ教經は。小船にかむどり一人あひくし。ちかづくと見ゆる。二位殿とおぼしき人。先帝をいだき申。唯今海底にみをしつめむとて。義經の方をうらめしげに見たゝせ給ふ。弁慶これを見て。引道せばやとおもひ。ふなそこにつつといり。ときむすゞかけうちかけ。ふねのへいたにつつたちあかつて。大音あけてよははる樣 昨日は西の海岸にて。たせひのなけきをえ。けふはまた。北國の江にして。かむせんなげきをなす事は。夢まぼろしのごとくなり。うゐの法はさなから。今吹風のことし。むさのくわむをなす事は。今たつなみのことくなり。大小のぎろむは。風によつてかたちあり。一つの風かあれはこそ。おゝくのなみもかたちあれ。風波の二けむは。まよひのまへの夢なり。ひとつのうみ。空海にして しやうとなしとさとる時は。風もなみもあらはこそあふ。いたはしや平

家には。さるべき知者のなければこそ。おゝくのおむりやうを。佛とはなさすして。しうちやくのとうじやうに。りむゐし給ふいたはしさよ。只今申弁慶か引道につき。ほつしむの一りをさとつてりむゐのさづなをはなれて。妙覺無爲の位につかせ給ふと申時。二位殿の聲として。むかしは一天のこくもとし万乘のせむしゆとありしかと。今はまたみもすそ川のなかれゐむりはていにみを入し。しうたむのていきう。しつとのじうねむは。いさごよりもなをおゝし。これによつて六道おゝくのさとをめくり三つ。はつなむのきうこうを。のがれかたくおもひしに。只今申。弁慶か引道につき。發心の一りをさとつてりんゐのきつなをはなれて。妙覺無爲のくらゐに。付たる事のうれしさよ。むかしはかたき。今はだうしと成給ふ。暇申てさらはとて。なみの底にいり給へは風もなみもしつまり。ふねは小浪にゆりすゆる。人々のうれしさ。たとへむかたもなかりけり

屋嶋軍

去間判官山伏の姿をまなび。下らせ玉いけるほどに。七十五日と申に。遙奥佐藤しのぶにつかせ玉ふ。判官武藏を召れ。日はやうこくを出部州を照し。漸々西山にかゝらせ玉うに。何にても宿取候へ。武藏承り。我笈に若君を入れ申したれば。龜井が笈に取かへ。れんじやくつかんでかたにかけ。爰にのぼれば弓手にあたつて。丸山一つそびゑたり。彼丸山の麓に。棟門高き屋形有。此家に立寄宿とらばやと思い。堀の船橋打渡り。笈を梅花によせかけて。内の躰を見たりければ〈差〉古ゑよしある人の住たるが。住あらしたるとおぼしくて。門はあれ共扉なし。築地はあれどおゝいもなし。かはらものきもくちはてゝ。きうたいはかどをとぢ〈曲〉葺は壁をあらそいてのきのひわだはこぼれおちちり〳〵水はもりゆけども結てとむる人もなし。扨出居〻見てあれば一ちやうの琴に一めんの琵琶をばたてならべてはおきけれども引ひく人のあらざれば常に松風吹落てざら心ヒツカニ少ハルりとひかんより外は琵琶琴しらむる人もなし。昔のかはらぬ物とては。なでんの櫻星の光り月の光りと日の光り水の底にて年をふるかはづ計ぞねをばなく〈詞〉内の躰の痛しさに。宿とらうずる事をはつたとわすれ。時を移してたつたりしが。西面をみてあれば。持佛堂とおぼしくて。ほうぎやう造りの御堂有。たちよりおがみ申に。阿

（毛利家本）

彌陀の三尊と。名譽の人丸をゑざうにうつしかけ。だうのあたりには四節の四季をまなぶ〈差〉先東は春に似て。大庾嶺の梅の花。昔ながらの。山櫻〈下詞〉ふしみさへだの花までも。木々の梢にさきみだり〈色〉ひはこがら鶯の。軒端の梅にはをやすめて。ねをだしかねたる所には〈曲〉けい〳〵ほろゝの雉子のこゑけいならばけいにてはなくしてなんぞや後のほろゝのおとといつも春かとみへにけり。南わ夏に似てすはまに池をほらせたり池の其中に蓬來方丈瀛州とて三の嶋をぞつかせたる嶋より陸地へはそりはしをかけさせ橋の下には浦嶋太郎が釣船童男卯女がうつほ船を五色の糸にてつながせてじやうらくがじやうの風ふかば汀へよれとつないだるはいつも夏と見えにけり西は秋に似て四方の梢の色付白菊たへぬ風情北は冬かとうちみへ。さんがくわがゝとそびへたりばいたゝをきなはをのが衣はうすけれど冬をまつこそやさしけれ冬にもなれば炭を燒く。すみがまの煙りのあをうてほそくたちのぼるはいつも冬とみへにけり〈詞〉あゝら面白やとうちながめ。山伏の聲たてゝ。宿とるはうのあらざれば。腰につけたるほらのかいの。緒をときのべて武藏。宿取の螺をふく。ひさしうたてど人おともせず。人はなきやらんとおもひ。立出んとせし時。風も吹ぬに妻戸がなる。そなたをきつと見たりければ。〈差〉りくしうにあまりしつしゆんにおようだる尼公の。朽葉の小袖髪にかけ。水晶の珠數つまぐり。口に佛言を唱へ。十三人の山伏達を。つく〳〵と御らんじて。何と物をば仰もなく。我子の事を。おもひ出して。先立物は涙也〈詞〉承れば御太將判官。山伏の姿を學び。此國へお下向のよしを申すが。我子の嗣信忠信。西國方にてうたれずし。お供申て下るならば。埴生の小屋に立寄。宿取たつたるらんも。是にはいかでまさるべきと。思

いまはせば小車の。やる方なきは心哉。古への山伏達は。よつつれ給ふ時は五人。六人こそを下り有しに。此度は上下十三人まします中に〳〵少人も一人御坐すや。法は万法行わ万行とて。萬の行の中に。山伏の行ほどものうき事はよもあらじ。あれほどいつくしく花のやうなる少人を。馬にものせ申しくだれかし。左なくは若き山伏の。かたにものせてくだらずし。じやけんのまなごをふませ申す事のいたはしさよ。少人の父母の。國元にまし〳〵て〳〵左社なげかせ玉うらめ自が明暮と子共が事を思ふにぞいとゝ思いのかはらずと泪にくれて立玉ふ〳〵なういかに山伏達。是は自が住あらして。見苦しくさむらうほどに。お宿はかなひさむらふまじ。下日の暮させ玉ぬ先に。他所にておやどを召れ候へ。武藏聞て。いや〳〵此家にて宿とりそんじ。野宿とつて叶じと思い。あゝらうたての仰や候。一通り一時雨。一村雨のあまやどりも。百性のきゑんと承る。ひちやうばうていれいは鶴の羽がいに宿をかる。達磨尊者蘆の葉にめす。ちやうはくばうが古へは。浮木に宿を取と社承り及て候ゑ〳〵我等計と思いなば〳〵とても。ねられぬ月の夜の〳〵野にふすとても力なし御らんぜられ候ゑ十羅刹女の御跡をつがせ玉ふべき少人を只一人ぐし申す出居迄がいやならば軒の下の御芳志の有べきなりとかりにけり〳〵尼公聞召れて。實〳〵此里にて。自が御宿をまいらせずは。誰やの人の心有てまいらすべきぞ。此方ゑ御入さふらへとて。山伏達をしやうぜらるゝ。各移らせ玉いて。れいじせんぼうをたつとうあそばす。せんぼうすぎぬれば。へいじ一ぐ。てうはながたに口つゝませ〳〵女房達にいだかせ尼公出合せ玉い。人の親の子を思ふ道ほど。哀れ成事よもあらじ。子共が行ゑのきかまほしさに。自ら立出玉いて。行ゑもしらぬ山

伏達に。すゞろに酒をしいられけり〳〵酒も半なりし時。尼公武藏が袂をひかへ。畫をやどを召し時。都の人と仰さむらふほど。吹くる風もなつかしうさふら。若御太將判官殿の。御行ゑばししろしめされてさむらうか。夢計自に。語りてお通りさむらへや。弁慶聞て。扨は我君の御下向が。遠國遠里にかくれもなくて。とはするぞとおもひ。尼公をはつたとにらんで。あゝらおかしの仰や候。山伏の名は。よのつね多しと申せ共。大將判官坊と云名をは。きいたり共存す。去乍山伏は。五人は五國十人は十國。しつたる方も候らんに。余の方へをたづねさうへ。此法師においては。いさしらぬざうとあいそうなげにこたうる〳〵尼公聞召れて實々尤御道理。人のゆくゑを尋申すとて。我先祖をば申さずし。お語りあれと申すほどに。お語りなきは理りさむらう。いで〳〵自か先祖を語りてきかせ申さん。是は領國の秀平が妹。出羽の庄司が後家次信。忠信兄弟が。我は母にてさむらうぞや〳〵一年御太將判官。此國へお下向有。佐藤秀平催し。十万余騎にちやくたうつけ。御上落の御時。君は向に見えてさむらう丸山の麓に御陳をめす。妻の庄司ざつしやうかまゑ參する。次信忠信兄弟。君の御伴と申す時。佐藤殿御らんじて。如何に兄弟よ。西國への御供は。國を隔て關をこへ。はる〳〵の道ぞかし。我又老躰にて。子共が姿を二度。あいみん事もかたし。兄お供を申さば。弟は國にとゞまれ。弟お供を申すならば。兄は國に留つて。老躰の父母がならうずるやうをみはてよ。兄が申しけるやうは。御諚尤にて候に。忠信はとゞまり候ゑ。なにがしお供と申す。又弟〳〵が申しけるは。おとなしやかに次信は。國にとゞまり玉いて。父母を慰めお申しあれ。なにがしお供と申す〳〵是が喩へかや諸佛念衆生。衆生不念佛。父母常念